
ネジリマ帳

s a n t a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネジリマ帳

【Nコード】

N4832C

【作者名】

santa

【あらすじ】

「捻り間」。それはある日、突然、曇り空にぱっくりと口を開けて現れる。それを目撃したものは未だ嘗ていなく、その目的とは、怪奇なる出来事をこの世に向かって無意識に吐き出すにある。不思議な感覚もとい体験をもたらす捻り間にお気をつけあれ。

女と電話 1（前書き）

これは根っからのホラーではありません。恐怖を与える物語ではないのでご了承ください。あくまでも不思議な物語の連なりとなっています。

女と電話 1

あるアパートの一室で電話がなっている。

“墨”に沈められたような暗闇が部屋中に広がっていた。

広々としたその部屋は閑散とし、どこか寂しい。それは日の光とは無縁の冷たい深海を思わせた。

今のところ、受話器を上げる者が居ない。

しばらく鳴り続けた結果、留守番電話に切り替わる。

長々と機械的な女の声が流れたあと、

【メッセージをどうぞ】

「・・・・・・・・。」

受話器の向こうの者は喋ろうとしない。

耳につく無音の中、受話器がガチャンと音を立てて切られる。

ツーツーツー……、

真っ向から突き放されたように再び静穏な空気が部屋に浸透する。
しん、と静まり返った部屋の中で『女』は我にかえったように電話を見つめた。

——電話が鳴っていたかしら、そうじゃなかったかしら。

電話に視線を注いだまま、女は心の中で首をかしげた。

確かに電話が鳴っているような気がした。

しかし女はそれに自信が無くてそれ以上考えることを止めにした。

女と電話 2

その夜、

電話は幾度となく鳴っては切れたりした。

その度に女は電話をとりそこねた。

実際、女は電話がなっているのか鳴っていないのか自信が無かった。

——いま、電話がなっていなかったかしら。気のせいよね、だって今は真夜中だもの。

こんな真夜中に何度も誰が電話をかけてくるというのだろう。少なくとも女の知人のなかに思い当たらなかった。

そんなことよりも今は、なぜか夜が長く感じる。ひどく、朝が恋しく感じる。

暗闇のなか、女は一人で妙な“喪失感”に苛まれていた。いつもより長く感じる夜、そんな中、女は電話を見下ろしていた。

——電話が鳴った気がする、幾度となく。

電話は確かに幾度となく鳴った。

留守番電話に切り替わり、機械特有の音が響いたのは数え切れないほどあった。

しかし、

女はそのどれも取らなかった。

鳴っているのに、女にはなっていない気がするのだ。

それが定かではないからかどうしても受話器を取る気にならない。

——嫌ね、眠りたいのに今日はなんだか眠れないわ。

女は先ほどから妙な違和感を首に感じていた。時間を気にして、時計を見ようかどうしようかと悩んでいた時。

遠くの空で小鳥のさえずりを女は聞いた……気がした。

——あら、やだ。もう朝なのね。

東の窓、わずかに開いたカーテンの隙間から部屋の中に日が差し込めた。

女の横つ面を柔らかい色の朝日が照らす、自然と女にはそれがまぶしく感ぜられなかった。あんなに朝が恋しかったのに日差しを浴びても嬉しくもなんと無かった。

——結局、一睡も出来なかったわ。これから仕事に行かなくちゃならないのに……。確か午後に会議が入ってたわね。

女がそう思ったとき、

確かに鳴っている。

女の眼下、見下ろした先の電話が。

女と電話 3

確かに鳴っている。

女の眼下、見下ろした先の電話が。

——でなくちゃ、電話が鳴っているわ。

女は電話が鳴っていると気づくことが出来て妙に嬉しかった。先ほどまで気になっていた首の違和感も心のわだかまりも今ではどうでもよくなっていた。

鳴っている電話を見下ろして、女は手を伸ばそうとした。

鳴っている電話を目の前にしたら誰もがそうする行動、それが女にはどうしてか出来なかった。

腕が動かない。足さえも…。

四肢が全く女のことを為そうとしない。

女の四肢が、動かないのである。

そうこうしているうちに、再び留守番電話に切り替わる。

——いやだ、取り損ねちゃったわ。

受話器の向こうで女の聞きなれた声がする。

その低い声は女をひどく愛しくさせた。

『夕日、俺だ…』

夕日とは女の名前だった。

女は受話器を取るのを諦め、じつ、と眼下の電話を見つめていた。その間も、男は喋り続ける。

『いま、そっちに行っても構わないだろうか？』

女から返答は無い。女は受話器を取ってくれないが、男は空虚に語りかけ続けた。

『…ごめん、俺が悪かった。お前に会って謝りたいんだ』

そう言つて、プツリ、と電話が切れた。

女は、ひどく嬉しかった——今にも泣きそうなほど。実際、女の頬は濡れていた。ずっと、以前から。

——嬉しい、まさか謝ってくれるなんて思わなかった。

女はつい最近、しいて言うならば先週の土曜日に五年間付き合っていた男にふられた。

いやだ、別れたくない、と女が泣いて請えば、男は、もう終わりなんだと首を横に振った。足に縋る女を蹴飛ばして男はアパートを去っていった。乱暴をされたことは幾度となくあったが、それ以上に愛しかった。

あの情景が、
今でも女の脳裏にやきついて離れない。妙な喪失感とは“これ”だったのだ。

女と電話 終わり

しばらくして、家の外で人音が聞こえた。

呼び鈴が静寂な部屋中にけたたましく響き、お次は割れんばかりに戸が叩かれた。

どん、どん、どん

部屋の中から返答は無い。

—— ああ、やっぱりあの人はわたしのことを思ってくれるのね。

女は男が謝りに駆け寄ってきてくれた事がただ嬉しくて、嬉しくて仕様が無かった。

『開けてくれ、夕日。俺だ、晴喜だ』

やはり、部屋の中から返答は無い。

しかし女はあえて声を出さなかったのだ。女が戸に鍵をかけずに一晩を過ごしたのは、男がかけつけてくれるという希望を少しでももっていたからだだった。

男がドアのぶをまわせば、開くようにしてある。
男が部屋に入ろうとすればいつでも入れるのだ。

—— ドアは開いてるわ、ハルキ。

ドアのぶがまわり、ガチャリ、と戸が開く。

『許してくれ!』と、部屋の中に駆け込む男が居た。男は肩で息をし、真摯な顔をしていた。それは紛れもなく女の付き合っていた男その人であった。

『な、なんだよ……』

カーテンの締め切った薄暗い部屋の中、男は呟く。

駆け込んだ男は天井を仰いだ刹那、絶叫にも似た悲鳴を腹の底から吐き出した。

—— ちょ、ちょっと、どうしたの? どうしたのよ、ハルキ。

腰砕けた男は言葉にならない声を震わせ、浮かぬ腰を必死にあげようととしては何度も崩れた。真っ白なその顔が蒼白に変わっていく。

—— ねえ、いったいどうしたっていうの。なんで叫んだりなんかしたのよ。

女は驚愕する男を見下ろして、ただ“落胆”した。

—— どうして抱きしめてくれないの。座っていないで、わたしを抱きとめてちょうだい。

壁に助力を借りてやっとの事で男はのめる様に立ち上がり、部屋の外へと逃げ出すように飛び出していった。

誰か“ケイサツ”を呼んでくれ、と男の大声が部屋の外、遠方から尾を引くように聞こえた。

—— 警察ですって?

女が見下ろした先、白い封筒が忘れられたように落ちているのがついた。

——— なにかしら、あれ。

女が先ほどから見下ろしている先、白い封筒の表、唐紅の歪んだ文字がぼんやりと目立ち始めた。

——— まさか…。

女が見下ろした先、封筒には“遺書”と……………そう書かれていた。女は叫ぼうとした、いやだ、と。

しかし、これが出来ない。声がでない。首の違和感、その正体が分かった今となっては自分がした行動が拭えぬほど未恐ろしい。

朝子と夜子 1

野田 夜子 と 野田 朝子の場合。

“わたし”と朝子は、名前の通り正反対な性格をした双子だ。

女の子だというのに取っ組み合いをして、二人が喧嘩をすれば顔に痛々しい傷がつくのは当たり前だった。小さい頃から仲が悪くて両親を心底困らせた。

普通、双子というのは心がひとつで仲の良いものだよ、といってお兄さんが話したことがあったけど、わたしと朝子は本気になってその説を否定した。誰がこんな奴と、と決まり文句を並べて睨みあった。

なにもそんな本気にならなくても、と苦笑するお兄さんに向かって二人で知ってる限りの罵詈雑言を吐いた。罵詈雑言を吐く時は、不思議と朝子とわたしは気があった。

でも、気が合ったのはそのときだけ。

いや、その時だけではないかな。

服の好みは全く違うけど、好きになる人は同じだった。

信じられる？

性格はいがみあうほど醜い二人なのに好きな人が同じなんて、笑える。

だけど一度笑えないときもあった。

というのは、中学2年生のときだ。

当時、わたしには本気で好きになった人が居た。その人に告白したという気持ちは無かった。ただその時は好きなだけで良かった、

と自分で納得していたのだけど、いざその人が朝子と並んで楽しそうに話していたのを見かけると身体に火がついてしまうんじゃないかと思うほど一人でムシヤクシヤした。許せなかった。同じ顔をしたあの子が、なぜ？

「なんで・・・一緒に歩いてたの」

帰宅後、勢いあまってそのことに触れると朝子は嘲笑を浮かべて、

「夜子、あの子のこと好きなんだ？」

と、勝ち誇ったように言う。

もともと仲の悪いわたしたちだ。恋仲の話になると猶いっそう醜くなる。

「知ってたの...？」

「知ってるも何もみんな噂してるよ。夜子の好きな人はあの子だって。噂されてるのを知らなかったのが自分だけだなんて、間抜けだね！」

「...知ってたくせに。わざと・・・一緒に仲良くして・・・それで、わたしをバカにしていたっていうのね...？」

朝子はスポーツ万能。わたしはどちらかと言うと文系。

朝子は勉強が得意、わたしはそこそこ。

朝子は明色の服を好む。わたしはダークな服が好き。

朝子はポジティブ、わたしはネガティブ。

唯一の共通点といえば、仲が悪いことと好きな人が同じだと言うこと。

「わざとなわけじゃないじゃん。わたしだってあの子のことが好きなん

だよ」

「うそだ！わたしが・・・朝子はただわたしが負けるのを楽しみにしてるだけでしょ？そうやって私を見下してるんだわ」

「なんでそうなるワケ？バカも休み休みのいいな。いい？わたしもあの子が好きなの。だから話しかけて一緒に帰ったの。それを、あんたの了承がいるとも思ってるの？だとしたら、夜子は本当に馬鹿げてる！！」

きつとわたしは知っていた。

わたしが双子の朝子に劣るということ。

わたしは小さい頃から優劣で物事をはかるような子だったから、私と同じ顔をした朝子が一歩前にでると決まっていっても自分が乗り遅れているような気がして仕様がなかった。

そうなると憎い気持ちしか浮かんでこなかった。

どうして同じ姿をしている朝子に、同じ姿をしているわたしが劣るの？

一体、なにが違うというのだろうか。

だからあの時もそうだった。

話し掛けたことも無い好きな人に、朝子は一緒に笑って話せるくらいのところまで行っている。なのにわたしは勇気が無くて遠くで見ていることしか出来ない。

そうなると悔しい気持ちとカッとなった気持ちが醜い言葉に感情を変換しだす。

「うそだわ・・・絶対に好きじゃないでしょ。ただわたしを最高にバカにしたいだけ・・・」

「はあ？なんで分からないんだよ。どうして悲観的にしか見れないのさ。悲劇のヒロイン演じて悦に入るのはやめなよ。ほんつとに気

味がわるい。夜子はバカだな！」

「やつぱり…っ。やつぱりバカにしているじゃない！！わたしを見下して…さぞや気分がいいのでしょうね」

私と朝子の喧嘩は世界一醜い。

お互いの醜い部分をぜんぶさらけ出して、それでドロドロとした深い部分まで続ける。

手が出るのはもっと先のことだ。

手を出すのは私が朝子か。さきに切れたほうが悪いだ。手を出して顔に傷を作って…

ああ、なんて醜いんだろうか。

朝子と夜子 1 (後書き)

野田夜子は、のだ・やこと読みます。

朝子と夜子 2

“私”と夜子は双子だ。

アクティブなスポーツが大好きな私は同じく体育系のあの子を好きになった。同じサッカー部だったから話もあったし、なにより性格がぶっ飛んだクールな子だった。

だから文系の夜子があの子を好きだと知ったときは正直驚いた。だからといってその時の私が身を引くという考えには到らなかった。中学二年生のとき、あの日、夜子がいつも以上に悲観的に見えて喧嘩をしている間も悲しくて胸が一杯になった。夜子には笑っていて欲しいのに、私と一緒に居るといつも悲しい顔をする。

同じ血の通った姉妹なのに・・・しかも双子なのに・・・どうして私達は仲良く出来ないのだろうか。

自分が一步後ろに下がって“ごめんね”と謝れば丸くおさまるようなものなのに、私はそういう事にかけては不器用だからあの時も醜い喧嘩をして終わってしまった。それから自分の部屋に戻った時も心のモヤモヤをどうにも出来なくて側にあったクッションを思いっきり蹴った。私は本当に不器用なんだ。

「野田たちってさ、姉妹なのにすっげえ仲悪いよなあ」

あの子が会話にそんなことを引つ張り出してきた。その日も一緒に下校していた。

「私と夜子？」

「うん。なんでもお前の姉ちゃんのほうがヒドいんだろ？殴るとか言うじゃん。正直いつて怖くない？」

私と夜子は事実殴り合いの喧嘩をする。

けど・・・そのことを肯定していいのは私たちだけだ。私たちだけ

なんだ。

「それ、誰から聞いたの？」

「えっ…っ。みんなが…言うから…さ。」

ふふふ、と私は笑った。不敵に。

「ウワサって八割がたウソなんだよ」

「えっ…そうなの…？」

「そうそう。私と夜子は喧嘩するけど仕掛けてくるのはこの私なんだから！夜子は大人しい子だから逃げてばかりいるの。殴るのは夜子じゃなくて……実はこの私なの」

だから、と私は満面の笑みを浮かべて——あの時は自分でも恐ろしいくらいの満面の笑みを浮かべた——あの子に言ってやった。

「ねえ」

と、あの子に話し掛けると、可愛そうに、あの子はびっくりして飛び跳ねた。

「もし夜子と私とどちらかを好きになるんだったら…断然、夜子をオススメするわよ。だってあの子、わたしみたいに人を殴ったり蹴ったりしないもの」

それからあの子は私とは一切お喋りしなくなった。

私には近寄らなくなっただし、——私の言葉が裏目に出たのか、朝子もあの子からスルーされてる——通り過ぎるときなんて道を大回りして通り過ぎていくもの。

ちよっと言い過ぎたかな、と思った。

私達双子は喧嘩するけど・・時に醜く喧嘩するけど、少なくとも私は夜子のが好きだ。

双子の片割れとして、一人の妹として、血の繋がった姉妹として私は夜子のが好きなんだ。

ただ、この気持ちを伝えることの出来ないほどお互い不器用なだけ。いつか喧嘩一つしないで仲良く手をつないでお散歩してみたい。今はいがみ合うほど仲が悪くても、きっと絶対に仲良くなってみせる。

だって、私達せつかく血の繋がった姉妹だもの。
ねえ、夜子。

わたしはそう思っただけど、夜子はどう思っかな？

朝子と夜子 終わり

『もしもし？朝子ちゃん？お母さんだけど、今どこに居るかしら？』
私は携帯を肩と耳にはさんで、携帯電話の向こうのお母さんに答えた。

「いま？今ねえ、友達とちょうど別れたところだよ。久しぶりに部活が早く終わったんだー」

『どこかしら？』

「ああ、駅前のケーキ屋」

『あら。またケーキ食べたのね？太るわよ』

「だいっじょうぶ！私、夜子と違って運動してるからそんな糖分少し動けばゼロになるの。なにより炭酸とってないから身体もだるくないし。来週の試合は絶対勝ってやるんだ。なんてったって、向こうは去年こっちがボロ負けした・・・」

はいはい、と電話の向こうのお母さんは呆れたように笑った。

『駅前のケーキ屋さんならスーパーが近いわよね？』

うん、とおざなりに返事をした。どうせお遣いを頼まれるのだろう。

『今日はカレーなんだけど、カレー粉を買うの忘れてたのよ』

「駄目じゃん」

『だから、カレーとニンジンとジャガイモを買ってきて』

「…って、お母さん。本当にカレー作る気あるの??」

まあ、いいや、と私は適当に頷いて、

「わかった。買ってくるものはそれだけだね?」

『そう。お願いできるかしら?』

「まかせて。すぐ帰ってくるから」

『助かるわ、朝子ちゃん』

携帯電話を切った。

駅前の時計を見ると、時刻はちょうどPM5:30を指していた。これから急いでスーパーで頼まれた物を買えば三十分の内に家に着

くな、と見積もりを立てた。人けのある通りのなか、早歩きをして雑踏の中に入った。

すでにどっぴりと日が暮れて、辺りは真っ暗。

明日に控えた放送部のコンテストの練習をしていたら帰宅が遅くなってしまうた。

お母さんには朝のうちに遅くなると伝えただけ、まさかPM7:00を過ぎるとは思わなかった。

真っ暗な夜の道は怖い上に、寂しい。駅前を通り過ぎて山が迫る道に入ると、人気は全く無い。最近、ここらで変質者が出るといつていた。それを思い出して自然と早歩きになる。ここを通り抜けないことには住宅地に着けない。

と、そのときだった。携帯電話が鳴った。

朝子からだった。

あの子が電話をかけるなんて珍しい。と言うよりも、喧嘩ばかりの私達だから必要最低限のことしか連絡を取り合わない。わたしはつつけんどんに電話に出た。

「…なに？」

『ああ、夜子？』

「そうだけど、で、なによ」

『そんなに怒らないでよ』

イライラ、とわたしは次の朝子の言葉を待った。

『あのさー、夜子。私さ、今あんたの後ろで話してるんだよ』

えっ、と私は真っ暗な通りを振り向いた。

確かに、サッカーのユニフォームを着た朝子が立っていた。その手に近所のスーパールの袋が握られている。

「やつほー」

「な・・なによ。後ろに居るんだったら別に携帯電話つかわなくてもいいじゃない」

ははは、と朝子は笑ってわたしと並んで一緒に歩き出した。
なぜか朝子はいつもと違って刺々しくなかった。

「お母さんにお遣い頼まれちゃってさ。今日はカレーだって。よかったね、夜子。夜子ってカレー好きだったよね？」

「えっ？・・うん、好きだけど…」

「覚えてる？私たちの五歳の誕生日もカレーだった」

「五歳の誕生日？そんなの覚えてるわけじゃないじゃない」

「えーっ？私は鮮明に覚えているのになあ。なんで夜子は覚えてないんだよ」

「そんなの覚えてるほどわたしはめでたくないの」

「こつちだってそんなにおめでたくないけど、ちゃんと覚えてるよ」

「うるさいわねー・・。いちいちなんなのよ。五歳の誕生日がどうしたわけ？？」

ああ、と朝子は懐かしそうに星空を仰いでペチャクチャと饒舌に話し出した。

わたし達二人の幼い頃から今に至るまでの思い出を。

話が中学二年生のときにお互いが好きになったあの子の話になった。まさか朝子がわたしのためにあの子にそんなことを言っていたなんて知らなかった。

少し・・いや、かなりびつくりした。

「そんなことがあったの…？」

「そっ！だけどさ、あの子だったら私達双子のどちらにも話しかけてこないじゃん？私は夜子のためを思って言ってやったのに。結局ど

「うちも怖がられてるんじゃないあ、大損だよな」

「やだ。だからわたしを見る目が変わってたのね？どつりであの子、違う感じがしたんだわ」

「へへへ。ごめんね。それ、私のせいだ」

朝子が始めて素直に“ごめん”といった。

わたしはしばらく道に立ち止まって呆けてしまったけど、

「ううん。・・・こちらこそ、あの時はゴメン。それと、ありがとうね・・・」

自然と“ありがとう”と“ごめん”の言葉がわたしの口から出たのはびっくりした。

お互いしばらくのあいだ、見詰め合っていたけどおかしくなつて噴出した。

不思議だ。

この16年間、莫迦みたいに醜い喧嘩をしてきたわたしたちなのに・・・

この瞬間、この刹那で世界で一番仲の良い双子になれた気がした。

「朝子、来週ってサッカーの試合よね？わたし、朝子のサッカーしている姿ちゃんと見たこと無いから見に行きたいなあ」

いいでしょ、と朝子の顔を覗き込んだら、朝子はギクリと顔を強張らせた。スーパールの袋を有り得ないくらいぎゅっと抱きしめて首を横に振った。

「えっ・・・どうして？ ああ、やっぱりイヤかしら？」

「そんなんじゃないよ。そんなんじゃない」

と、朝子が言ったところで家の近くまでたどり着いた。
とても不思議だった。あの暗い通りを、まるで飛び越えたかのように
すぐに家に着いたのだ。

ふと左を見上げれば家の明りが点いていないことに気づいた。連なる
家々の中で電気がついていないのはわたし達の家くらいだった。

「あれ？おかしいな。家の電気がついてない。あ…っ。お母さ
んの車が無いじゃない」

「ねえ、夜子！！」

朝子が叫んだ。

「そんなに叫ばなくてもちゃんと聞こえてるよ」

「うん、ごめん…。でもっ、夜子！私、あんたのことが大好きだ
！！」

わたしはびっくりして目を皿にして朝子を見つめた。

「たくさん喧嘩したけど、たくさんいがみ合ったけど、私たち最高の
双子だよ」

何を言い出すのよ、と言うと朝子は首をまた振った。

「ねえ、夜子。わたしはアンタのことが好きだ」

「…どうしちゃったのよ、朝子…」

「夜子は私のこと嫌いじゃない？」

朝子はわたしにスーパーの袋を手渡した。わたしも何の違和感も覚
えず受け取った。

「嫌いじゃないよ。だってわたしたち姉妹じゃない？しかも双子よ。これから仲良くなっていけるわよ」

につこり笑んで、わたしは朝子の肩を軽く叩いた。素直に物事を言える自分に驚くと同時に、朝子と最高に仲良くなりたと思った。鞆の中をあさって家の力ギを探していたら、朝子はいとおしそうな声で言った。

「夜子、私達は最高の双子だよね？」

「そうね。今からならきつとなれるわ・・・」

あ、あつた、と力ギを取り出したときだった。

携帯電話が鳴った。静かな夜に名残惜しそうに響く。

「もしもし？あ。お母さん？どこにいるのー。えっ。いま？今はね、朝子と一緒に家に着いたところよ」

お母さんの声が止んだ。

しん、と全てが静かになる。お母さんの声はいくらか低く、まるで泣いた後のように声がかすれていた。向こうが喋らないからこっちから喋った。

「ね、早く帰ってきてよ。わたしと朝子でカレー作るから。ねっ、朝子」

朝子を振り向くと、そこに朝子は居ない。

あるのは夜の黒い虚空だけだ。

さっきまで感じていた優しさが一気に冷めた。けれど、朝子が握っ

ていたスーパーの袋はあったかい。

『夜子ちゃん・・・っ』

わたしは真っ白なスーパーの袋を見下ろして、お母さんの泣き声を聞いていた。

『夜子ちゃん・・・っ、朝子ちゃんが・・・朝子ちゃんがね・・・っ、うう・・・朝子ちゃんが・・・!!』

うわああ、と泣き叫ぶお母さんの声。
わたしの手にはしっかりと、朝子から受け取ったスーパーの袋があった。

ねえ、朝子。

本当に、ごめんね。

見てる 1

社 瑞希。^{やしろ・みち希} 20歳。

この名前だけでオレを女だと勘違いして勝手にがっかりする奴がいる。

まあ、オレの名前なんかこの際どうだっていいんだ。

この話には関係のないことだからな。

「おなべの中が白いよっ!? げっ、カビじゃん。どうやったらお鍋にカビを繁殖させられるのよ」

くどくどと文句をたれながら、妹の海^{かい}が台所で忙しく掃除をしている。

まさか。妹と一緒に住んでいるわけじゃない。

三つ離れた妹の海は母さんに似てお節介をやくのが趣味で月に1、2回オレの家に来ては掃除をして帰っていくのだ。帰り際に母さん顔負けの小言を残す。

「きゃっ、ゴキでた! お兄ちゃんっ、退治して!! きゃーっ」

「あゝ…。ほっとけほっとけ。ゴキブリは古きよき隣人だ」

ラジオから deep purple の名曲が流れてくる。

その太く抗う事の出来ない圧倒的なリズムに合わせて真っ白な紙の上にペンを走らせた。まるで正反対な絵が紙上に出来上がりつつある。

小学校に上がるまでお巡りさんになるのが夢だった。

小1から小6までの夢は漫画家で、中学の夢はイラストレーター、高校に上がる頃には将来のきらきらした夢がさっぱり消失していた。挫折。

当時、高校生だったオレには壁が見えたんだろうな。要は目の前に

立ちほだかる限界という名の壁によじ登ることなく諦めてしまった。それで、いま一体なにをしているのかと言うと、気ままに絵を描いているんな所に送っている。お偉いさんたちの脈があるか、無いか。本当は脈があつたほうが喜ばしいのだろうが、このフリーター生活も気ままに悪くない。食っていけないこともないし、煙草を吸っていけない事も無い。本気になって夢を追いかけるのは中学生で卒業した。

「ねえ、お兄ちゃん」

「んー？」

「どうして人間って煙草なんか吸うの？吸ってると見た目がカッコいいから？」

「恰好よく見えるからか……。なに、そんなに恰好よく見える？」

海に向かつて煙草を吸う真似をしてみせた。かわりに台所の海は肩をすくめて頭を捻って見せた。

「別に。オレは恰好よく見られたいから吸ってるんじゃない。ただ、吸っている間はストレスがぶっ飛ぶんだよ。吸っている間はどんなに嫌な事も、どんなに手におえない事もオレは忘れられるんだ」

「ふうん。なんだかウソみたい。ストレスが消えちゃうなんて魔法みたい。ね、そう思わない？」

オレは生返事をして済ませた。妹と煙草で盛り上がるってのも無いだろ。

「わたしもタバコ吸ってみたい」

「ジョン・コンスタンティンになるぞ」

「は？」

いよいよ絵が佳境に入った。海が台所周辺の掃除を終えたのと同じにオレも絵を書き終えた。

出来上がった絵を覗き込んで、感嘆の声が上がる。

「わっ・・綺麗なひと〜！だれ？その人」

「ん？うん…、まあね」

曖昧に返事をしたのが悪かった。海が奇妙な声を上げてオレをからかった。

「は・は・は！」

「なんだよ・・気味悪いな」

「さては瑞希くん。新しい彼女だね！？」

「違うよ」

「でしょうね。だってこんな汚い部屋になんか誰もあがりたいとは思わないもの」

海は一気に冷めたように長嘆する。

「想像上の人？」

「いや。よく見かけるんだよ」

「どこで？」

「うん、近くのマンションで」

「やだ。その人、お兄ちゃんの何なの？」

「見かける人」

お兄ちゃんリアルに気持ち悪い、と海が立ち上がって絵を取り上げた。失礼な奴だ。

「あ・・！！」

刹那、海が叫んだ。なんだ・なんだと海を見上げると、

「私、この人、知ってる」

「えっ。本当か!？」

海は目を瞬かせて、次の瞬間には口角をニツと上げ、意地の悪い笑顔を浮かべていた。こりゃあ、まるで悪役の笑みだぞ。

「うゝそおだぁーよぉー!」

あつはつはつは、と海は何かおかしいのか、正に頭が悪そうな馬鹿笑いをして玄関まで大股で歩いていった。それからヒールの高い靴を履き終わると側にあつたバックを肩にかけた。

「ウソか本当か分からない絵ばかり描いていないで、すこしは真面目に働いたら？」

オレは、海に不興だったタバコを吸う真似をして追っ払った。
海が帰ったあとは、再び絵に没頭した。

長い黒髪に、愁いを帯びた面。

紺のソックスに、清潔感の漂うセーラー服。

ふと目を合わせると力なく微笑むその儚さ。

きつと触れてしまえば粉々に砕けてしまうほど、彼女は繊細なんだ。

触れてはいけない。

触れたら、きつと・・・

あの子は砕けてしまう。

見てる 2

その子は近所のマンションの5階に住んでいる。

ベランダの手すりに頬杖をついて、彼女はいつも眼下にある小さな公園を見下ろしている。だいたい昼下がりに彼女はベランダに現われる。

時々、重たらしい溜息を落としては長い髪を風に任せて彼方を途方も無く眺めている。

オレが公園のベンチに腰掛けてスケッチブックを開けば、こちらから意識して見上げなくても彼女から強い視線を送ってくる。

こう言ったらのぼせた奴だと思われても仕方ないだろうなあ。

だが、彼女は確かに“オレ”を見下ろしてくるんだ。そしてオレも少し離れた頭上を見上げて彼女に力なく微笑む。それに応えるかのように、彼女は不浄の一欠けらもない清い微笑を返してくれる。

それからオレは午後の公園のベンチに座ってひたすらスケッチブックに彼女の姿を描き出す。側で近所の子ども達がかしましく騒ぎ立てていようが、大工事があつてようが、空でヘリコプターが爆音を立てていようが、なに一つ気にならない。

ちよつと前までは人気の多いところでスケッチブックを開くことに躊躇いを覚えていた。なにせいい年した男が天気の良い昼下がりに働かず、タバコを加えてスケッチブックを広げているんだぞ。しかも、ガキたちの聖域である公園の汚点となつてマンションの高嶺の花を見上げてるんだ。その姿はきつと上手く形容できない。まあ、海の言うとおりオレは気持ち悪いんだろう。

「・・・よし」

出来上がったスケッチブックを見て一瞬、よし、と素直に思えたがやっぱりだめだ。オレは静かに五階を仰ぐと彼女の表情をまじまじ

とみた。彼女は少し小首をかしげてオレを見下ろしてくる。その表情は夢中で美しい。

しかし、オレが描く彼女はどこか本人と何かが極端に違う。

その雲泥の差が一体なんなのかオレはペンを走らせ終わっても分からないでいる。こうして彼女がいるマンシヨンの側にある公園まで出向いて、毎日のように写生するがオレが描く彼女はどれも本当の彼女とかけ離れていた。

「・・・いつたい、なにが違うというんだ・・・？」

スケッチブックを裏返して大きくマンシヨンにかざして見せた。いつも出来上がったら彼女にその日の出来を見せる。

ふと彼女を見ると、泣いていた。

ポロポロと朝露のような夢い涙の粒が彼女のつぶらな瞳から零れている。

またか。

この頃、彼女はオレの絵を見て泣くようになった。ひとつも言葉を交わしたことの無いオレだが、彼女がなにか本気で悩んでいることが分かっていった。

だが、

きっと触れてしまえば粉々に砕けてしまうほど繊細なんだ。

触れてはいけない。

触れたら、きつと・・・

あの子は砕けてしまう。

オレなんかが触れたら、きっと彼女は粉々になる。

気がつくとオレは公園のベンチで爆睡していた。横臥していた半身を起き上がらせ公園の時計を斜視すると短針は6時をさしていた。やばい、と思ったと同時に子ども特有の弾んだ声が側で三つ聞こえた。

見るとその子たちはオレのスケッチブックを勝手に開いて見ている。

「すげー。うめえー」

「かわいいー」

「このひとだれえ？」

泥だらけになった手でスケッチブックを逆様にしたり真正面から見たりして、小学校低学年らしき子たちはオレが起きたことに無頓着で喋っている。

「あー……。こら、君たち。それお兄さんのだから返してちょうだい」

こういうときのお子さんの扱いには慣れていないもんで、なんと言えば良いのやら。まだ覚めやらぬ眠気のなかでボーっとしたまま五階を見上げると、もちろん彼女がそこにいるわけでもない。西の空に夕日が溶け込んでいる時分だ。

「ね。これ、お兄ちゃんが描いたの？」

「うん・・まあね」

適当に頷いてベンチに起き上がると、髪の毛を二つに結った女の子がさらに話し掛けてきた。

「このお姉ちゃん、わたし知ってるよー」

「へえ・・」

「わたしのお隣りによく来るのー。お隣りさんはお兄さんひとりで住んでるのよー」

「へ・・・え・・・」

お隣りさん、か・・・。

じゃあ、彼女が決めてあそこに住んでいるわけではないのか。
にしても、午後からセーラー服を着てベランダに出るなんて、学校
はいつたいどうしているんだろっか？

さぼり？

・・・いや、でも、今は長期の休みの季節ではないだろうからなあ。
やっぱりさぼりか。

「お兄ちゃん、このひとのこと好きなの〜？」

「・・・・・・」

ポケットから煙草を取り出して加えたところまでは良かった。三人
のうちの一人の保護者らしきひとが、大声でこの子らをマンション
のベランダから呼んでいる。まるでオレが危険人物のような物言い
で早く帰って来いといっている。その視線が刃物のようにするどい。

「それじゃあばいばい〜」

「こんどぼくの絵をかいてよー」

「ドラ。もん描いて・描いて!!」

はいはい、と頷いてオレも人気の無い公園をおいとましようとした
時だった。

公園の入口前をもの凄い爆音を立てていかついスポーツカーが通り
過ぎていった。

あともう少し車の登場が早ければあの子達三人は完全に轢かれてい
た。

三人は無事道路を渡りきってオレに向かって元気に手を振った。ホ
ッと胸を撫で下ろしつつ、オレはゆっくり手を振り返した。

「あははは!」

高い笑い声がスポーツカーから出てきた。何気なくそっちを瞥見し

たつもりが、目が釘付けになってしまったのは言うまでもない。

「また今度も連れて行ってよ。部活なんか止めちゃうからさ。いっそのこと学校もやめちゃおうかなあ〜」

酔いどれよろしくあのセーラー服の“彼女”だった。

まさか、とは思ったが、彼女に相違ない。

酒のたくさん積み込まれた袋を抱えて車から出てきたのはスーツ姿の三十代前半の見たことも無い男だった。そいつは千鳥足の彼女を支えながらマンションに連れ込むように誘っていった。

きつとオレの視線に気づいたんだろう。
へべれけの彼女は肩越しにオレをちらりと見て、眉根をしかめてすく前に見た。

あの視線はまるで最高に汚いものを見てしまつて後悔したような顔付きだった。

彼女。 彼女。 彼女だ。 まちがない。 彼女だ。

だつ、と公園まで戻つて、いつものように五階のベランダを仰ぐとしばらくしてその五階の部屋の電気がついたのがわかった。

間違いない。 彼女だった。 あの、子だった。

オレがいつも愛おしさを覚える彼女なのだが、スポーツカーから出てきた彼女はまったく違う人物のように見えた。
まるで、オレがスケッチブックに描く、彼女そのものだった。

見てる 3

長い黒髪に、愁いを帯びた表情。

紺のソックスに、セーラー服。

ふと目を合わせると力なく微笑むその儚さ。

その子が、あのスーツ姿の男に虐められている夢を見た。

仰向けになった彼女は男に馬乗りされて四肢を精一杯じたばたさせて抵抗するのだが、スーツ姿の男は能面のような無表情で彼女の両手首をいとも簡単に縛りあげる。

男はおもむろに酒を取り出すと無理やり彼女に浴びせて、何かなんだか分からないくらい彼女を酒びたりにさせた。彼女が酒に咽るなか、彼女の側にオレの描いたスケッチブックが開かれていた。

スケッチブックに描かれていたのは男に虐められて泣き叫ぶ彼女の姿だった。

最高に悲痛な叫び声を彼女があげたところで夢が終わった。

行き場の無い怒りに目を覚まし、最高にあいつをぶちのめしたい欲望にかられた。

だからといって、オレが包丁を持ち出してあの階に殴りこんでいくほど最高にフリーキーな奴というわけでもなく、

ただ水一杯を飲んで、自分の想像力の豊かさを怨んだ。

（くそ……。へんな夢みさせやがって）

そのときは暫くあの公園に出向くのは止そうという気になったが、布団にもぐっていざ寝てしまうと、いつものようにスケッチブックを片手に公園に出向くオレがいた。

いつもの愁いを帯びた儚げな笑顔に、オレのスケッチを見て涙を流

す彼女が、それから一週間ほど続いた。

スポーツカーにのって現われたスーツ姿の男と彼女は、オレの想像が勝手に作り出した幻だったのだろうか。

ベランダにいる彼女とあの時見かけた彼女とでは明らかに雲泥の差があった。

儂さと猛々しそうな彼女。

ふたつは同一人物なのにオレには全くの別人に感じられた。

何が違うのか、はつきり分かった頭でその日も公園に出向いた。

そこにいるはずの彼女はそこに無く、すこしがっかりした気持ちで開きかけたスケッチブックを閉じると、射るような強い視線を感じる。

まさか、と頭上を仰ぐと彼女がいた。

あの憂いを帯びた顔を想像して上を仰いだオレだ。

そこに現われた顔が怨めしさに溢れた彼女だと見とめると、恐ろしさに背中を粟立たせた。

(・・・あの子・・・じゃない?)

いや、そんなわけではない。

黒い髪に、ちゃんとセーラー服を着ている。

しかし、

彼女は手すりに両腕を乗せると、オレを試すかのように口角を機械的に吊り上げた。

彼女と目があつたので控えめだが微笑むと、彼女は瞬き一つもせずじっと淀んだ瞳でオレを見下ろしてくる。あの日、スポーツカーから降りてきた彼女とはまた違ったような雰囲気を感じられた。

お前は何者か、と見るような目ではなく、見てろよ、と叫びそうなほど恨みに満ち満ちた眼孔だった。

けつたいなことあったものだ。

いつも見かける彼女じゃないとはつきり分かったオレはもはや彼女

を描く気にはなれなかった。オレが心の底からいとおしく思ったのは今ベランダに出ている彼女ではなくて、昨日までベランダに居てくれた彼女だ。

何が楽しくてお前なんか描くか、と思った矢先。

どん、と音がした。

大きな肉の塊がコンクリートに落ち込んだような音だ。

そう、人が飛び降りたような音がマンションの連なりに反響した。はっ、として無意識のうちに五階の彼女を見た。彼女の姿はそこに無い。だからといって地面に彼女の姿を見つけられるわけでもない。

（なっ、なんだ・・・？）

心悸がまるで耳打ちされるような心持ちであたりを見回した。それこそアスファルトの地面なんかにくまなく視線を走らせた。

だけど、そこに人の姿は見あたらない。

ましてや倒れている彼女の姿など、

見当たるはずも無い。

見てる 終わり

土日は外に出歩かず、スケッチブックも開かず家の中で過ごした。

解せない音が地面を叩いた日は気持ちが悪かったので何もせず大人しく帰宅したが、飽きもせず明くる日も公園に足を運ぶと彼女の姿を見とめて誰よりもほっとした。

彼女と言うのは、愁いを帯びた顔でもなく、猛々しい顔でもない、あの怨めしさを惜しげもなく放出した顔の彼女だ。

彼女を見とめるとげんなりしていったが、しばらく公園のベンチに腰掛けて今では味のしない煙草をふかしつつ、五階から見下す彼女とにらめっこを続けた。

物好きな男もいたもんだ。

彼女の三面性に勝手ながらに絶望を感じたならば、公園へ赴くのを絶てばいいものを好き好んで訪れたりする。てんでオレも救えない男だ。

にらめっこを続けていると彼女がまた試すように口角を引き上げた。
(ふん。お調子者もいたもんだ)

オレを見下ろしつつ彼女は長い黒髪を後ろに払った。こっちが瞬いている間に表情を重くし、例の怨めしさを面に出す。ころころとよく表情を変える器用なひとだ。

ずっと見ていたらこっちがやられる、とその時は思ったのだろう。今日はまともな絵がかけるわけがない、このくらいにして帰ろうかと腰を浮かせた時だった。見上げていた先の彼女がいつの間にかベランダの手すりに上がって、今にも飛び降りようとする。

見てろ、とさも言いた気にオレをじっと見下ろしてくる。するどい視線はもはや鋭利な刃物も勝てやしない絶対的な強さをひけらかし

ていた。

あの態勢は、誰が見たってわかる。
自ら命を絶とうとしている。自殺だ。

たまったもんじゃない、とオレがやめると声をかけ終わる前に彼女は眼下にダイブしていた。

ああつ。

もう、駄目だ。死んだ。

一気に体の力が抜けてガクリと膝を崩している間にも公園で遊んでいた子供達の明るい声はたえない。

はて、おかしいこともあったもんだ、と力ない視線を地面に這わせると彼女の飛び降りた姿は無い。

じゃあ、上だ。

と、上を仰ぐとそこには怨めしげな顔をした彼女が頼杖をついて当たり前のようにオレを見下ろしていた。何をそんなに驚いているの、と言いた気に眉を上げて見せた。

（見間違いないだろう。確かに・・・）

確かに彼女は飛び降りた。

マンションの五階からダイブしたんだ。

（きみは一体なんなんだ？）

そう思っただけ彼女を見上げているあいだに、もう一度手すりにあがってこっちに痛い視線を投げる。

見てろ、と言いた気な視線が再度刺さる。

二度目も確かに驚いた。しかし、これが3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8回・・・と続いていくと驚く驚かないの次元じゃない。簡単にいうと、

見ているだけで首が疲れた。

彼女はベランダの手すりに飛び乗って眼下に飛び降りる“自殺”を繰り返すだけであって、本当に死ぬわけではない。

どん、と飛び降りた後に残る音は確かに生々しく耳にこびり付くが、実物が地面で死んでいる姿を見るわけでは決してない。

じゃあ、はなしてオレが見ている彼女はいったい何なのか？
そこが問題だ。

「生霊だろう」

「生霊？それはどういう・・・」

「その名の通り、生きている霊だ」

「たかいつ隆一、すまないけどその説明だけじゃ分からない」

「時々、本人から分離して、勝手にある場所に現われるんだよ。本人と同じなりをしているが、本人ではない」

「それって化物か？」

久しぶりに会った友人は、腑抜けになって煙草を吸わずに灰皿の上で燃やすだけのオレを、不思議そうに眺めながら、あとを続けた。

「化物じゃあないだろ。本人が化物ならまだしも、生霊はそうじゃない。」

「こつちに危害を加えたりするの？」

その質問がいけなかったのだろうか。

隆一は、ときどき垣間見せる人を哀れむような表情をのぞかせて嘆息した。

「…おまえ、もう公園には近づくな」

「うん。うん、そのつもりだ」

「そうかな…」

隆一は雨が降りしきる窓の外を眺めた。その横顔は深海を思わせた。

オレが公園に出向かなくなつて一月が経つたと同時に、オレはきつぱり絵をあきらめて派遣会社に勤め出した。

隆一から忠告されてから公園には近づいていない。

きつと海の言うとおり現実か想像かわからないことばかり考えるのはやめたほうがいいんだろう。オレは、あの時、まさに極度に疲労していたんだ。

そう思つてオレは長いこと放置していたスケッチブックを指定されたゴミ袋に入れて、家を出た。これを処分してしまえば心が吹っ切れるはずだ。

捨ててしまおう。

これは社瑞希という若造の人生を綴つた物語に出てくる苦い断片の一つに過ぎないのだ。

儂き恋を連想して勝手に物語の登場人物を演じていたのはこのオレだ。痛い目にあつて当然だろう。

「おはよう」

「おはようございます」

近所のおばさんがばんばんに膨れたゴミ袋を捨てた後に、オレもあのスケッチブックと一緒に燃えるゴミとして手放した。

その日は自分でも上手く説明がつかないほど不思議なことに、勤めている会社に向かうはずの足が勝手に公園へと向かつていた。

莫迦なこともあつたもんだ。

まるでその行為は中毒に似ていた。止めるよ、と決心したように思わせて実は端から止める気はないんだぞと心の底でもう一人の自分と決断している。とにかくオレは彼女を一目見たくて仕様がなないんだ。

それで、いざ公園に出向いてみると、やはりそこに彼女の姿があつた。

じつ、とこちらが見つめても彼女はあの頃のようには見向きもして

くれない。しかし、その顔にオレの求めていた「憂い」があった。

彼女だ。

彼女が戻ってきてくれたんだ。

そう思った。

（こつちを見てくれないかな）

刹那、五階のベランダにいた彼女が手すりに飛び乗った。

（ああ・・・また生霊か・・・）

隆一という生霊なのか、とがつくり肩を降ろしていると彼女は綺麗に弧を描いて地面にダイブしていった。その姿を慣れた目つきで眺めていたオレだが、彼女が地面にぐしゃりと音を立てて落ちたところでようやく目が覚めた。

今度は、ホンモノだったのだ。

ワンオブスリーの存在 1

『おい、瑞希くん。起きろ』

『あ・・？ああつ。すみません』

似顔絵捜査官の社瑞希は、涎やしろみずきを垂らした何とも情けない寝起き顔を慌ててあげた。

『あ・・ああ、櫻庭か。なんだ？』

社はまだ寝ぼけた顔を正せないのか、机上に放られていた眼鏡をかけて目を瞬かせた。声をかけてきた人物が自分よりも年下の後輩と見たらすぐに体を崩す。

『なんだ。残業なのか』

『うん？ああ、まあね。例の婦女暴行事件の犯人像が厄介でね。有り得ない話なんだな、これが』

と、社は机をはさんで向かい側に座った人物に似顔絵を差し出した。櫻庭保は胡乱さくらはな者でも眺めるように社からそれを受け取った。幾多の似顔絵を眺めることしばし、保は開口一番に言う。

『なんだ。複数の犯行か？』

『さあ…』

曖昧に、確かな返答は避けて、社は今や冷え切ったコーヒーに手を伸ばした。

『なんで違う顔が六つもあるんだよ』

『さてね。しかし、今回の事件は奇怪なんだ。というのは、暴行された被害者に犯人は覆面を取ってわざと顔を見せるんだそうだ。しかも、覆面から現われた顔はどれも違う顔。だから複数の犯行だと考えられる、と上層部は言っていたな』

『へえ…』

保はまるで六枚の似顔絵を全て読み込む機械のように視線を紙上に走らせて犯人像を覚えようとした。

『なんでまた老婆に老爺なんかが…？あ。こりゃあまたどうして…』

息を飲んだ保は次いで大きな嘆息をした。その側で驚く保をサポ―トするように社は大仰しい苦笑をその顔いつぱいにたたえた。

『じいさん、ばあさん、まだ20にも満たないような青少年もいれば、30代前半のキャリアウーマンも犯行に及んだ。かと思えば体躯のいい坊主頭の大男もいる。さて今回の事件は複数の犯行か…それとも被害者の驚愕が生みだした幻か。一定性を欠いている。こうなると上層部はお手上げだ』

はっ、と保は官服のポケットに手を突っ込んだまま失笑した。

社は返してもらった似顔絵を見比べて今度は一段と大きく溜息をデスクの上に落とした。

『被害者が6人の今、何の痕跡も残さない犯人を上層部が血眼になつてさがしてる。いつ殺人に移るか分からんからな』

『まあ、よく勉強してるね。一介の巡査にしてはたいしたもんだよ。誉めてやろう』

『だてにそう何度も“ここ”に忍び込んだじゃないさ。なれたもんだよ』

澄ました顔をする保を見やって社が白々しくもこういった。

『…ああ。言い忘れていたがもうすぐ警部が飯から戻ってくるよ。だいたい刑事はここを出て小15分程度で帰ってくるんだ』

『へえ。そりゃあ初耳だ。じゃあお暇させてもらうよ』

ああ、と頷いた社は、ちゃっかりと出口に向かう保に手をひらひらと振った。

『櫻庭、あんまり出すぎた真似はするなよ。今は自分の地を固めるのに専念したほうがいい』

振り返った保は呆れた顔で、

『よく言うよ』

といって、いよいよ部屋を後にした。

後に残された社はふうと溜息をつき、改めて自分が描いた似顔絵を見つめて思った。

（うつむ。おかしい）

何かが、おかしい。

その何かとは似顔絵捜査官の社にとって明確なことだった。

どの顔も死んでる

顔が死んでる〃（イコール）人間じゃない者には結びつかないが、

うん、こりゃあ、いよいよやばくなってきたな

机の上にひしと広げられた計6枚の似顔絵は、被害者6人の記憶による犯人像であると同時に、警察の手元にある唯一の手がかりであった。

（どの顔も人間さまの顔をしているが“ほとけ”とは違って、また別の死んだ顔をしてる）

要は、

（全ての顔が作られた顔に見えるということだ。おれは被害者から言われた犯人の顔を描くだけであって、自らの私情を似顔絵にすることはない。むしろ今まで何枚も描いてきたが、これほどまでに違和感を覚えた事はない）

これは、

（なんか臭いな）

事件はいつも臭い。

臭く、そして残虐だ。

グロさも残虐さも、いつも“赤”をもつてなされる卑劣なこと。何が好きで赤が流れるのを好むのか、人間のグロの真理の深さとは底なし沼か奈落であるに違いない。底がないに決まっている。始まりがなければ終わりも無い。

どこから生まれていつ参入してきたかも分からぬ。そして今回の婦女暴行事件は残酷でかつ掴み所の無い事件である。犯人は夜道を歩いている女性だけを狙って、六回にも及ぶ暴行を続けた。それは現在も進行中であるに違いない。犯人が捕まるまでは事件は勝手に一人歩きできる上、多大な可能性が生まれる。可能性とはこつちにとつては悪い意味で、あつちにとつては嬉嬉なるものだ。

犯人が犯行に及ぶ場所は六件とも某公園周辺且つ住宅地である。一件、二件と同じ場所の犯行でなくとも警察官がそこら一帯に張ることは火を見るよりも明らかであるのに、どうやってか六件とも同じような場所で起こり、犯人は燃えカスも残さず姿を消すのに成功している。

正義を掲げる人間にも一瞬の間とは存在するようで、犯人はそこを突くのが厭に上手かった。そして何より痕跡を一つも残さないというパーフェクト主義者だった。

「顔を六つ持つオバケでもあるまいしなあ」

と、社は一人ごちて似顔絵をまとめた。

彼には彼なりに懸念があった。

被害者の言う通りに犯人像を六人と描いてきた。

こつといった場合、被害者の誰もがショックを受けていてもおかしくない。実際、六人の被害者はかなりの精神的衝撃と怪我を負っていた。メンタルとフィジカルの両面をひどく害されていた彼女らが多少あいまいな犯人像を言ってもおかしくない。

しかし、

（物事を考える時の人間の両眼は意識せずとも自然と上を向く。そして思い出す時はある方向へ向くのだが・・・）

六人の被害者はどれもが考える体をとった。そう。

どの視線も上を指していた。まるで聴取されている正に今、考え出したような風であつた。中にはまるで、ここに来る前に犯人像をちゃんと覚えてきたんですよ、と言いかねないほどはつきりと間断なく説明してくれた者も居た。まるで暗記のように社には聞こえた。しかし、何れにしても『考える』と『思い出す』は断然に違うことだ。

だからといってこれは一似顔絵捜査官の懸念であつて本来の事件と結びつくかどうかかも知れない。悪ければ上層部に笑い飛ばされて虚しく終わるのが落ちだ。

ここで自分の懸念を保に教えても差し支えあるまい。どうせ保はまだ新米の巡査だ。上層に席を取ってどっしり構えるような位にまで達していないのだ。

社は徐に携帯電話を取り出した。

「もしもし？ 櫻庭、お前におれの考えを聞いてもらいたい。例の六件の婦女暴行事件についてなんだがな」

『なんだ？ 早くしてくれよ、瑞希くん。今から周らなきゃならないんだから』

『うんうん。まあ、黙って聞いてくれよ。すぐ終わるからさ』

社は思っていること全てを保に吐き出した。

ワンオブスリーの存在 2

十分ほど前に壮年の女性から一本の通報があつた。

女性の隣家は、もう10年近く空家なのだが、つい先ほど二階の自室から窓を見下ろしたところ、空家の曇りガラスに人影が動いたのを確認したという。しかしそれきりで影は消えてしまい見ないという。中に誰か居るのか、居ないのかもさっぱり分らない。

「確かに見たんですか？もしかしたら新居者じゃあないんですかね」
そんなの有り得ない、という。

「なぜですか」

とにかく早く来てくれ。
じゃないと気味が悪くて眠れもしない。あの婦女暴行事件があつてから周りが疑わしく思えてならないのだと言う。とにかく来て調べてくれ、と。

今は頭上の“赤”を休めて、一台のパトカーが夜の小道にぽつかりと浮かぶように停まっている。官服を着た一人の警察官がパトカーから出てきた。

彼は上背のある青年でパトカーから出るなり大きく伸びをした。彼の名を富士衛ふじまもるといった。

「んっ！」

「おい…」

彼に続いて出てきたのは比較的背の低い女だった。

これも同じく官服を着てい官帽を目深に被っていた。

名を櫻庭保はなびら たけつといい、今回の物語の主人公である一警察官だ。

「通報があつたのはこの空家か？」

「ああ。そうみたいだ」

保は辺りをくまなく見渡した。音を立てない歩き方は猫のそれと似ていた。

彼らが目の前にするのは一軒の空家だった。通報してきた女性が言うにこれは何年も空家をしているらしいが、闇夜に浮かぶところからして不気味で人の出入りが無い家はまさに死んでいた。何十年とその場に置き忘れられたような佇まいを見て、富士が身震いした。

「今から入ると思うとぞくぞくするよなあ。なんかガキの頃に入つたお化け屋敷みたいだな」

「…言つてろ」

「おいおい、そりゃあねえだろ。つねねえ物言いだな」

「いいかい、富士くん。わたしらは遊びに来たんじゃあないんだ。通報があつてお仕事で来てるんだ。正義の名を掲げるが如し、いま、果す事に忠実でなくてどうするんだ」

くどくどと保が言うのを聞いているのかいないのか、はいはい、といつて富士は空家の門をギイと言わせた。何年も手を触れられないでいた門は、赤褐色に転じていちいち煩い音を立てる。

「おい…！」

「なに？」

「なにつて、富士くん。中にいるのが不審人物だつたらどうするんだ？ 相手がナイフを持ってるかもしれないんだ。こつちが堂々と入つていつて刃物を突きつけられてみる。もしくは逃がしてもみるよ。たいへんなことだつて分かつているなら、慎重に動いてくれ」

保はやはり音も立てない足取りで門の奥に入っていく富士に忠告したが、彼はまったく耳をかさないどころか歩みを荒々しくさせる。それを追う保はチツと舌打ちした。

「分からん奴だな…」

「おい、櫻庭。いいか？いないに決まってるんだ。外から見たところ人の気配がしないじゃないか」

「だから余裕でいいというのか」

「いいや」

富士はぼうぼうと延び放題のススキを掻き分けて空家の玄関前までたどり着いて、いちど後ろを振り向いた。

「いいや、さつさと終わらせようといってるんだよ」

保は眉をしかめて首を振った。

「もしかしてお前、例の事件を意識してるんじゃないのか」

「例の事件って・・・、六人のか？」

ああ、と頷く富士は小ばかにしたような笑い方をした。

「六人が襲われた周辺とはかけ離れたところにある空家だぜ。そうそう居るわけ無い。しかも、通報してきた婆さんの見間違えてこともある。もしくは野良猫が潜り込んだ、とかな」

「そこまで可能性を想像できるなら、なぜ君は最悪の事態を想定できないんだろう」

「確立があっても、そりゃあ取るに足りないほどのちっぽけなもんだからさ」

「ふん。よく分からないな、君の確立はてんで駄目らしい」

と、保は玄関前から反れて裏へ足を進める。

「おい、なぜそっちから？」

「わざわざ玄関から入るのも酷だ。ご丁寧にも犯人にお邪魔しますと告げるようなもんだろ。それくらいも予想できないとは君はいったい何を考えてるんだか」

「……」

富士は解せない顔つきながらも大人しく保の後ろをついていたが、途中で二手に分かれることにした。保にくどくど言われたのを肝に銘じた富士だ。それからは慎重に家の周りを伺った。

確認したところ、人の気配は外からでは感じられない。茶の間や各各の窓には雨戸が閉められて中を伺うことが出来ない。しかし、通

報してきた女性が人影を認めた場所でもある台所の格子窓は違った。玄関から反れて右からまわった保と、左からまわった富士が行き会った。

「おい。見てみる」

先に台所の窓にたどり着いていた富士が蚊の鳴く様な細かい声でいう。

「窓が開いてるぜ」

ほんとうだ、の意で保は頷いた。

「しかも、ほら」

と、富士はわくわくした顔付きで勝手口を顎でしゃくって示した。

「開いてるんだ」

保はいよいよ奮い立ってきたらしい。暗闇のなかで目をカツと開いてその通り猫のようだ。

「入るぞ」

と、彼女よりも先に富士が勝手口のドアに手をかけた。ドアは音も立てずに安易に開き、二人が順々に忍び足で入ると、そこには深深と真つ暗闇が満ちていた。僅かどころかかび臭い。

入ったら声を出さずに何かを伝える時は手で示すんだ、と保がいったが、手の暗号を解するには暗闇になれるのが必要で、それにはかなり時間がかかりそうだ。

忍者じゃあないんだから足音はたつ、と富士が訴えれば保は忍者でも失態するもんだぜとまじめに返した。

ワンオブスリーの存在 3

勝手口から入るとすぐ右手に台所があった。前を歩いていた富士が振り向いて、保に廊下の右を差した。

（おれは右から周る。櫻庭は左から攻めていってくれ）
うん、と頷いて保は愈々左へと歩みを進めた。

目がだいぶ暗闇に慣れてきたところで保はできる範囲で辺りを隈なく見渡した。見たところ空家はこちらにとって親切のようで、家財道具は忘れられたように置かれているが、辺りを見回すにはもってこいで部屋の襖と言う襖はすべて開け放たれている。しかし、逆になんと相手もこっちの動きを安易に見れるということだ。もし本当にこの家に不審者が潜り込んでいるとすればあちらからこの家に居たんだ。地の利を得てるのは当然あちらだ。だから保も迂闊に動けないで居た。やはり慎重になっってしまう。

台所を出て左を壁ずたいに進んでいくと、前方に和室らしき部屋が三部屋連なっているようだった。和室がはつきりと見えるところまでたどり着くと同時に、道が二つに分かれた。一方は和室に続く廊下と、もう片方は…

（風呂場か？）

暗闇のなかに遠めで古い型の洗濯機が見えた。脱衣所をへて浴室に繋がるようだ。保は迷った。どちらにいくべきだろうか、と。

この家は案外広いようで和室は一部屋で十畳はありそうだ。どちらに行くべきか迷っていると向こうの廊下からヒョイと富士の顔が覗いた。

富士は人差し指で自分を指し、次に浴室に向けた。自分が行く、の意だ。ふと彼の手をみると何かが握られていた。警棒だ。

（じゃあ任せた）

と、保は右の壁づたいに和室の連なりへと足を運んでいった。廊下の左手にはカーテンが閉められてい、おまけに大きな箆筥が廊下の

スペースを縦に陣取っていて非常に歩きにくそうだ。

こうも静かな夜で、人気のない空家になれば聞こえてくるのは自分の呼吸と間断ない心音くらいだ。耳を打って聞こえるような心悸を頼りに保は足の歩を進めた。

まず最初に一番目の和室に差し掛かる。

青臭くなつた畳みの上に転がっていたものは、おかっぱ頭の日本人形。

保はそれを見て口角をあげた。わざわざそこに寝転がっていないくてもいいものを。

日本人形が入っていたであろう硝子箱は人形の側で横に倒れていた。しかもひびが入って今にも割れそうだ。それはまるで日本人形が勝手に這い出たような形である。ぞつとするといえばそうかもしれないが、保は畳みの上でなく和室をくまなく見回した。八畳の上に日本人形と畳がある以上ほかに物というものはない。保は静かに、日本人形を見下ろした。ぴくり、とも動かないそれが今にも顔をあげそうな気がする。ありえないことが有り得る瞬間がくると信じているようなものだった。

疑い始めると全てが怪しく思えるのも酷だな、と彼女は和室の死角——四隅——を確かめた。いきものの気配は感ぜられない以上この部屋に要はない。

次は二つ目の和室だ。そこまで辿り付くのにあのお厄介な箆笥が前を阻む。

（うーん。小さい奴はこういうときに樂するな）

と、保はするとその横を通り過ぎようとした。

その刹那だった。

箆笥の横を通り過ぎる刹那に、足元に“いきもの”の気配を感じた。はっ、としたがもう遅い。すぐ足元にあるそれに足を取られるか命をとられるか。

しかし、

「にゃ〜」

箆笥の側で蹲っていたのは二つ目をぎらつかせた野良猫だった。

保は引きつった顔で猫を見下ろし、ふうと溜息をついたのちに猫を抱き上げた。

（驚かせやがって）

猫を反対側の廊下にはパツと放すと、猫は一度こちらを見たきり一番初めの和室に入っていた。

（もしかしたらあの猫が怪しい影の正体だったりしてな。あながち富士君は間違いじゃないのかもしれない）

不幸なことに、そこで保の懸念は消えつつあり、慎重さも徐々に薄れていった。

二つ目の和室は何も無い。あるのは虚無だけ。

三つ目の和室にさしかかったとき、保は歩みを止めた。三つ目は物置と化してい、人の踏み入る間などなく、そこは物が占拠したあとだった。さすがにここには人も入れまい、ともと来た道を引き返した。

二つ目の和室を通るとき、またあの箆笥を横切った。本当に不愉快なところに置かれているものだ、と保は一つ目の和室に差し掛かるひよいと頭を突き出し覗き込むと先ほどの野良猫が日本人形の頭に爪を立てて遊んでいる。不気味なシーンに保は目を皿にしていた。（……ったく。なんてこった。猫のいっぴきにこんなに慎重になっていたのか、わたしは）

やれやれ、と保の足取りが疎かになっていくことに本人はいつかな気づくよしもない。足音は立てるわ廊下をずんずん歩くわでもう何を気にしたのか判然としていない。

「おい富士くん」

（おお）

と富士は浴室にずっといた。

もう喋ってもいいのか？と訝しげに保を見てくる。

「きみ、君が当たっていたよ。怪しい影の正体は猫だったさ」

浴室のほうから出てくると、富士は納得いかないように

「ふうん」

と一声もらしたきりだった。何か君おかしいな、と問いたですと、
「いやあ、さ。おかしいんだよ。偶然かとは思うけど、この家の鏡
という鏡が割られているんだ」

保は首をかしげて浴室と脱衣所を見とめて頷けた。

脱衣所の鏡は物をぶつけられてヒビが入っていた。まるでくもの巣
がパツと広がったようだ。浴室の大きな鏡もそれと同じく粉々であ
る。

「へんだな」

「おれが周ってきた廊下にも一枚鏡がかけてあつたんだが、それも
こういうふうで。しかもさっき回った茶の間なんかはわざわざ手鏡
が箆笥から引つ掻きだされた後があつて、割られていた。鏡台なん
かは粉々だったぜ」

お前も見なかったか、と問われた保は首をかしげた。

「鏡はみなかったな。ただ、日本人形と割られた硝子箱だけだ」

げ、と富士は身を反らした。

「日本人形？」

「あとは箆笥に、物置部屋とかした和室だけだ。見る限り猫が犯人
であることは明らかだ。明らかとなつた以上ここにいるのも酷だ。

さあ、帰ろうか」

と、一番初めにここにたどり着いた富士のような樂觀性でいる。そ
の側で彼は鏡のことがどうにも気がかりらしく首を捻つては納得し
ないでいる。

「鏡がなあ……。どうにも不思議でならないな」

「鏡くらいなんだ。ここは空家だったんだぞ？持ち主が物をおいて
姿をくらましたくらいだ。何が起こつていてもおかしくないし、気
にし出したら仕様が無いだろう」

「でもなあ……。おい、櫻庭。まだ二階が残っているぞ」

富士は二階につづく階下で上を指差した。ああ、と保はおざなりに
返事をした。

「おいお前。どうしたんだ？正義のつもりじゃあなかったのか？いかげんな返事をしやがって、もつと慎重になつたらどうだ」

「君、いうけどね、割られた鏡をみたくらいで怖気づいてどうするんだい」

「ばかいえ。怖気づいてなんかいねえ」

ずんずん、と先に富士が二階に続く階段をあがり始めたのを確認し、やれやれと保が続こうとしたそのときだった。

先ほどの猫の鳴き声が和室の方から聞こえてきた。

階下で動かないでいる保を見やって富士がもどかしそうにいった。

「おい、どうした？」

「猫が鳴いてる」

「まどろっこしいな。お前捕まえて外に放してこいよ」

「うん。そうしよう」

二階は富士に任せて、保は浴室の横を横切りもときた道を引き返し始めた。

そのあいだも猫がにゃーにゃーと忙しく鳴いている。一つ目の和室に差し掛かったとき、そこに居ると思っていた保だ。そこに猫がいないのは明らかで隣りの方から泣き声がしている。

まったく、と口を開いて一つ目の和室の畳を見てぎょつとした。

「・・・・・・・・」

絶句。

猫が転がして遊んでいた日本人形の首と胴が離れて、それぞれ四方に飛んでいる。また派手に暴れてくれたもので、人形はもとの形を忘れたようにしんと転がっている。

さっきまでヒビの入っていた硝子箱は今や粉々に崩れていた。大方猫が暴れた時にぶつかって壊れたのだろう。

二つ目の部屋にさしかかるとき、やっぱりそこに箆筥がある。二つ目の部屋から猫の鳴き声が聞こえているのだと思っていたが、それはどうやら間違いらしく、鳴声はさきほどと同じく箆筥の横で聞こえる。ほんとうに箆筥の横が好きらしい。

保は身体を横にして、襖づたいに簞笥の横を蟹歩きをして進んだ。猫は忙しくにやーにやーと簞笥の横で鳴いている。鳴声はほんとうにすぐ側だ。

「お前ねえ、外に出してやるから待ってな…」

言いさして、保は心臓が飛び出す思いにかられた。

「にやー」

猫の鳴声はそこにあっても簞笥の横に“猫”は居ない。壁づたいに歩いた保とばかり対峙したのは、

「にやー」

と猫の鳴声を真似る、覆面を被った“あいつ”だった。

やばい、と気づいたときにはもう遅く、嬉嬉として覆面は闇夜に鈍い光を放つナイフを手に保に襲い掛かってきた。足が地面に吸着したように動かない保はナイフを避けようと肩を一方に捻るのが精一杯で、あとは襖と一緒に二つ目の和室に倒れこんでしまった

ワンオブスリーの存在 4

潮通しといえはわかってもらえるだろうか。

保は血液が体中の血管を光よりも速く加速するのを感じた。

襖ごと床に倒された際に、近所に不審を知らせるに足る音がした。

階上を見回る富士の助けを期待したが彼は期待を裏切り、姿を現さない。

覆面のナイフを振り下ろそうとする右手を止めるのが精一杯で、保は是が非でも回避する考えしかない。なぜ、“ここ”に覆面がいるんだ。危機的状況を前に保は憤怒に震えた。

「ふっ・・・ふふ！」

覆面はくぐもった不気味な笑い声をもらし、力を込めて上から保にナイフを突き落とそうとする。その力と保の必死に回避しようとする力がぶつかって押しつ押しされつが繰り返される。

ぐっ、と覆面の力が箆り切先が保の喉元に近くなった。

させるものか。

保は右足を疎かになった覆面の右わき腹横に滑り込ませて思いつき横に難いだ。一切抵抗することなく覆面は横にごろりと転がった。保は肩で息をして警棒を震える両手の平で構え直した。

「ふっ・・・ふふっ・ふふ！」

本当に気味の悪い笑い方をする。覆面はゆっくりと、転がった身体を起き上がらせるとナイフをおざなりに引き寄せた。その動きは時を噛み締めるようにゆっくりとしてい、まるで保との対峙を楽しんでいるようだった。裏返せばこちらが勝つと自負しているようでもある。確信しているのだ。

「・・・・・・・・」

保は六人の婦女暴行事件を頭に思い描いた。キーワードは覆面、ナイフ、切りかかり、暴行、殺さず、覆面を取り、自分の顔を示す。社の懸念は“顔”の死んだ犯人像。

死んだ顔？わかるか、そんなもの。死んだ顔だと？わかるか、そんなものが！

「あんた・・・例の6人の犯人だな・・・」

保は間合いを取りつつ問うと相手はふふッと一声もらして応えた。

「そっだよ」

声から察するに、

女か？

いや、男だろうか。なんとも奇妙な声だった。

「なぜ・・・。なんでここに居るんだ・・・」

「だってお巡りさんが野放しにするからさ」

「なぜ・・・犯罪なんかを、どうして襲ったりするんだ」

保は自分が何を言っているのか判然としないまま、ただただらたらと言葉を吐いている自分を冴えない頭で客観的に観察していた。呼吸が不規則で自分のリズムがつかめない。逆にあちらはなれたもので余裕にも腕組している。対峙した保は手のつけようが無いほど動揺しているのに。

「おや。お巡りさん。そんなことを聞いてどうするのさ」

「あんたを捕まえて豚箱にぶち込んでやる・・・っ」

「ふふふ」

覆面は保と同じくらい小柄だった。よくよく考えてみると女のような。複数の犯行としてこちらは女の犯人らしい。

「仲間はどうした？どこに潜んでいる」

「なかま？あはっ！面白いことをいうなあ。ばかにしないでくれる？」

犯人は語尾を強めた。

喋り方はいたって稚拙。

年齢がわからない。

顔さえ見られれば判然とするが、今は不可能であった。これをどう切り抜けるか。

「おや。お巡りさん。あたりをきにしているねえ。暗闇が怖いかい

？」

きつ、と保は覆面を睨んだ。しかし相手の両眼が見えない。暗闇が手を貸して、目前の人物の表情をわずかでも曇らしているように感じた。

「それとも、相棒が来ないから不安？」

「もしかして…、おまえっ、おまえの仲間が富士を・・・？」

覆面は、ふふふと笑ったがその声は低く怒気を含んでいた。ただ怒った人が「は行」の“ふ”を三回もらしただけのようだった。

「あんた。いい加減にしないと怒るよ」

「？」

何を怒っているのか、保には分からない。いずれにせよ、奴らの心理など落ちていて解釈できるものか。

「なかま・なかま・って“ぼく”になかまは必要ないよ。ぜんぶ一人でやってやるんだ！」

だっ、と間髪入れず覆面が襲い掛かってきた。ナイフをぐつと握りそのまま保の胸に突き刺そうと切り出した。そこをやはり交わした保は身軽だった。ナイフは保の胸ではなく、粗い目の壁にぐさりと突き刺さった。埃が鈍く闇を濁した。

「あは！あはは！」

嬉嬉とナイフを引っ抜いた犯人、後ろを振り向いた覆面の脳天に保の警棒がお見舞いされた。

呆気ない。

それは非常に呆気なく、両膝について覆面は畳の上に伸びてしまった。

保は覆面が右手に握ったナイフを蹴って手の届かぬ方へ飛ばした。もしかしたらこの他に凶器を所持しているかもしれない。保はここんで覆面の身体に手をあててそれらを捜したら、出てくるは出てくる。ナイフの大小問わずあれやこれやと。よくもまあこんなに持ち歩けたものだとは半ば驚愕しつつ全てを外し終わると、保は手錠をかけた。がちやり、と音がするまで保は落ち着けないで居た。やはり

呼吸のリズムは荒い。

「ふ・ふ・ふ」

力なく覆面が笑った。

「何がおかしい。おまえはもう捕まったんだぞ」

保はぐつと覆面の脇に手をいれて立ち上がらせた。後ろ手を手錠に束縛されても覆面は余裕に笑う。

「ふ、ふふふ」

保は落ち着かぬ心持ちで問うた。

「おい、何がいったいおかしいんだ」

無線は通じない。やはり富士はこいつの仲間にやられたんだ。大事無いことを願う事しか出来ない。

「ぼくは捕まるようなヘマはしない！」

「・・・」

「ぼくは一人でもやっていける。なかまなんて要らない。いらないんだ！」

「・・・」

いよいよイカれているな。保が手錠に手をかけて進ませようとした時だ。

「ねえ！」

と覆面がグツと頭をのけぞって保を見た。

「ぼくの顔を見たくない？ねえ、見たくない？」

「・・・うるさい。歩け」

「ぼくは6人も殴った蹴った。傷つけた。ぜんぶこのぼくがやったんだ」

「狂気の頂点をいってさぞかし悦に入っているだろうが、わたしは許さない」

「ふふふ。みんな六人とも殺さないで居たのは、ぼくがあの子達にぼくの顔を見せたかったからなんだよ。ねえ、君は強い。すばしっこい。ぼくはすばしっこいのは苦手だし、それに一発で殴れないなら興味ない。ぼくは勝ちたい。勝てない勝負の延長戦なんて気分が

悪い。ぼくはね、全てにおいて単純明快を好むんだよ。次は簡単な子をやる」

「・・・」

覆面は六人ともぼくがやったと供述した。しかし、六人の似顔絵はどれも違った人物だ。

「お前・・・なぜ覆面を取りたがる」

「覆面の下にあるぼくを見て驚くみんなの顔がうつくしい」

「変態が」

あまり覆面が動かないものだから保は右足をそいつの足に当てた。

「おい、御託はいい。吐いてもらいたいのはここでじゃあないんだ。警察署でなんだよ」

困った保に犯人は一瞬の隙をついて身をくねらせて手を逃れた。

迂闊だったか、犯人はそれ以上に身軽で軟体のようだ。骨が一瞬、外れたような感触が手を震わせた。ばかな。

「警棒で殴る？またぶつんだね」

「喋りすぎだ！」

と、保が向かった先に覆面の右足が保の頭を捕らえた。一撃で保の意識が朦朧とする。

どっ、と保が壁にぶつかるのを見とめて、覆面は大笑いしだした。

「あはは！初めてなんだろう？ぼくみたいな人と出会うのは。足がガクガクと震えて、声は心の内を綺麗に表している。恐れだ」

ぐっ、と身を起き上がらせようとした保の前にここんで覆面は頼杖をついた。

莫迦な。

保は思った。かけたはずの手錠が綺麗サッパリ取り払われている。そして覆面の手が、覆面にかかった。取り払われた覆面の下にあった顔を見て目を見開く保の前で、覆面はこう言った。

「この世には自分と同じ顔をした人が三人いるらしい。一人は君でもう一人はこの世界のどこかに存在する。そして最後の一人がこの“ぼく”だ」

覆面の下にあった顔は保を周章狼狽させるに事足りた。

覆面の下にあったのは、口角をあげてニツとする“保の顔”だった。ひとつも違ったことがないその顔を見ているとそれは鏡と向かい合っているようだった。

「おどろいた？ ぼくは君だ。君はぼくなんだ」

莫迦な、と吐き捨てる余裕も無い保の頭をぼんぼんと叩いてもう一人の保はいう。

「六人の被害者とも違った顔を伝えたらしいね。だから君たちは六人とも違う人物が犯行に及んだとくくつたらしいが、ちがうんだな。六人ともなぜ犯人像に一貫性がないのか。それは簡単なことだ」
もう一人の保は、握りこぶしを保の横面にぶつけた。

「なんせ犯人の正体が自分でした、なんて言えないものね」

そいつはそれきりで、気を失う保を後に残して早々にその場から姿を消した。

ワンオブスリーの存在 4（後書き）

ドッペルゲンガーはこの世に三人と存在するらしい。

自分と同じ顔と出会うと死ぬ、という話はよく耳にするが、その事実を記述したのは一体誰なのか？ 一度自分の顔と鉢合わせした人物が、死んだ後に天国で言い伝えることができるわけでもなし。

ドッペルゲンガーについて大変興味を持っていた時期に書いた作品でした。作者の勝手な想像から出来たドッペルゲンガー像です。

ワンオブスリーの存在 終わり

社は煙草を吸いつつ、向かい側に座って小一字間は一文字に口を閉じ続けている保をちらりと瞥見した。

「ああ、と煙を吐き出すと、社は頭をかいだ。

「ドッペルゲンガーだよ」

「は？と社は素っ頓狂な“は”を出した。

「瑞希くん、この世に同じ顔が三つとあるんだ。それがドッペルゲンガーさ」

「映画の話か？」

「ちがう。わたしはあの日、三人の一人と会ったんだ」

ああ、と社は一週間ほど前に起こった空家事件を思い出した。

「きみ、信じちゃくれないと思うがね。空家に居たあいつこそが六人の女性に暴行した犯人なんだ。それをなぜ君たちは影武者なんかに騙されやがって・・・」

「おい。口を慎め！あの事件は解決したんだ」

「たたく、と社は溜息をついた。

「いいか？あの事件はつい二日前に解決した。犯人の観念したことで、被害者の言うことは全て一致する。犯行に及んだ場所、とき、理由。すべてが完璧なんだ。それをお前はまだ犯人が野放しにされているというんだな？」

「じゃあなぜ六枚とも違う似顔絵に首を傾げないんだ？六枚とあれば六人の犯行だろう」

「お生憎様。しっかり六人の犯行だった。おまえ、テレビや新聞はどうした？いままで噛り付くようにチェックしていたじゃないか。

あの空家以来、お前らしく無いぞ」

「だから言うだろ。あれはわたしだったんだ！」

「お前・・・どうやって自分が自分を殴るというんだ」

「きみ、分かっちゃあくれないんだね。この世界には不思議なこと

もありえるんだよ」

不思議な事、と聞いて社は数年前に見た生霊を思い出した。思い出したがすぐに首を振って、否定した。

「今は休め。本調子にはまだ遠そうだからな」

「奴はまだ逃げ続けている。上手く影武者を6人用意したみたいだけれど・・。ドッペルゲンガーは二人と居て一人は化物なんだ」

「おい。もうおれは行くけど、ちゃんと休めよ。化物だとかドッペルなんとかだとか、現実からかけ離れた事ばかりほざいてないでいつものように正義に忠実にいるほうがおまえらしいよ」

「いまでもわたしで居るつもりなんだがな、きみは信じちゃくれな
いみたいだ」

仕様が無い、と頬を腫らした保は席を立ち上がると、

「隆たかい一いつくんのところに行く。彼ならなにか知ってるかもしれないからね。それに信じてくれる」

門前で待つ 1 (前書き)

キーワード：幽霊

門前で、待つ 1

今年も、梅雨の季節がやってきた。

色とりどりの傘が往来を行き交うなか、

青葉高校の制服を着た者たちは、駅から流れ出た人々の波を横切り、少し細くなった道へ入っていく。

その方角に大きな門が構えている。青葉高校だ。

近くでチャイムが鳴った。学校の始まりを告げるそれだ。

“僕”の横を4、5本の傘が通り過ぎていく。それはどれも遅れまいと必死だが、僕は急がずにいつもの足取りで学校の門を目指して歩いた。

どうせ遅刻は遅刻なのだから、雨の中必死に走ったところで報われることなど滅多にないし、何より制服に泥が跳ねて授業中に気持ちが悪くなるよりは遅れたほうが数倍マシだった。

大粒の雨はひどくなり、気がつけば、

普通に歩いているのに雨粒が跳ねてズボンをしたたかに濡らしていた。結局、しょんぼりだ。

あと300メートルも歩けば校門が見えてくる、といった地点で、僕がはたと立ち止まったのはそれなりに訳があった。

また、“あの人”がいた。

あの、寂しそうな瞳の奥にももの凄く何かを秘めている女性。

その人を、この3日間ほどぶっ続けで見かける。

名前は知らない。年齢は僕の母と同一年か、それより年下がいいところだ。

学校までの道のりは、住宅街を通してその先にあった。そして今、

僕が歩いていたらところが住宅地の真ん中といったところか。

その女性は、真黒な長髪を肩まで流し、真っ白なフリルのついたワンピースに、手には大きなボストンバックを持っていた。

彼女は瞬きする事を、生まれてこのかたしたことがないともいうかのように、或いは、瞬きするのも惜しいというように、ある一軒の豪勢な家をじっと見つめていた。

誰の家だか知らない。

しかし、一度、僕の通う高校の制服を着た女子生徒が門から出てきたのを見かけたことがある、ようなないような。あまりはつきりと覚えていないから定かではない。

ただ、その女性はボストンバックをぎゅっと握りしめ、瞬きをしない双眸を家に向け、僕のズボンの裾以上にしたたかに雨に濡れていた。ずぶ濡れもいいとこだ。あれでは風邪を引く確率が下手なお天気お姉さんの降水確率を上回るに違いない。

僕は呆気にとられてじっと女性を見つめていた事に気がつき、こんなに眺めていたら失礼だと思い至って、すぐに歩きを再開させた。バックの底に運良く折りたたみ傘がある。

それを彼女に渡そうと心が決めていた。

「あの、よかつたら僕の傘を使ってください」

気のきいた言葉などよく知らない。けど、一応言いたいことは伝えた。

すると彼女は、

家から視線を少しも外さずに、

「結構です」

と言つてのけた。そうもいかないから、二三度傘を進めたが同じく抑揚のない声で、

「結構です」

と彼女は返した。僕は傘を進める自分がしつこいような気がした。だからゆるゆると手を引っ込め、軽く会釈をしてその場を去った。雨は猶も激しく降りしきる。

僕は、ちらりと背後を振り返った。まだ、あそこに立っている。まるで死んだ棒のように細い人だった。

あの人は、まだあの赤い屋根の家を見つめていた。

——というか、家に構える、赤褐色に錆びつき、硬く閉ざされたような“門”をじっと見ていた。半ば敵を睥睨するような目つきで。あの家に何かがあるのか、それが気になる前に僕はただあの女性は何をしたいのか気になっていた。

だって、あの瞳が“野望”に燃えていたのは明らかだったからだ。

門前で、待つ 2

五時間目の授業は英語。まだ雨が降っている。

「昨日くばったプリントの訳はしてきましたね。あれは宿題でした」
壮年の女教師はシャーロックキアンだった。度々、新しく習った文法をドイルの著したシャーロックホームズのシリーズから抜き出してくる。今回もそれだった。五行程度の英文の中に、昨日習ったばかりの文法が潜んでいるわけだが、僕は訳を書き殴ったノートを見て、改めて自分の字の汚さに嘆息してしまった。

「今日は6月17日ね。そうねえ、 $6+1+7$ で…出席番号17番の鈴木くんに訳してもらいましょう」

鈴木とは僕の隣りの席に座る男子生徒だ。彼は英語は毎時間、睡眠をとる時間だと決めているようで、このような宿題が出たことなど、彼が知るわけもなかった。腕の中に顔を埋めて眠っていた彼を後ろの席の男子生徒が揺さ振り起こした。彼はがばつ、と起き上がるとクラスの失笑をかった。

可愛そうな鈴木くんだ。

女教師は簡単な足し算を間違えて何の関係もない17番に白羽の矢を立てた。これもまた、鈴木君に知る由もない。

「じゃあ、昨日宿題に出していた訳を全部読んでちょうだい」
女教師はわくわくとした顔で、眠気眼の鈴木くんを見つめていたが、すぐにこちらに背を向けて真新しいチョークを片手にスタンバイをした。

鈴木君はよろりと席から立ち上がると、一二度辺りをきよろきよろと見渡して、教師が見ていないことを良いことに手短な僕のノートを引っつかんだ。

あっ、という間もなければ、目を丸くする暇さえ十分に与えられなかった。

彼は寝癖のついた頭をぼりぼりと搔くと、僕の顔を瞥見した。その

顔はまさに、字が汚ねえ、と物語っていた。僕は知らん振りをかました。

「さあ、読んでちょうだい」

先生が押す。鈴木君は汚いノートの字を前に、最高に目を細めて読み始める。どこことなく片言を喋っているようだが、先生は彼が他人の宿題を棒読みしているなど気づかない。もうどうにでもなれ、と僕は心の中で匙をぶん投げて窓の外に視線を落としていた。

訳が最後に差し掛かったときだ。ホームズが口を開く場面がある。そのときだ。

鈴木くんは言った。

「さて、これから向かうとしよう、ワトリン君」

クラス中が水を打ったような静けさの中に一瞬どっと落ち込み、すぐさま笑いが噴出した。壮年の女教師は呆れ顔で、

「鈴木君。ワトリンじゃないわ。ワト“ソ”ンと読むのよ。どうやってたら間違うのかしらね」

鈴木君は顔を真っ赤にして席に沈み込み、教師が再び黒板に向いたときに、僕にむかってノートを放った。その横顔は苦い顔をしていた。

「ごめん。字、汚かったね」

なぜか僕が謝る体になっていた。

放課後の靴箱で、靴をおざなりに引っかけた彼は僕をチラリと見ると、ふっと乾いた笑い方をした。

「いや。俺がわるかった。勝手にノートを奪ってスマン」

と、彼は未だに雨が降り続ける外を見て長嘆した。

「雨、降るな」

「うん・・・」

「まあ。いずれにせよ、字は綺麗にかかないとな」

「・・・うん。ごめん」

だから、なぜぼくが謝っているんだよ。

僕は、彼がおざなりに傘立てのなかから傘を引っこ抜いたのを見逃さなかった。ピンクの地に色とりどりのドットがちりばめられた柄の傘は、絶対に彼の傘じゃない。だけど彼は気にした風がなく、ぱつと傘を開くと、おおーと一声漏らしてドット柄にある種の感動を覚えていた。絶対に、彼のじゃない。

「それ、可愛い傘だね」

「おお、お前もそうおもうか。だよなー」

と、我が道を行く。

呆れた僕だけど、彼の悠然とした雰囲気になった。青葉高校に入学してから二ヶ月が経ったが、僕にはそれといった友達もいなかった。たしか鈴木君もそうだったはずだ。なにせ終日眠っている彼の姿しか見たことがなかったからだ。

「馬^ま上^{がみ}つて家どこ？」

ここから歩いて15分のところだと答えると、

「へえー。俺もそっただけど、一度も見かけたことがねえな。今から用事があるのか？」

「ううん、特にない」

「じゃあ一緒に帰ろうぜ」

という事で、鈴木君といっしょに帰ることになった。生徒達のまばらに帰る流れにのって、僕らも鬱陶しい雨足の強くなるなか、歩を進めた。

そして必然的に、あの赤い屋根の家へと近づく。僕の心悸が強く速く打たれたのは、まだ、そこにあの女性の姿を見つけたからだ。彼女は――終日、雨に打たれて立っていたというのだろうか。

僕は生唾を飲み込み、鈴木君に話し掛けた。

「ねえ。あそこに立っている女性が見える？」

鈴木君は目が悪いのだろうか？

目を細めて、僕の指差した方を目を凝らしてじっと見た。

「ああ」

彼はやっとわかったといった気に声をあげた。

「あの人か？」

「うん。誰だか知ってる？」

「しらねえなあ」

「そう・・・」

「おれ、ここに越してきたの今から五ヶ月くらい前だから、この地の利は得てないの」

「へえ・・・」

「だけど、今日の朝は見かけたような気がする。おれさあ、目が悪くてさあまり周りがぼやけて見えない」

そうだったのか。

「それで、最悪なことに今日はコンタクト片方なくしちゃってさ。

片方つけて途中まで学校に行っていたのはいいんだけど、途中で気分が悪くなつてさ。完全にノーコンタクトで来たつてわけ。片方だけ見えてて、もう片方はぼやけてるのつて案外つらいなあ」

鈴木君がしみじみと言うや否や、僕はどきつとした。

先ほどまでじつと赤い屋根の家の門を見ていた女性が、今は僕ら二人をじつと見ている。あの野望に満ちた双眸に見つめられていると思うと、ぞつとした。

彼女は雨に打たれたまま、その場を一步も動かずに僕らを手招いた。行かないわけには、いかなかった。

門前で、待つ 3

また雨だ。

憂鬱な気持ちで教室に入れば、眼鏡をかけた鈴木君が出迎えた。

「よー、おはよう」

「うん…」

僕が彼を前に腑抜けてしまったのは、鈴木君の眼鏡があまりにも旧式だったからだ。

金縁眼鏡に1cmはありそうな分厚いレンズ。これは酷かった。

「眼科はどうしたの？コンタクトレンズは買わなかったの？」

「うん。面倒くさいから週末に行くことにした。久しぶりの眼鏡なんだけど、どうだ、似合うか？」

「うーん・・・」

正直、ダサイ。鈴木君の目がありえないくらいでかく見える。それがニツと笑うと、無気味で仕方なかった。

「やっぱ駄目か」

そういつて鈴木君は別の眼鏡を取り出して、それとかえた。

「あ・・・」

「あ？うん。この分厚いレンズの奴はな、ちよつと思入れが強くてなあ。でも、この眼鏡をかけると決まって自分の周りが寂しくなるんだ。言ってる意味、わかるだろ？」

うん、と僕が頷けば、鈴木君は昨日の放課後の出来事を、まるでおさらいするかのように語りだした。

そして、

たちかわ れいか
「立川麗佳」

ぼつり、と“彼女”の名を漏らした。ちらり、と鈴木君を見ればうんと頷く。

「たしか、立川さんは隣のクラスだよね・・・」

僕は彼女のことをよく知らない。鈴木君も左に同じだ。

「いつちよ偵察に行くか」

「うん」

鈴木君と僕は何気なく席を立った。それはまるで、連れ立ってトイレに用を足しに行く生徒のように見えただろうが、実はそうではない。昨日の放課後、あの例の家を通り過ぎたときに、あの女性から頼まれた。

『立川麗佳という子がどんな子が教えて欲しい』

と頼まれて、僕らは困惑した。理由を問えば、必ずだんまりだった。僕らもよく知らないから、今のよう偵察をしているのである。

隣のクラスはHRを前にして、生徒達の話し声で騒がしかった。クラスでは馬鹿騒ぎしているものたちがいて、相当賑わっていた。朝からハイテンションな生徒達の中でひとときわ場違いの女子生徒がいた。

場違い……といったは、非常に失礼だろうか。彼女だけが違った雰囲気気をだしていた。

「窓際の一番後ろの席のひとか？」

鈴木君は神妙な声で僕に言った。僕は頷き、彼女をじっと遠くから見た。

セーラー服は、彼女のような小柄な人には少しばかり大きく見え、低いところで一つに結われた髪は、漆黒。

顔色は青白く、僕の見かけた笑顔の魅力的な彼女とはかけ離れるが如くやつれて見えたのは嘘ではない。

「……で、俺たちはどう伝えればいいんだかなあ」

「うん……。見たままを伝えれば、ひとまずいいんじゃないかな？」

「外見だけ報告ってか？」

「うん」

そうとしか言いようがない。いずれにせよ、僕ら二人はこれっきりであの女性には干渉しないようにしていた。なにか、彼女が門前で立つ理由は、そこはかとなく僕らが踏み込んで良いような領域にある

るものじゃあないような気がする。一切、彼女と関わらない方が身のためだ、とも思える。

「ねー。なに見てるの？」

びくつ、と僕ら二人は文字通り飛び上がる。ばつと後ろを振り向けば、上背のある女子生徒が僕ら二人を興味深深に眺めている。見知らぬ人だ。無論、鈴木君も知らない。

「あー。立川さんのこと見てたでしょ？」

彼女は僕らに口を開く暇さえ与えずに自分から喋りだした。鈴木君は、ぺらぺらと喋りたてる彼女を訝しげに眺めている。

「なに？わたし？わたしはこのクラスの学級委員長よ。で、貴方達は隣のクラスの鈴木君と馬上くんでしょう。二人の事は知ってるわ。名前だけだけどね」

彼女はちらりと立川さんを見たが、本人は机と睨めっこするばかりでこちらには気づいていない。上背のある学級委員長は僕ら二人の手を引っ張ると、クラスから離れさせた。

「なんで立川さんのこと見てたの？うん？どうなのよ」
「どうやらしつこい人らしい。」

僕などは感情を顔には出さないものの、自分で言うのもなんだが、結構腹黒いからこういうタイプを目の前にと心の中で悪態をついてばかりいる。

そのときだ。

何の予兆もなしに鈴木君は、はつとして、きらきらと輝く目を僕に向けてきた。それが何を意味するのか僕にはさっぱりだったので、眉根をよせてみたけどそれは何の効果ももたらさなかった。

すぐさま鈴木君が口を開いた。

「馬上了たらさ、見かけ通りおくてな奴なんだよ。もちろん、恋つてのにはめっぽう弱くてね。こいつたら立川さんに惚れたのはいいのもの、声をかけられずにもじもじしてるってわけ」

あることないことを言った鈴木君は胸の前で手を合わせてこういった。

「頼む！立川さんのこと、少しでもいいから教えてくれないかなあ」
「へえ」

彼女は僕と鈴木君を交互に眺めて、うんと頷いた。

「いいよ。　なんだ。そういうことだったのね？早く行ってよ」
早く言うもなにも、こんなこと嘘っぱちだ。僕は自分の顔色が徐徐に色を失っていつていくのが、手にとるようにわかった。ただここでは余計な事は喋らない方がいいと思ったし、もう、どうにでもなっつてしまえと二本目の心の匙をなげていた。

午後7：10・

僕と鈴木君はぶらぶらと暇を潰してから、赤い屋根の家へと向かった。

やはり。

彼女は昨日と同じ恰好で立っていた。

ここで忘れてはならないのが、今が梅雨で大雨だということ。雨は、止まるという行為を知らず、猶も降りしきる。

「待っていたのよ」

彼女は閉ざされた門を見つめながら、僕らにいった。鈴木君は昨日とはまた違った傘をさしながら、彼女に伝えた。

「立川麗佳。1の2。彼女はバスケットボール部のマネージャーを務めていたけど、つい最近からさぼる様になった。部員から言わせればウソみたいな話で、彼女ほど部に忠実な人はいなかったらしい。クラスでの彼女は男子達からも大変人気で、それはきっと彼女の誰とでも気軽に話せることができる大様さがそうしているのかもしれない。けど、最近の彼女は何がおこったのかわからないけれど・・・とにかく元気がないらしい、ですよ」

すべて鈴木君が彼女に伝えてくれた。

彼女は聞き終わると、表情をひとつも変えずに

「・・・そう。ありがとう・・・」

と一声もらした。

ちつともあり難がつていなく、ただ恨みをはらんだ言葉の連なりにしか聞こえないほど、その声は低く耳に痛いものだった。

僕らはそれだけ伝えたと、

「じゃあ、失礼します」

さっさとその場を去った。もう、これ以上かわったところで、得するわけでもなく、彼女だって僕らはもはや用無しだろう。

猶も雨が降る。

あれから一週間、

僕は彼女を視界の隅に移しながらも、会釈をするだけで立ち止まったりはしない。

彼女も会釈をしてもこちらに笑顔を向けるような人ではなく、相変わらず赤い屋根の家の門ばかりを見ているだけだ。

その日の放課後、

赤い屋根のうち、つまりは立川麗佳の家の前に二台のセダンが止まっていた。僕はつい足を止めそうになったが、そのまま歩調を乱さずに歩き続けた。結果、セダンから降りてきた一行をみて、ぎよつとした。

黒いスーツを着た男が四人、それにまじって真っ白なスーツをきた女性がいる。

女性は、門に手をかけようとした一人の男に大声で怒鳴った。

「触れるんじゃないよ！裏から入るんだ。」

門に触れようとした男は何度も頭を下げて、すみませんと唱えるように謝っていた。

ちょうど、家の真前を通り過ぎようとした時に白のスーツの女性と、例の女性の間に挟まれて双方から一本に伸びる強い視線に僕は串刺

しにされた。

白いスーツの女性は、確かに僕ではなく、例の女性を見ていた。逆に、例の女性は恨みがましい目つきで白いスーツを睨んでいた。

「ふっ」

白のスーツはヒールの高い靴をカツカツカツといわせて、

「さて裏門から入らせていただくんだよ。折角、計画を重ねてきてここで壊されたらたまったもんじゃないからね」

白いスーツを着た女性は、とにかく、あの中では1番偉そうだった。居丈高でもあった。

ただ、例の女性を見て勝ち誇った笑みを向けたのは確実に、例の女性性かというと深い恨みで混濁した双眸で相手を睨みすえていた。

全くもって、関りたくない。

立川麗佳を軸にして、何かが回っているのはうすうすわかる。

けれど、見る限りこの家の者たちが出入りする場合は、立派な正門は通らずに裏門から出入りするのはどういった理由からだろう。

そこが分からない。

全く、何の理由で例の女性は雨に濡れてまで立川家を見ているのか。考えれば考えるほど、分からないものだ。

門前で、待つ 終わり

雨が降る。もう、うんざりだ。

鏡の前で溜息をついた僕は、何歳か老けたように見える。

「なあ、馬上」

「うん？」

「おれ、実はあの女の人に声をかけられるんだ。ほぼ毎日な」

「へえ…。それで？」

「ああ。飽きもせず立川のことをあれやこれやと聞いてくるんだからたまったものじゃないぜ」

「それで、答えるの？」

「まさか！」

鈴木君は、トイレの鏡の前で絶望に満ちた表情をうつしだして言った。

「もう、うんざりだ。相手にしたところでこっちはブルーになるし。だって、あの表情はないだろ？呪われそうだぜ」

「そういわないで・・・」

苦笑したが実は案外ばくもそう思っている。

「それに雨もうつとうしいし。てかよー、今年の雨ってひどいな」

「毎年おなじだよ」

雨は嫌いだ。

湿気を多く含み、日頃の鬱憤を誰彼構わず晴らそうとするように感じるのは、きっと嘘じゃない。

次の日の放課後。

僕は7時に学校を出た。辺りは薄暗くどんよりとした雨雲に覆われていた。そして正面玄関を横切ったときに雨粒がぱとりと頬に落ちたかと思えば、大粒の連弾が始まる。

（あー・・・。）

今日に限って傘を持ってきていない。気持ちば、学校に引き返そうともしない。雨宿りなんかしたところで、雨が止んでくれる補償はない。

どうする？

僕は地を蹴って、急いで家路に着こうと走り出した。ドラマなんかにあるワンシーンを思い出し、鞆を頭の上にかざして雨を防ごうと思ったが、雨足は間断なくて防ぐには間に合わない。だいち、あんな革で出来た薄っぺらの鞆じゃないんだから無理だ。

（あゝ・・・やだやだやだやだやだやだやだ）

いつからこんなに、雨に対して悲観的になったのだろうか。そうではない。

ただ、あの家の前を通ることに嫌気が指しているんだ。あの、虚ろな目の女の人を視界に写すと吐き気がする。

「ちょっと待って。お願いがあるの」

赤い屋根の家の前を、無償で通り過ぎることは無理だった。

「あの、なんですか。急いでるんです」

いつになく、僕は尖った声をあげた。雨足が激しく、声がかき消される。ただ雨粒が痛い。

「あの門を開けて」

「門を？」

「やっと決心がついたの」

——— なんの決心だ？

僕にはさっぱりだ。

僕は、あたりをざっと見回し、いつものセダンが停められていない事に気がつく。あのセダンはこここのところ毎日家に横付けしていた。「ご自分で開けれるでしょう」

冷たく言い放ったつもりが、彼女は気にした風もなく、

「お願い。あなたじゃないと駄目なの」

——なんで、僕じゃないと駄目なんだろうか。

僕は正直、いらいらしていた。

「門くらい自分であけてください」

「私は両手が使えないの」

彼女の両手はボストンバックをぎゅっと握っている。

もう一度おざなりに辺りを見回し、門をじっと見た。インターホンがこの家にはないようだ。

仕方がないので、人様の家の門をガチャリと開けた。

なにか、開けたときに違和感を覚えた——ビリッ、と紙の裂ける音がしたような——が、そうも言っておられずに僕は彼女を振り向いた。

「あなたはここの家のかたなんですか？」

「・・・・・・そうよ」

彼女の虚ろな目に灯がともった。

僕は彼女が、ありがとう、とお礼をいうのも聞かずに

だつ、と住宅地のアスファルトを蹴りだしていた。

走りざま、ちらりと背後を見向けば、

ちょうどわずかなる間隙を縫って、門外から門内へと入っていく彼女の姿を見た。

それが、彼女の姿を見た最後だった。

翌日の事だ。

赤い屋根の家の前にパトカーが一台と、いつものセダンが二台止まっていた。

何ごとか起きたに違いなかったが、その日は生憎テストだったので

野次馬など無視して学校に行った。去り際に、白いスーツを着た女性が見ると、かつと大きな目を見開き、まるで僕を咎めるような目つきで長いこと睨んでいた気がした。

教室に入ると色をなくした鈴木君が椅子に腰掛けていた。

「おはよう」

声をかけると、彼はゆっくりと顔を上げた。

「ああ・・・」

「どうしたの？顔色が悪いみたいだけど？」

「馬上。知ってるか？」

「うん？」

「あの例の家に何者かが侵入して、家の奥さんがぶっ倒れたんだ」

「へえ・・・だから、パトカーがとまっていたのか」

「それだけじゃない。立川麗佳に意識がないんだ」

「はあ？」

話しはこうだ。

昨日、何者かが立川家に侵入した。空き巣ではない。なにせ家はあらされていなかった。

ただ、立川家の母親・・・いや立川家の継母が階段の上でばったりとその者と出くわした。

話しは奇妙で、継母はその者を見ると階段から転げ落ちて頭を強く打って重傷。

近所のもので、怪しい人影を見たものは一人も居ない。

今も継母は病院のベットで意識を失っている。奇怪なことに母親は水に長いこと浸かった様に皮膚がふやけ、両肩に犯人が押したときにつけたであろう赤い手形がくつきりと浮かび上がっていたが、濡れていながら継母の両肩は重度の火傷を負っていた。

さて、立川麗佳はというと、

全くの無傷でありながら、意識不明。犯人は立川麗佳の部屋に入っておきながら、彼女に危害を加えていない。

何があつたのか分らない。

ただ彼女は幸せそうに、最近の彼女には見られないほど安らかな顔をして意識不明のままであるそうだと風の噂に聞いた。無邪気な子どものような表情、とても言い表すのか。

警察は調査をしたが、まったく犯人の意図をつかめないどころか、これといった手がかりもない。犯人は何も残さずに、去つていった。

いいや、一つだけ手がかりがある。

玄関から階段、階段をあがつて二階にある麗佳の部屋に到るまで、床が一面水びたしだったそうだ。

犯人は雨に打たれたままこの家に侵入した。

それだけが、警察の手元にある唯一の手がかりだ。

ただ、鈴木と馬上となると、話しは別だが。

鬼の一振り 1 (前書き)

キーワード：辻きり

鬼の一振り 1

草履の鼻緒が切れた。

人の行き来が絶えない往来の真ん中で、立ち止まることもできない。

“麟之介^{りんのすけ}”はびっこをひいて、道のすみに寄った。麟之介は膨れっ面の顔を上げ、目前でいそいそと新しい草履を取り出す“喜助”に言った。喜助は、麟之介と同年で、麟之介の乳母の息子であった。二人はこの13年間ともに大きくなった。仲も良い。

「喜助。俺の歩き方が悪いと思うか？」

喜助は柔和な顔をさらに柔らかくし、ちよつと小首を傾げた。彼の癖である。何かと問われれば、ひとまず首を傾げて見せる。

「いいや。そうは思いません」

「なあ、喜助。敬語はよそうぜ」

「うん、そうだね」

見たところ、明らかに二人の服装には差異がみられたが、だからといって喜助の着物が貧相というわけではなく、麟之介の行為で喜助のような身分でもちゃんとした服を着せてもらい、今のよう一緒に往来を歩いている。はたから見れば身分は違つうように見えるが、彼らは同い年の朋友のようだ。

「だけど、こりゃあ酷すぎるぜ。今日一日で、草履を三足も潰しちまったことになる。つたく、面倒だなあ」

麟之介は生まれがいい。

家の者たちから若と呼ばれて育っただけもあつて、それなりに金持ちの風格がある。しかし、麟之介の実母が頭を悩ませているのはその口調だった。いささか上品とは言えないのである。

「しっかし・・・」

と、麟太郎は辺りを見回した。

往来の行き交いは絶えず、ただ日のほうが暮れかかっている。橙色の夕日が西の大地で溶け出した。日が沈んでしまえば後はどっぷり

暮れるまでにそう時間はかからない。

喜助は鼻緒のちぎれた草履を懷に押し込むと、荷をよいしょと背負いなおした。二人はお使いの帰りなのである。

といつても、お使いは喜助に頼まれたのだが、幼少の頃から喜助をしたっている麟之介は側を離れない。俺もついて行くといつて家を飛び出した。

「さて、麟之介。帰ろう」

喜助は、敬語はよそうと言われてからそうした。やはり身分という壁は分厚く高い。越えるようなことも、打ち破ることも出来ない。しかしそれは世間の目が向いている時と家の中に居る場合のはなしだ。二人でいるときは束縛は、ただの薄っぺらい言葉のつらなりでしかない。

巳の刻に屋敷に家を出て、気づけば夜だ。二人はひたすら町の中を進んだ。気づけば今回のお使いは結構遠かったと二人は思った。

麟之介が大きな欠伸を漏らし、左腰をちらりと見下ろしてニヤリとした。

「おい喜助」

「うん？」

「俺はいつか人を斬るぞ」

「また怖いことをいつてる」

「でなきゃあ刀なんて持たないぜ。いいか。俺はいつか人斬りになるために家を出るんだ」

喜助はくすくすと笑ったが、すぐに真顔になって、

「その時はお供いたします」

喜助は麟之介の言葉を少し笑ってしまったが、理由がどうであれ、彼がいつか家を出るということは知っていた。その時は自分もお供する、と誓っていた。

「ちよいと若いの。水を恵んでは下さらないか」

びくつ、と二人は文字通り飛び上がって立ち止まった。

「咽が渴いて死にそうじゃ」

軒の並んだ店の並びから外れた一つの袋小路。そこは光とは無縁で、暗闇に沈んだように何も見えなかった。だが、確かにそこから老婆のしわがれた声が聞こえた。気味が悪い。

姿は見えねど、声は聞こえた。

「おい。どうした」

麟之介は袋小路に向かって言った。

「水が欲しいなら出て来い」

そういうと、ざっざつと片足で地をひく音がして、一人のたいそう老いた老婆が出てきた。

みずばらしい恰好に、乱れた白髪。

着物から飛び出た四肢は骨と皮だけが張り付いたように頼りない。麟之介から竹筒に入った水をあてがってもらうと、老婆は水を得た魚のように元気を取り戻した。その顔が大きく笑っている。二人に向かつて深く頭をさげると、老婆は横目で喜助の荷を見てにやりとした。

「腹がへって倒れそうだ。食い物を恵んでくだされまいか」

「やらんといったら倒れるんだろ。じゃあ、やる」

と、はたから見ればつつけんどんに言い放った麟之介だが、言い終わった顔がにやにやとしている。老婆に興味を持ったらしい。

「握り飯が二つとある。まあ、食え」

包まれた握り飯を手渡されると、むしゃむしゃとまるで飯を喰らう獣のように、老婆はぺろりと平らげた。それを見届けて、二人は家路につこうと足を通りに向けたが、それを老婆が

「これこれ、お待ちなさい」

と呼び止めた。

もう時間が時間だ。

二人は早く家に着きたかった。急ぎの使いだと言われたのを忘れた二人ではない。

「婆さん、俺たちはこう見えて急いでる。次はいつたいなんだ。着

物をよこせと言うまいな」

「言わん言わん」

老婆は存外に親切にしてくれた二人を気に入ったようで目元が孫をみるような目つきになっていた。

「ひとついいことを教えてあげよう」

「なんだ」

「ここらは辻きりが出る。知っていたかえ？」

「へえ。出るのか。ついぞ知らなかった」

麟之介は少し目を丸くし、後方に立っている喜助を見た。喜助は首を傾げて知らないの意を見せた。

「だが、ただの辻きりじゃあない。こいつは、また厄介なのさ」

「辻きりはすべて厄介だよ、おばあさん」

と喜助は呆れた顔をしていった。この老婆は可笑しい。

まあ黙って聞こう、と麟之介がにやにやした。喜助は正直、このようなところで道草をくっている暇など全くないと思っていた。だから、

「麟之介、帰ろう。もう日も暮れてしまったよ」

「ちよつとくらいいいじゃないか。もはや暮れてしまったのだ。一刻違つたくらいじゃあ咎めもせんよ」

「麟之介様がそういうのでしたら」

と、喜助は背筋を伸ばして彼の側でひかえた。

「それで、その辻きりのどこが厄介なんだ」

「まあ、お聞きなさい。そこに座るがよかる」

老婆は適当にそこら辺の地面を指した。言われたとおり、麟之介も喜助も胡座をかいて座る。

「その辻きりの名は、羽田真平^{はねだしんぺい}。農家の出だよ」

真平はね、と老婆は続けた。

鬼の一振り 2 (前書き)

キーワード：鬼、辻きり

鬼の一振り 2

——真平は幼い頃から武士に憧れた。

農家の子という枠をいつか飛び出し武士として生きると幼い頃に心に決めていた。しかし越えられる身分でもなし、真平は現実と夢を飲み下し、鋤を手に病気がちの両親を手伝った。

それが13になった年の秋。

大嵐が村を襲い、真平の住む家はあばら屋で大嵐に絶えられずに崩壊した。折角、実らせた稲穂が台無しだ、と村の者たちと嵐の中出て行った壮年の父は嵐に飲まれて亡くなった。

必然的に一家の大黒柱を失って、真平の家はその日を生きてやっとなつた。真平の下にはあと四人の弟妹が居る。これでは食っていけない。

その時節、真平の家に一人の汚らしい下級武士が飯をくれと訪れた。母親は気味悪がったし、弟妹達は怖がって奥から出てこない。

ただ、真平だけが相手となつた。

その武士は体躯が良いが、身形は貧相で笠を被ったまま家でも脱ぎうとしないどころかブツブツとしきりに何か言っている。ただ左腰の朱鞘におさまる長刀がだけが場違いに美しく、真平は見惚れてしまった。まるで手弱女たおやめを前にしたかのように。

生憎、貧家だったため粟や稗しかない。どうしたものか、と思案している間に武士は腹が減ったとうるさい。

この際仕方がないので、これで勘弁してくださいというと、十分だとがつがつ喰らった。

『いや、助かった』

武士はそう言い、奥に隠れる家のものを気にしてか、

『それじゃあ失礼した』

と立ち上がり、開きの悪い戸をなかば打ち破るが如く跳ね除けて、

『すまん、坊主。一緒になおそう。外に出る』

わけの分からない事を言つて、困惑する真平の手を引いて外に出た。真平は、内心斬られると思つたが、そうではなかった。

『これは鬼の一振りだ』

武士はそういうと、腰にさしていた朱鞘を抜き、真平の胸に突きつけた。その手は震えていた。

訳がわからず真平が戸惑つていても、武士は全く気にした風がなく、ただ何度も

『お前にやろう』

といった。

『わたしは農民です。武士ではないから剣技など知るはずもありません。これは悪い冗談でございます』

幼い真平は泣きそうになつた。無理やりもたされた“鬼の一振り”が重くてかなわない。しかし武士は、真平に持つてくれと頼む。

『俺がお前を選んだのではない。鬼の一振りがお前を選んだ。常日頃からお前は人を斬りたいと思つているのではないか？ そうだろう？ おれもそうだった。だからお前が悪い』

『そんな・・・わしは』

『お前が持たんとおれが困る。では、これにてすまん』

と鞘を押し付けるなり、一目散に逃げてしまった。

もちろん、朱鞘・鬼の一振りは真平の手の中にある。

それから数日、朱鞘の鬼の一振りは真平の家の裏にある小高い丘に埋められた。真平はそうするしか思いつかなかつた。母親や弟妹たちは、まさか真平が朱鞘をあゝの武士から貰つたとは知らなかつた。初めはそこらに放つて無視してしまおうと思つた。しかし、好奇心というものが少年にはあつて、捨てるにも捨てれず、もしかしたらあの武士が取りに戻つてくるかもしれないと思つていた。そのため、少し離れたところにある丘を掘つて、鬼の一振りを埋めた。気が咎めたが、なにか鬼の一振りを手にしていると気分が悪くなる。持つていたら氣力が削がれるきがした。

埋めた際に、心音が高鳴った。

朱鞘に魂が宿っているかのように、刀が鼓動を打っている気がしたのは、鞘が仄かに温かいと感じたときだ。もうそうなってしまうえば、ざっと一気に埋めてしまうしかない。気味が悪い。生血を含んだように紅い鞘が妖しく美しい。何とかして埋めたのはいいものの、刀の具合が気になって仕様がな

い。

結局、それから一ヶ月と経たずに土を掘り返してしまった。しかし、そこに刀の姿は無い。

はて、あの武士が取り返しに来たな、と思えばそうじゃない。

【おい。坊さん】

声がした。

真平はぎょっとして声のしたほうを仰いだ。するとそこには、赤い着物を着た真つ白な鬼が立っている。尖った一角に、裂けた口から飛び出る鋭利な牙。

それを見て、わっ、と腰を抜かした真平をむんずと掴むと、白い鬼は唸るように言った。

【わたしは腹が減ったよ、坊さん。さあ、人の生き血を吸いに町に下りよう】

『ひええ』

必死の思いで真平が鬼の手を振り解こうとばたばたと空を掻けば、どさりと体が落とされる。

『は・・・！』

そこに白鬼の姿はない。ただ、そこには朱鞘があった。鬼の一振りと呼ばれるそれだ。

【町だよ、坊さん。町なら斬り放題だ】

そう聞こえたきり、朱鞘は喋らなくなった。

真平にはそれだけで十分だった。

その日の夜、真平は家族に何も告げずに家を出た。その手には朱鞘だけが握られていた。

真平は厄介なものに憑かれたように虚ろな目をして町へと下り、朱鞘を腰に人を斬り始めた。すべては鬼の欲望を満たすためだ。彼の意思など、二の次だった。

真平は農家の子で、刀術など全く知らなかったがそれはどうでもよいことだった。ただ刀の傀儡となっていれば、勝手に鬼が人を斬っていく。技など知らなくても困る事はなかった。

のちに、真平は夜にひらりと現われる辻きりの鬼の子と呼ばれるようになった。

鬼の一振り 終わり

喜助は訝しげに老婆を見た。傍らの麟之介は、感心した顔つきで顎をなでている。

「それで、その真平が今も人を斬ってるというわけか」

「そうだよ」

「へえ」

「でもねえ」

老婆はどつぷりと更けた空を仰いで、気味の悪い笑い声を漏らした。

「でもね、恐れる必要も、今じゃあないさ」

「辻きりなんだろう？今も健在だろうに」

「健在だが、それは数年前と訳が違うよ。お兄さんがたはただ帰りは、前を見て歩けばいい。何があっても振り向くんじゃあないよ。

ただ前を見て歩くんだよ」

麟之介はわははと笑って、

「それじゃあ斬られて死ぬぞ」

「斬られたところで死ぬ話じゃないよ」

「鈍らか」

「いいや、ちゃんとした刀さ」

「では、斬られれば血もでるぞ」

「血はでない。ただ一日斬られたところがひりひり痛む」

喜助は我慢できずに老婆に言い放った。

「よく分からない。ちゃんとやっておくれよ、婆さん」

きよとん、とした顔で老婆はいった。

「わしはちゃんと言ったよ。もはや辻きりの鬼の子は恐れるに足りんのさ」

「でも・・・」

不安そうに喜助は辺りを見た。人の気配はない。

「出る。出るといえば、出る。辻きりの鬼の子は、あれで30だが

今や愚かな“塊”でしかない。わしら今を生きるものにとって怖いものはない。相手にならんよ。ただ、後ろは振り向いたらいけない。“厄介な”ことになるんだ。あいつは人を斬る事で頭がいっぱいで、周りの世界に目を向けられなくなっている。だから片っ端に切り倒していこうとするのさ。阿呆なことだよ」

まるでなぞなぞを出されている気がした。喜助は、はあと嘆息して立ち上がり、

「麟之介さま。もう、帰りましょう」

「うん。そうだな」

「おうおう。帰る時はくれぐれも後ろを振り向かんことだよ」

「ああ、そうしよう」

麟之介は老婆のいうことなど、真剣に取り合わない。ただ愉快なやつだよ、と笑っている。老婆はにやにやと袋小路で座ったまま、二人を見送った。

それからだ。

二人は口もきかずに、しんと静まり返ったまま歩を進めた。辺りは真っ暗で、軒先に下げられた提灯の灯火が煌煌と地面を照らす、が、辺りいったいを照らすことなどない。不思議とその日は外を出歩くものが居ない。おかしい。いくら夜が来たからといっても、丑みつ時でもない。ただ日が暮れただけのことだ。

暗闇にぽつぽつと明りが浮かんでいる他、あたりはしたたかに真っ暗だ。

二人の歩は、自然と早まった。喜助など急げば急ぐほど、足がもつれた。

というのは、背後から誰かがつけているのだ。

麟之介は、初めはまさかなあと思ったが、摺足で後を追ってくる者

がいる。喜助など顔色を悪くして、ときどき傍らの麟之介の顔をちらりと見た。彼も同じく色をなくしていた。

麟之介の手が、鯉口を切ったのは背後に居たものが走り寄ってきた気配がしてからだった。

「喜助、脇へ！」

喜助、脇へ退け、と麟之介が刀身を抜いて振り向いたときには、すでに麟之介の胴を“辻きりの鬼の子”の刀身が真一文字に走った後だった。

「……っ」

稲妻の如く、腹に違和感が走った。ずばっ、と腹が真っ二つに裂かれた気がする。

もう、死ぬのだ。思った。

振り向いたほうには、腰をずっと沈めて既に鞘に刀を納めた辻きりの姿がある。年のころは老婆のいったところの、30前半のみすばらしい格好をした総髪の男だった。

「ひえええ」

喜助は腰砕けて叫んでしまった。

しかし、次の瞬間には地を這って地面に崩れた麟之介の身体を起こしてやっていた。

「ああ……っ。麟之介さま、大丈夫ですか」

喜助は辻きりの顔があるほうを見上げたが、そこには何もなかった。しかも、おかしいことに斬られたほうの麟之介が笑っている。

「くっくっく。こりゃあ、参った」

「……」

「いやあ、あれは生きてなかったぞ、喜助」

はっ、とした喜助は麟之介の斬られた腹を見たが、何もなっていない。刀傷を負わずに、深手を負うはずはなかった。

「あれは死んでいた。もはやこの世のものじゃあないぞ」

斬られた麟之介はその種が分かったが、喜助には分からなかった。

翌朝、麟之介が起きないと実母が心配して見に行ってみると、そこには腹を抱えてうんうんと唸る息子の姿があった。

「どうしましたか、麟之介」

「腹を斬られました・・・」

「なんと！」

母親は駆け寄って苦しそうにもがく息子の腹を見たが、何にも変わったところはない。

「つまらない冗談を」

母親はくすくすと笑ったが、すぐにすつくと立ち上がり、

「いいですか。早く顔を洗って朝餉を召し上がりなさい」

うーん、こりゃあたまらん、と麟之介は顔を土気色にしていると、

喜助が朝飯を盆にのせてやってきた。

「あの辻きりは、自分が死んだことも知らずに斬り続けているんですね」

ああ、と麟之介は苦笑した。

「あれが幽霊だったとしても、こりゃあよく利く一斬りだったなあ。もう勘弁」

そういつて、麟之介は一日中布団の中で腹の痛みに汗を流していたという。

太月事務所の三兄弟 1

—— 触れちゃいけないと思っていた。

だから、

—— 決して見ないように、目をそらしていたんだと思う。

それは未完成のまま、
未完成のままに。

わびしさを乗り越えて、まず先に罪悪感がある。

それはきつと、
安易に晴れてはくれない。

きつと、きつと、きつと…。

「あんたの兄貴たちは？」

「出てる」

「いつ帰ってくるのかしら」

「うーん…5時…くらいか？いや、待てよ…」

「早くしな。こっちは急いでるんだよ」

「あのな、おばさん。急いでもところ申し訳ないんだが、事務所のソファに座って待っててくれないか」

「私は急いでいると言ったんだ」

「すぐ出るから。勘弁してくれよ」

「なに。悪いものでも食ったか」

うつせえ、と“一晚六花”^{いちばん・ろっか}は一つ怒鳴った。

彼は今、トイレのドア越しに白いスーツを着た“加賀谷レイ”^{かがや}という女性とやむを得ない状況のもと、話していた。

やがて一枚の戸を隔ててトイレトペーパーがからからと音を立てるのと、水が流れる音、ばしゃばしゃと水が飛び跳ねるのが聞こえたのち、トイレのカギがガチャリと音を立てて下りた。

トイレから出てきた六花は怒りとわずかな恥ずかしさで顔を紅潮させていた。

「大人しく事務所で待ってるよ」

そこで、加賀谷ががつんと一発げんこつをお見舞いした。

「あてえ!!!」

「生意気な口をきくんじやないよ。これでも一応おたくの客だからね」

「……って、連れも居たのかよ!!!」

白いスーツの加賀谷の後ろに、こぞって黒いスーツを着た4人の男達が黙して直立していた。計5人で、少年がトイレから出るのを待っていたのだ。

さらに顔を赤らめながら、

「ったく、かなわねえな……」

と六花は軋む廊下を横切って、事務所に続くドアを開けた。

「なんだい。本当に5時まで戻らないっていうのかい」

「ああ」

「また依頼か？」

「じゃなきゃ外に出ねーよ、あいつらは」

「仕事熱心でなによりだけど。おたくの欠点といえば、客から大きな報酬を取らないことだね。だからこの事務所もいつまでたっても陰気臭いままなのさ」

「どーも。お世話様です」

六花は今年で17歳の高校生である。オレンジブラウンに染まった髪はつんつんと跳ねている。耳にはピアスをしてい、腕にはじゃらじゃらと重々しい装飾品が連なっていた。おしゃれに気合を入れる少年だった。それを見た加賀谷は顔をしかめた。

「見てくればかりに気をつかつちゃって。なんとまあ、色気づいてること！」

「うつせえな。用がないんならさっさと帰れよ」

加賀谷は右手を拳にして見せた。六花はそれを見ると、亀のように首をすくめて嫌そうな顔をした。

「私も暇じゃないからね。今日はここでお暇させてもらうとするよ」

「あいつらが帰ってきたらなんて伝えればいい？」

「そうだね」

加賀谷は薄汚れた事務所の窓から眼下を見下ろし、その白い面を皮肉にゆがめて見せた。

「“先日の例の事件は失敗した。まさか横槍が入るとは思っても見なかった。一人で【あれ】を捕まえるのは時間がかかりそうだからあんたも手伝ってくれ”と」

長えな、と言いつつも六花はきちんと一言一句違わず紙に書き写した。次いで、うん？と首を捻った六花が顔をあげれば、加賀谷と連れたちは今にも事務所を出ようとしている。

「この用件はうちの兄貴にいうのか？それとも・・・隆一たかいさんにか？」

「隆一はあんたらの兄貴たちよりもたちが悪い。なんせどこにいるのか分からないからね。だから“玉兎”と“烏兎”に伝えておくれ」

「了解」

玉兎ぎよくとと烏兎うとは、六花の兄だった。前者が長男で後者が次男、次いで

六花が三男の三人兄弟である。いまの六花は、兄二人と知人ひとりが経営する事務所の留守番を任されていた。これで小遣いが出ないというから自分も物好きだな、と六花は人知れず思っていた。が、この仕事はつきりいつて面白い。様々な客が来る。それを見るのは六花を楽しくさせた。

白いスーツの加賀谷が去って、再び暇な時間が訪れようとしたときだ。

携帯が鳴った。

すばやくそれに出たが、六花はしゃべらない。かけてきたほうからまず名乗れ、という主義であった。

すぐに電話をかけてきた者が喋りだす。飄飄とした声だった。

『六花？加賀谷のおねえさん来なかった？？』

「ああ、来たよ」

長男の玉兎である。六花は胡座をかけた足の上に雑誌を広げた恰好のまま、用件をすべて伝えた。この来月号、明日が発売日だよな、と思いながら。

『へえ、失敗か。そりやまずい』

「あの完ぺき主義のおばさんでも失敗するんだな」

『誰だって失敗はするものだけど、今回は特に失敗してはいけなかったんだねえ』

「そんなに重いのか？」

『あの家族にとっては。・・・っと、これ以上烏兎を待たせたらいけないから切るよ？』

「ああ。なあ、今日は客がすくねーんだよ。おばさんだけで後は誰も来ないんだ。もう、事務所閉めて帰ってもいいか？？」

六花は思った。

——玉兎はズルい。

六花の切なる思いは無情にも切られた。玉兎はすばやく電話を切ると、帰ってくるまでまだ残っててくれ、という意味をこめて適格な返事を避けたのだ。

「ふん」

六花は携帯電話を放った。電話は硬いソファの上では跳ねもしなかった。

こん・こん。

いつの間にやら事務所のなかまで人が入ってきていたらしい。入ったあとに、その人はハツとして戸をこんこんとノックした。

六花は立ち上がり、緩んでいたネクタイを締めた。

「いらっしやいませ」

あ、とその人は消え入りそうな声を漏らし、ぺこりと頭を下げた。

六花は長く頭を下げたままの姿をじっと眺めて、大体じぶんと同じ年だろうかと思った。他校の制服を着ていた。それも名高い進学校だ。

「あの、依頼したいのですが・・・」

「どうぞおかけください」

「は、はい」

二人の兄がしてきたことを幾度となく脇で見てきた。だから一人で留守を任された今だけど、一人でこなせるんだ、といった風に六花はすました顔をしていた。

「飲み物はコーヒーで宜しいですか？」

「あ。どうもありがとうございます」

六花はさらにすました顔で、コーヒーを沸かしに行ったがコーヒー豆が切れていたことに気づきハツとした。昨日、遅くまで居残って調べ物をしていた隆一がコーヒーを飲み干したことを思い出した。その代わりになるものはないかと冷蔵庫を開けたが、中はすっからかんだった。おおかた、兄二人が依頼主のもとへ行く前に腹ごしらえと称して根こそぎ食べていったのだと思いだした。

白々しい咳をひとつ漏らして、六花はいった。

「今日は暑いですね」

「あ……。ええ、まあ」

その人は事務所の長いこと磨かれずにくもってしまった窓ガラス越しに外を見た。今日は比較的肌寒い一日だと思ったのだが、と言いた気な表情で外を眺めている。

「じゃあ、冷たいお水でもいっぱいどうですか」

「……おねがいします」

正直に何も無いのだと言えいいのに、とその人はひとしれず思った。少しおかしくもあった。しかし、自分と同年のような少年がここを切り盛りしているとは到底思えなかった。太月事務所とは高校生が経営していたとは一度も聞いていなかった。かといって、今さら失礼しました・間違いですと去られるわけでもなし。

「おれは一晚六花です。いちばんろっかあなたのお名前は？」

「おおはら・みなと大原湊です……」

湊はこれからどうしようかといった途方にくれた顔で名乗った。六花はついでに年も聞いてみた。湊は今年で16歳になったばかりだと応えた。それが分かるや否や、六花は顔をにやりとさせて、

「なーんだ。おれ、先輩じゃん」

と恐ろしいくらいに鼻を高くした。

じゃあ、敬語つかわねーぜ、とファイルを捲りながらウキウキした面持ちで言われて、湊も怪訝そうにするほかなかった。

「じゃあ、湊。あんたの用件でえーのを聞かせてくれ」

もう、呼び捨てだ。

信じられない、と湊は眉根をよせたが、

「早くしろよ」

と急かされて慌てて詳細を述べ始めた。

「僕の家、最近ヘンなんです」

「ふむ。ヘンとはどんな具合に？」

はい、と湊は静かで長い深呼吸をした。

——その日、一人で湊は家に居た。両親は共働きで、いつも一人の時間が多かった。その日は珍しく塾をさぼって優雅にソファに寝

そべり、レンタルしてきたDVDの新作を見ていた。

すると、二階の戸が立て続けに　ボタン・ボタン　と耳に痛い音をたてて閉まった。

風も吹いていることだし、窓を開けていたからそれでドアが閉まったのだろうと思っていた。

だから気にせずにDVDを見続けていた。

それから一時間と経たずに、たしかに戸が開け放たれる音がした。誰かが部屋の内側から癪癪を起こして、ドアをバターンと開け放ったような音だ。びくり、とした湊はソファから起き上がるとテレビの音を消して、耳をすました。

——何かおかしいぞ。

そう思ったのは、二階で誰かが歩きまわる音がしてからだった。それは、床を軋ませながらちょうど湊の部屋を歩き回っている。

じとり、とした汗が湊のうなじを濡らした頃、彼は立ち上がった側にあったテニスラケットを引っつかむと——テニスは彼の両親の趣味——抜き足差し足で一階の廊下を進んだ。

彼はこう踏んでいた。

——泥棒だ。

最近、回覧板でまわってきた。近所に空き巣に入られた家が何軒とある、と。

生唾を飲み込み、そのまま階段の一段目に足をかけたのはよかったが、それが思いのほか軋んだ音をだした。湊の家はかなり老朽がすすんだ木造二階建てだった。

「そのとき、ヤバイと思ったんです。泥棒に気づかれたかと思ったのは、二階の足音が止んだからなんです」

足音はやみ、急に静かになった。それがまた湊を不安にさせる。

しばらく二階に上がる勇氣さえなく、湊は一段目に足をかけたままじっと二階に耳をすました。

それからどのくらい時間が経ったのか覚えていない。ただ、二階に“確かな”気配を感じていた。だから、まだ何かが二階に居るのだ

と確信した。

「警察に電話をかけようか、と思いましたか、泥棒の姿も見えていないのに思い込みだけで電話をかけるなんてただのイタズラ電話ではないですよ。だから、僕は・・・」

だから、湊は勇気をふりしぼって二階にあがった。

その時は気が動転していたのか、湊でも説明がつかないほどの奇声を発して一気に二階まで駆け上がったという。

だん、と音を立てて駆け上がったときにまず驚いたのは、湊の部屋の戸が開け放たれていただけでなく、両親の寝室も、残りの部屋の戸がすべて開け放たれていたことだった。

咄然と眺めていると、本当の使命を思い出してひとつひとつ部屋を見回ったがおかしなところは見当たらず、そのときはただの風だけで自分の早とちりなのだと思ったという。

「けど、違っただす・・・。」

早とちりでも、

勘違いでもない。

確かな、妖雲。

「部屋の様子は日に日におかしくなりました」

誰もいないはずの二階から人がバタバタと駆け回る音がしたと思えば、二階から一階の階段をタッタッタと軽快な音よろしく、駆け下りたり駆け上ったり・・・。

最悪な場合は、机の中があらされていたり、椅子が逆さにおかれていたり。

トイレに行って部屋まで返ってくると、違和感を覚える。まるで天井から監視されているような視線を感じる。だからといって、確かに具現化されたものの姿はなく、あるのは虚空だけだ。

湊は顔を苦くしたまま、六花の顔を見た。吐き捨てるように彼は言

った。

「決まって僕が一人のときに出てくるんです」

両親と一緒に食卓を囲んでいるとき、

両親と一緒に居間に居るとき、

両親が家に居るとき、

湊が、一人でないとき、

「そうなる何も起こらないんです。まるで足音や部屋が荒らされたことが嘘みたいに」

「両親にこのことを？」

「言うわけないですよ」

文字が書き殴られたファイルから顔を上げると、六花はしばし黙った。そして、

「・・・何か理由があるみたいだな」

「言ったところで、母親が泣くだけです」

「ほお」

母親が泣く、とはまたはっきりした応答だな、と六花は思った。

「ただ、早くこの奇怪なことをどうにかしたいんです。部屋に居るときだけじゃない。家のどこにいたって、気味が悪い。見えない誰かに見られているような気がして落ち着けないんです。どうにかしてくれませんか」

「うん。どうにかしてやるよ」

どうにかする、と言ったが、それは六花の出る幕ではない。六花はあくまでも留守番を頼まれた人間である。クライアントの依頼を請け負い、解決する行動をするのは二人の兄の仕事である。

六花に出来る事はこの時点で、まず、無い。

ちょうど壁掛け時計が、正確な時間よりも15分遅く5時を知らせた。

ボンボンボン。

と、三つ濁った鐘の音が響くと、事務所の戸が開いた。

「ただいまー」

上背のある青年が入ってきた。飄飄とした声色で、おっ、と言うと滑稽に一礼した。

「お客様でしたか。これは失礼をしました」

これが、長男の玉兔である。六花もそうだが、兄の玉兔も顔立ちが整っていた。

次いで、事務所の入口にスーパーの袋を両手にぶら下げて入ってきたのは、次男の烏兔である。

烏兔は長男とちがって、表情の乏しい青年だった。だからといって冷たい印象を与えないのは、烏兔がはなつ雰囲気から全く殺気だったものが発せられていないからかもしれない。

烏兔は一礼すると、冷蔵庫の戸をあけて冷凍食品を詰め込んだ。

「六花、もう帰っていいよ」

「はあー！？いま、依頼主さんに話をうかがってたところだぜ。横取りするきかよ」

「うん、じゃあ、そこに座ってな」

玉兔はうきつきとした面持ちで、六花の脇に腰を下ろした。

太月事務所の三兄弟 2

湊の話を一部始終ききおわった玉兎は、いきなり立ち上がると事務所のドアまで行き、

「では、今日はこのくらいで。明日の午後五時にお伺いいたしますので」

はあ、と湊は腑抜けな顔をしている。

これだけか、といったげな顔だ。ここにくればすぐに解決してくれるものだと思っていた。

彼が驚くのも無理はない。かつてに玉兎は明日の5時に決定したのだ。これが彼のやり方だった。

湊が去ったあと、玉兎は大仰に大きなため息を吐いた。

次男の烏兎が、冷凍食品の包装をばりばりと破っているかたわら、

六花は一気にコークをラッパ飲みした。

「かーっ。鼻にくる」

炭酸飲料水特有の、つんとした感覚に顔をしわくちやにして、ソファに腰をおろす長男の横に体を投げた。そして、長男が手にしているものを見てギョツとした。

「な、なにそれ」

六花が驚くと、長男は無頓着に答えた。

「身代わり」

玉兎が身代わりと呼んだそれは、人のかたちに象られた木の板であった。その腹にさまざまな人名がかかれている。どの背中にも長々と清めの言葉が書いてあったが、どれも清めが効きそうな顔はしていなかった。玉兎が生みの親のため、どれも無様な表情をしている。それがまたあるうことが、今から夕飯を囲むであろう机の上にごっそりと山積みされている。

「気味悪いな。早くどけるよ」

「六花は明日暇だろう？ だったらさ、湊くん……」

「おい。おれの話は無視かよ」

その気味の悪さに絶えられなくて、六花が木の人に手を触れようとしたところで次男がその手をいち早くつまみあげた。触れるな、の意である。

そつちこそ触れんな、とふくれつつらで顔に表したが、烏兎は弟の顔も見ずに再び冷凍食品の包装剥ぎに取り掛かった。

「ていうか、おれは何も出来ないぞ。兄貴たちと違って何の力もないんだからな」

「湊くんが気づくようにいろいろ横から助言してやればいい。僕らの能力は今回の依頼じゃ足りないからね」

「そんなこといつてさ、本当は仕事休んで楽したいだけなんだろう」

「はあ。悲しいね。いまのを聞いたか、烏兎」

烏兎はこちらに背を向けたまま、肩をすくめて見せたただけだ。

「いいか、六花。僕らは今から腹ごしらえをしたらここを二日ばかりあけるから」

「えっ？」

「ことによつては三日となるかもしれないね。だから留守番、よろしくたのんだよ」

「隆一さんは？隆一さんもいつしよに行くのか？」

「いいや。彼はかれで、依頼主さんのところに泊り込みで仕事におわれて大忙しさ」

「はあ。また一人で留守番かよ。いいかげんに暇死にするぜ、おい」

「だいじょうぶ。今から一時間後に“そつすけ 聡介”が来てくれることになつてから。だったら暇はしないはずさ。二人でおしゃべりなりゲームなり宿題なり、好きな子の話に花を咲かせるなりするがいいさ。そついつてから玉兎は、烏兎からラザニアを受け取って、熱い熱いと食べ始めた。

聡介が来る、と聞いた六花は先ほどよりも幾分か表情を和らげていた。

「だから、依頼主さんのところへはお前と聡介のふたりでいくといい。少なからず聡介は役に立ってくれるだろうからね」

「そうはいうけどよ、あいつはカナリの貧弱モノだぜ。依頼主の家でぶっ倒れても知らないぜ」

「今回は、聡介が倒れるような大物じゃない。小物かといわれたら、そうでもないかと否定すべきかな。というよりも、ランクをつけるように切羽詰った相手でもない」

玉兎はずるい。

六花のわからないことばかりについて、先に立ってしゃべりだすからだ。

「まあ、いいや。聡介が来てくれるなら退屈しのぎにもなるだろう」「決まりだ。じゃあ。あとはまかせたよ」

と、二人の兄は食事を早々に切り上げ、事務所の出口までさっさと歩いていってしまう。

おお、と返答をしかけて、六花は机の上がそのままになっていることにぎょつとした。

「おい！！これ、どうにかしろよ！！！！」

それから

事務所のいかれ時計がちょうど夜中の2時をさしたとき、事務所の戸が開いた。

ソファに寝転がって深夜番組を見ていた六花は、入ってきたものに一瞥もくれずに、

「明日の午後5時、ひまか？」

入ってきたものは、六花の向かい側のソファに腰をおろすと静かな面であなづいた。

「行けるよ」

「よし。決まりだ。はじめて兄貴たちから任務をもらったんだ。はじめの依頼主さんだ。失敗なんてできねえよ」

高揚した表情の六花に、聡介は静かに言った。まるで諭すような

いかただった。

「責任は影のように足元をついてくる。決して切り離せない存在だよ」

しばしの沈黙のあと、

「ふん。さすがに隆一さんの弟だぜ」

隆一のおとうと。

だけど、二人の血はつながっていない。

太月事務所の三兄弟 終わり（前書き）

キーワード：幽霊、三兄弟

太月事務所の三兄弟 終わり

「桶だ」

水色のタイルが敷き詰められた風呂場の床に、桶が転がっている。先ほどの音の正体はこれであつた。

六花は湊と違つて、別段気にした風もなく、それを手にとって手ごるな場所においた。

「これか？勝手に物が動いたりするっていう現象っていうのは」
「はい」

でも、と湊が遠慮がちに口を開いた。

「浴室は今回が初めてです。いつもなら、決まって僕の部屋ですか」
「ら」

「ふうん。‘奴さん’は見たか？」

「はい？や、やつこさん・・・って」

半笑いする湊に、六花は呆れた。

「決まってるだろ。幽霊だよ」

「まさか…」

湊は顔色を悪くした。

「奇怪なことが家で起きた。だからうちの事務所に来たんだろ？見てないのか？一度も？」

鼻を高くしていう六花のそばで、聡介は思う。

（自分だつて言えないだろうに）

六花には靈感とか、見える、とか感じるという性質がもともと備わつていない。

「見たことはありません」

「よし、わかつた。それじゃあ、聡介にきく。奴さんはいま家のどこにいる？」

三人のなかで幽霊の類を目にすることがするのは聡介だけだ。

「そんなこと言っているの？」

何を遠慮する必要があるんだよ、という意味をこめて六花は大げさに肩をすくめて見せた。

「それよりも、この家で奇怪なことが起きる理由を考えたらどう？大原くん、なにか思い当たることはない？お風呂場の桶が転がったり、部屋の引き出しが荒されてたり、誰かに見られている気がしたり、誰かが歩く足音が聞こえたり、部屋の戸が勝手に開閉されたり、これらが起きるときは決まって両親がいない時で、大原くんが一人にいるときだ。という節に、思い当たるところがあるでしょう？」
聡介は断定的にいった。

ひよっとすると、とか、もしかしたら、というあいまいな可能性ではなく、確実性を押してきた。

しかし、問われた本人は困惑している。思い当たるふしがあったら、とつくに解決するように自ら動いていますよ、といった。

「ううん。そんなこと、絶対はないと思うよ。ねえ、よく考えてみてよ」

「確かにこの家には何かがいるんだな？」

六花が聡介にきくと、聡介はにつこりわらった。

「いる。でも、かわいそうな事に迷いがあつて本来行くべき場所にいけないでいる。この子は幽霊だ」

「ゆ、ゆうれい・・・」

ぎよっとした。

「まったく恐れる必要もない相手だよ。この子が湊くんを嫌ったり恨んだりしないように、君も怖がったりすることは絶対にあつてはいけないよ。失礼だからね」

「そ、そんなこといわれても…。思い当たることなんて、全くないです。ましてや家に幽霊がいるなんて・・・」

考えただけでもぞつとします。

そういった湊の背後で、階段を駆け上る音が聞こえた。かすかだが風が生まれて、湊の前髪を跳ね上げて行った。

ただだ、と一気に駆け上がる音。しかし、彼らのいるところから階

段を上がって行く人影など全く見当たらない。まさに、見えざるものが上がって行ったのだ。

「二階に行ったな！」

六花は躊躇することなく我先にと二階にかけのぼった。

遅れて聡介と湊が続く。

「聡介さん、恐れる必要のない相手っていったいなんですか？思い当たりません」

「きみは遠慮しているからね。無理もないけど、でも、どうして触れてはいけないと思うているの？その子は、むしろ鍵をかけられているあれにまたあの時のように触れて欲しいと思っているし、なにより未完成のままのあれを完成させてほしいとも願っている。これが‘彼女’の願いだ。これだけいっても、まだわからない？」

もうヒントは出し尽くしたよ、と聡介は穏やかに笑っている。反面、悲しそうな顔にも見える。

「なんで…、なんで知ってるんですか？ぼくが、触れていないあれを…どうして…」

不思議そうな顔で湊は顔を上げ、次いで急いで自分の部屋に駆け込んだ。

やっと、分かったらしい。

「六花さん、やっと分かりました。いいえ、気づきました」

そういつて聡介はポケットの中から我武者羅にひとつの鍵を取り出し、一番上の机の引き出しの鍵穴に差し込んだ。ひねるとガチャリと音がして、中から譜面が出てきた。

未完成の譜面だ。

「どうして家にへんなことが起きるのか分からなかった。両親がいるときにはなぜ起こらなくて、どうして僕だけが家にいるときだけ

可笑しいことが起こるのか、今になってようやく分かりました。理由は、僕が利香との約束に触れないようにしていたからだ」

大原利香。

湊の妹で、去年の暮れに亡くなった。年子の妹で近所でも有名になるほど二人は友達のように仲が良かった。二人は毎日のように音楽に夢中になった。利香が高校受験を控えていたあのときも、二人は音楽を止めなかった。両親はそんな二人を呆れた。

とくに音楽が大好きで毎日のようにギターに触れていたのは湊であった。利香はそれに便乗するように兄と一緒に音楽を楽しんだ。

作曲をして唄うのは利香。それをアコースティックギターで伴奏をつけるのは兄の湊の役目であった。

その日、重宝していた曲が完成するはずだった。

冬の寒い日で、利香は塾の帰り道に交通事故で亡くなった。あつという間の出来事で、両親は悲嘆に暮れ、湊は途方にくれた。

そのまま、あのときの曲は未完成のまま机の引き出しにしまわれた。ギターも触れずに壁に立てかけていた。日に日にギターが埃をかぶっていつても、湊は見てみぬふりをした。またあの日のように触れればどうしようもないくらいに心が死んでしまう。もう、あの日に戻ることはいできない。せめて、悲しみを押さえ込みたい。

そう思った湊は、未完成の曲を封印してしまったのだ。

しかし、いま幽霊となって現れた利香はあの曲を湊に完成させて欲しいという。

「つたない曲になってしまいかもしれない。それでもいいというのなら、僕はもう一度ギターを持ちます」

「うん。利香さんはそれが果たされてやっと思うべき場所に行けるんだよ」

あれ以来、湊の家に奇怪なことは起こらなくなった。湊はあれから

ギターを持つ回数が増えたという。

眠って候 1

1+1が、分からなくなるくらいに、慌てた。最高に慌てた。そうなる手がすべる。

ドラム缶の最高に尖った部分で手を切った。

真っ暗闇だったから色を判別できなかったが、俺の体から出たんだ、赤い血が裂けた親指の腹からどつと流れた。

「おい。幾いく、アセンじゃねえ」

「は、は・・・い・・・」

まるで、

右の目尻で心悸が高鳴るようだった。鬱陶しいったらなかった。

俺の心境とは裏腹に、そばでは余裕しゃくしゃくに穏やかな川のせせらぎが聞こえた。

まだあの時は厳しい冬だった。雪もちらほらと降っていたはずだ。厚いコートを羽織っていたのを覚えている。

しかし、あの時は季節などお構いなく、きたねえ汗がどつと体中から噴出していた。俺の両腕の付け根と、足の付け根から下が恐怖にガクガク震えていたつてのに、向かい側ではせつせと“死体”をドラム缶に織り込む大条おおじょうの姿があった。

奴め、人間じゃねえなと思った。

はつきりと聞こえはしなかったが、大条のガキはたしかに“例の”鼻歌を歌ってやがった。

例の、というのは今やドラム缶にありえない角度に折り曲げられ、綺麗に収まった仲間の死体が、生きてたところによく歌っていた歌だ。それを奴め歌いやがってる。

完全にふりきつちまった俺の精神を、ゆっくりと口角をあげてあざ笑った。反射的に俺は大条から目をそらしたのは確かにあいつが怖かったからだ。俺は死体を目の前にしたのは初めてだし、無論、新人のあいつだって同じことだった。

目をそらした先に、タバコを吸う“服部さん”の姿があった。

「おい、泉田せんたひとりに何十分かける気だ。てめえもオロされてえのか」

タバコを静かに吹かす服部さんの横で、“土井さん”がわめいた。幸い、河川敷に人の姿もなければイヌツコロいっぴき居やしなかった。

「早くふたを締めやがれ」

そういつて土井さんはイライラとした足取りで河川敷を先に去った。あの人はいつも怒っているが、今日は特に怒っていた。無理もない。

上からの命令とは言え、自分の一番気に入っていた弟分を殺さなくてはならないとなればどうにかなっちまう。標的は人だ。どんな理由であるにしろ、気はどうにかなる。いや、もう全部ふりきれちまっただ。

それから俺と大条は二人でドラム缶にふたをする作業に移った。と、ここにたどり着いてから一度も口を開かなかった服部さんがそこで割って入った。

「待て」

そう、一言、低くいつた。懷をがさごそとやって、やっと取り出したのが開けられてない小綺麗なタバコだ。そして同じくピン札の束だ。真っ暗闇に沈んだなかでも俺だって目はきく。

いやになるくらいはつきりと見えた。服部さんは、生前、泉田が好き好んで吹かしたタバコと、やつが昨日稼いだぶんの金を一円も違わずドラム缶の中に入れた。大条は短く、あつ、なんて言っつて、金を惜しがっていた。

それから全て終えた。静めた。鎮まった。沈んだ。

あの時そばに誰もいなかったが、いいや、誰かいるに違いなかった。俺らのほかに、誰か、少なくとも見えているやつが一人はいるはずだとドキドキしてならなかった。できることなら一緒に沈んじまいたかった。こんなの、二度と御免だと拝むように見えない何かに唱え

た。

大条の気取ったセダンに乗り込むと、後部座席で服部さんは静かに大きなため息をはいた。この人がため息を吐くことなんて一度も見ることなかったから、俺は居た堪れなくなつて寒いのに助手席の窓を全開にして意味もなく夜の曇り空を仰いだ。みんな泉田を好いていたんだ。

「幾さん、寒いすよ。閉めてください」

下手な鼻歌まじりにハンドルを握るこいつ、

大条。

こいつだけは違った。

おれらの誰とも違っていた。

眠って候 2

泉田は、实际いいやつだった。

おれよりひとつ年下だったがつかりした奴だった。

兄貴分の土井さんからどやされてばかりいたが、同期では誰よりも一番に期待され、信頼されていた。

そいつがなぜ、仲間に殺されなきゃあならなかったのか。

確かな理由なんてのは知らない。内部事情には詳しくないんだ。

ほとんどある程度上のところで情報がストップしちまう。そこでおれのような下っ端が首を突っ込んだところで何がどうなるわけでもなく、終いには突っ込んだ首を一刀両断されてお陀仏だ。命が惜しければ、うるちよろしいこった。ただ与えられた仕事を忠実にこなす。

おれだって、自分の命が可愛くないわけではないからな。

だから泉田が殺されてもよかったのか、と聞かれると、

そりゃあテメエらの息してる世界とは違うんだよ、と言っざるをえない。

「幾さん」

ひどい頭痛だ。

頭が割れるような痛みが後頭部をかれこれ6時間悩ませている。

「幾さん、ごめん。目玉焼きが崩れちゃったからグチャグチャにしたい」

ことん、と頭上のテーブルに、皿が頼り無い音を立てて置かれた。むくつ、と起き上がるとおれは、覚めてんのかそうじゃないのか分からない状態であたりを見回し、きらきらとした無垢な瞳とかち合

った。そいつは俺よりも10は年下だが、まったく侮れない「位置」に立っている坊主だった。

「ご飯は玄米にしといたよ。最近、幾さん不健康みたいだから」

「……」

そいつの名は、洋平多。こいつは偽名だ。

何を隠そう、おれたちが所属している組の頭の嫡子だ。

だから弟分であつたとしても、それは本当の意味で下というわけではなく、将来おれの「親分」になるわけだ。それが何十年先か、いや何年先か、もしくは明日かわからないが、とにかくおれの下でありながら広く言つて、上の存在つてわけだ。

「あ。あと黒酢にもずくにめかぶにおくら……それから……、ところてん。どうぞ、食べちゃつてよ」

はつきり言つて、「こんなやつ」がおれの将来の親分になるとは考えられねえ。

「はあ……」

ため息が出た。それもでかいやつ。

「えっ……」

途端に、平多は最高にシケた顔をした。不安なんだろう。おれの機嫌を損ねるのを、こいつは好いてないからな。別にどなりもしないおれだが、どなられるよりもおれにため息を吐かれるのがやつは敵わないらしい。

「えっ、と……。ご飯いらない？」

もずくが嫌いなのかな、ぼそぼそと言っている。

まったく。反吐が出るぜ。

「おい、平多」

はい、と奴は親父に似ても似つかない弱弱しい声で返事をした。まったく困る。困りすぎて途方にくれちまう。

「いま何時だ」

「時計なら……手首にはめているじゃない」

「……減らず口め」

「あ。それ、使い方間違ってるから」
「るせえ！」

おれが立ち上がると平多が目を輝かせた。

「出かけるんだね。ぼくも連れてってよ」

「テメエはここで留守番してろ」

「・・・お父さんからはそう言われなかったけどな。お父さんは、幾さんによくしてもらったように言ったよ」

「はっ！馬鹿をいえ。そこで待ってる。テメエをつれて歩くと蜂の巣にされちまう」

「ひどいなあ。僕だってもってるよ。幾さんのサポートしてあげるから」

そういうと奴は懐から立派な銃を一丁取り出して、得意顔だ。
おれはぞっとしたね。

親分の親ばかりは下にも届いていたが、まさかへな猪口息子にそぐわない立派な一丁を手渡しちまうなんてどうかしてる。こいつが立派なたまになるとは到底思えないが、まさかなあ。

「おい。平多。オメエ、連れてってやるからそいつは置いてけ。な」

「うん！わかった」

ぽいつ、とそれを床に放り投げたときは体中が真っ青になったにちがいない。

「ばかやろおっ」

「だいじょうぶ。中は空だから。幾さんってビビリ」

「！！！！」

平田は今年でやっと19歳。おれは今年でようやく29歳。
そして、

「あ。幾さん。遅いすよ。早くのつてくれなきゃあ約束の三時まで間に合わないすよ」

「ああ、すまねえ」

あの趣味の悪いセダンの持ち主、大条。

大条。こいつは、今年で20だ。

平田とひとつ違いだが、二人を比べたら雲泥の差がそこに生じる。大条は妙に大人びていてどこか時として子供じみていたが仕事はスムーズにこなしていた。

何よりも下層のやつらとの交渉が上手く、何にしても要領がいいものだからこの半年でいろいろと欲しいものを手に入れ、上から与えてもらっていた。実をいうと、おれはこいつよりも成績が悪くて上から揺さ振られていた。まあ、崖っぷちに立っている今だが、上からたらされた平多の助けの系がある限り殺されずにすんでいる。おかしい話だ。

嫌いなやつに知らず知らずのうちに助けてもらってるんだ。お気に入りの兄貴として慕われているんだなあ。

「。。駅で服部さんと土井さんを拾うんすよね」

「・・・そうだ」

そうだ。

そういうことになっている。

昨日の集まりではそういうことになっていた。頭が変になるくらい確認した。

だが、待ち合わせの10分まえに二人からメールがくることになっていたが、それが無い。大条と平田を車に残し、おれだけで地下鉄の階段を下りていった。人の波が途絶える時間帯だ。まばらな人の数に目をちらちら走らせつつ、おれは足をせかした。

なにか、妙な胸騒ぎがする。

乗りはしないが切符を買って改札口に通した。ちょうど電車がついたらしい。むっとした汚い熱さに顔をしかめつつ、残りの階段を慎重に駆け下りていった。

服部さんと土井さんが降りてくるだろうとくっつけていたものだから優に構えて開く戸を黙ってみていた。人の流れがどつと流れてくるなか、黒山の流れるひとのなかに大きな隙間ができた。

それが、また妙だった。中には女の悲鳴が混じっている。人がまるぶように逃げている。

直感的にわかった。

土井さんか、服部さんのいずれかだ。

刹那、女のヒステリックな叫び声がどんと跳ね飛ばされた。二人の男がいかつい体をのぞかせて、俺に向かって大声で叫んだ。

「つかまえる！！やつだ。幾多だ！！」

おれと二人のうちの一人の目玉がかちあった。ちくしょう。なんで俺の名を？

おれは背を向けずに土井さんと服部さんの姿を探した。ない。そこには無かった。そうと分かれば、降りてきた道とは逆のほうから階段を上がり、人の波に紛れ込もうと必死になった。

発砲されずに済んだことがありがたい。

ただ、最後にちらりと振り向いたそこに、いかつい男に右腕をつかまれて血だらけになってぐったりとする土井さんの姿があった。

その視線とあえば、走るしかなかった。

土井さんの顔には自嘲に満ちた奇妙な引きつった笑みが浮かんでいた。

・・・すまない。土井さん。

おれはその後、信じられないくらいに上手く奴らをまけたが、大条と平多のもとには帰らずに絶対見つからない自信のある場所へと逃げていた。

なに？

なぜ親分のところに戻らないのだった？

笑っちゃまうぜ。

んなところにもどってみろ。

ドアをあけた瞬間に腹が真一文字に斬られてお陀仏だ。

元凶はどこにあると思ってんだ？

おれは正に仲間内から殺されようとしてるんだよ。

きつと、泉田に関連してるに違いねえ。

なにせ、身を潜めてから二日たったあと、服部さんから電話があった。

「土井がやられた」と。

誰に聞かれてるかわからない電話だったが、もう服部さんは投げ捨てたような口調ではなしをつなげた。

「泉田だ。やつだ、泉田だよ。やつのせいで俺らは殺されるぞ」

「・・・大条は？」

「さあ・・・」

大条、やつは絶対に死なない。その確信がおれにはある。

眠って候 終わり

ちゃんと布団で寝なかったから？

スプリングが飛び出して、これ以上ぼろくなれないほどに汚ねえソファに寝てしまったからか？

いいや。問題はそこじゃないだろ。

おれがこの世のものじゃないものと接するとき、それはきまって必ず寝るか寝ないかの瀬戸際に起こっていた。

寝るか、寝ないか？その意味がわからねえって？？

ああ。

だれにいつても首を傾げられるんだな。

寝るか・寝ないかの瀬戸際に奴さんたちが現れるのは、正直言ってきついんだよなあ。

おれの親父の家系は昔から霊能力があるというのか、必ずこの世のものじゃないやつらとせつせするときは、その前兆として「鈴の音」が聞こえるという。

おれは全くそんなの聞こえないんだがよ、親父たちが言うに、まず無数の鈴の音がおとなしく近づいてきたかと思うと、それがお構いなくじゃんじゃん揺さぶられてまるで鼓膜を打ち破らんとするようにつけたたましく鳴るらしい。

そして、ぴたりと音が止んだところで奴さんたちが訪れるらしいが・

・

うちの親父はかすかな鈴の音が聞こえるだけで、ついで奴さんたちを見たことがないという。きっと親父でその力も途絶えたんだらうよ。

おれの場合の寝るか、寝ないかの瀬戸際ってのは、また厄介でなあ。体と意識が反発しあうんだ。

意識は、いま正に寝ようとしているのに体が起き上がろうとする。

体を動かすのは意識であるから、意識がしずめようとするが体が抵抗して起き上がろうとするんだ。意識はそのうち体を制するのをあきらめて、自分だけが眠ろうとするから厄介だ。おれのかすかな意識はグルングルン回り、体は見えない何かに貼り付けられたようにしながらも抵抗し続ける。

仰向けになった体は、つねに上を目指して起き上がろうとし、意識はつねに下のほうを目指して起き上がらせないようにする。それに振り回されるのは俺だつてのによ。

それがしばらく続くと、奴さんが現れたりするんだ。まあ、ときに現れないときもあるんだぜ。

あのときは、血だらけになって敵の手の内にある土井さんの姿が、未だにまざまざしかつたから、きつと死人になって魂へとかわつた土井さんが枕もとに現れるかと思ってた。

が、そうじゃあないんだなあ。

『・・・く、いく・・・。おい、幾さん』

聞き覚えのない声、といったらそりゃあ嘘だね。まちがいなく、死んだ「泉田」だった。

文字通り、がばつ、と起き上がりたかつたが・

あいにく俺は、二つの抗力にさいなまれて未だに不自由の身である。自由に目もあけられずにいるんだ。

いつとくが、この状態に俺があるときは俺自身の意識はお留守となっているから、おれが自由にできる意識なんてのはない。ただ体と意識かに翻弄されてぐらうしてるだけの俺だ。

口なんてきけないから、ただ聞くことしかできない。

だけど、不思議だよなあ。死んだ泉田が枕もとに現れても、まった

く怖くなかったんだからよ。しかも、この時ばかりは意識がはつきりしてやがる。

『ど・・ドラム缶・・・ドラム缶・・・だよ、幾サン』

ドラム缶。

そいつがやつの口から出てきたときは呪い殺されるだろうと思ったが、そうじゃあなかった。

『ドラム缶を狙ってるんだよ・・・あいつら・・・・・』
なんだ。

『土井さんも服部さんも殺されちゃあいないよ・・・』

だが、土井さんは血だらけで敵につかまっちまったし、服部さんとはもう連絡が取れないんだぜ。殺されてんだよ。おれだけしか、生き残ってないんだ。ちくしうめ。

『はめられたんだよ・・・おれら』

ああ。そうだろうな。泉田、おまえには悪いが、おれらはお行儀よくしとくべきじゃあなかったんだな。けどよ、仕方がねえだろう。もうおれらはハメられちまったんだからよ。お前を殺すことを任された時点で、おれと土井さんと服部さんと・・・大条は仲間内で既にはめられちまってたんだよ。

『可愛いそうになあ・・・、幾サン』

はめられちまったのは、どうせおれだけじゃあねえよ。言つたろ？ 土井さんに、服部さんに・・

『それは違うよ。幾さん』

あ？

『はめられたのは、おれと幾さんだよ』

待て。おい、待て。待ってくれ・・・！

『ドラム缶のなかにおれの遺体と、大事なものが隠されてるんだよ・
』

大事なものってなんだよ。

『あれ、タバコだと思っただでしょ？あれはね、タバコじゃない。タバコに見せかけた偽ものだ。親分と他のシマが、あるかけ引きをするための、ブツだったんだよ・・・』

そんなのきいてねえよ。そもそもなんでお前が死ぬ必要があるんだよ。

なんで・・・またおれが？

『平多だ。・・・平多だよ。親分は自分の息子を、そのシマの頭かしらにしたいんだ』

しま、って言ってもよ。そのしまの頭は了承してるのか？

『知らないだろうよ。駆け引きが行われてるのは、親分とそのシマの子分たちとの間で行われてるんだ・・・』

馬鹿野郎。親分を裏切るような子分の上に立って、成り立つとも思ってるのか？

それで・・・、それでなんでおれがそれを知らないんだ？ おれだつて、お前だつて親分の子分だぜ。

『実は平多が親分からいつかつた任務があるんだ』
つは・・・。馬鹿いえよ・・・。

『他のシマの親分の座をやるかわりに、いちばん信賴していた兄貴分を殺せ・・・っていうのさ』

それが、俺ってか。

『残念だけど、平多は幾さんを殺すことになんの躊躇いもないそう

だ
』

お前が殺される必要は・・・あったのか？

『おれは、その話をたまたま盗み聞きしちゃったからだよ。そこを土井さんと服部さんに見つけられちゃって、即、親分のまえに突き出されたさ。きつと、俺のことだから幾さんに秘密をばらすと思っただらうね。おれは、自分でも言うけど、仲間思いだからさ。忠実ってこういうことだろう』

ちくしょう・・・。おれの信頼はどこへ置けばいいんだよ。・・

・平多か？ 平多に、殺されるんだろ・・・おれ・・・。それだけじゃない。服部さんに、土井さんも・・・おれをはめてたんだらう。どうすれば、いいんだ。

『逃げればいい』

ふん。そこまで命が欲しくねえよ。

『まさか・・・』

知ってしまった以上、もう逃げるところもないさ。おれは、親分のところに行く。親分のところに行つて、何食わぬ顔をされたら・・・そのときはそのときだろ。

そのときは、その時だろ。

覚めやらぬ意識が働いて、懐の銃に手が触れた。

おれは、それつきり泉田とは会話をしていない。

まさか、殺したやつから命を救われるとはな。

じゃあ、おれ・・・罪のない泉田を殺しちまったってわけかよ。

それなのに、泉田はおれを救ってくれた。

ほんとうに、忠実なやつだよ、泉田。

死に身が二つ 1

角砂糖の甘さは、むごい。

時として過剰な甘さは、人の大切な部分を腐らせる。

午前零時を過ぎたコンビニで、賞味期限があと数時間と迫ったパンを手に取り、ポケットから百円玉を取り出したつもりだったが、

「あの、お金が・・・」

若い店員が、変な奴を見るような目で俺を見上げてきた。

金がなんだっていうんだ、といった気持ちで店員を上から睨んでしまったかもしれない。黒縁眼鏡をかけた若い店員は臆したように口をつぐんだが、彼もそこで引き下がることはできない。また、その必要もない。というのは、俺が出した硬貨は、国内のものではなかったからだ。

「あつ」

すみません、という言葉をはそぼそと口の先で濁らせ、慌てて財布から一万円を取り出した。おつりが9千と9百いくらきた。はじめから財布を手に取りればよかったなあ、と思いつつ、無駄に明るいコンビニを出た。

コンビニの煌々とした明かりに背を照らされながら、暗い色合いの服装をした若者たちが駐車場にいくつもしゃがみ込んで、仲良くたむろっていた。五人と群れる彼らのなかに、ひとり、頭をふらふらと揺らして落ち着きのない奴がいた。そいつは俺と目が合うなり、がなりたてた。残る四人は、初めからそいつが居ないかのように振る舞い、わあわあ怒鳴る彼を気にせず、手元のタバコを吹かしていた。俺にも彼らのような余裕が生まれれば苦労はないんだがなあ、

とそう思ったかもしれない。実際、俺には余裕がなかった。パンなんて食わなくてもいいのに、足を運ぶ余裕などなくせに、居ても絶ってもいられずに飛び出してきた。コンビニからの帰り道、足がふらついた。

そろそろ「薬」の切れるころだった。

誰かにつけられている。

そう気づいたのは、あの夜の、コンビニから家に向かうまでの帰り道だったかもしれない。

曲がり角を曲がったとき、背筋に悪寒を感じた。強い視線を背に感じ、確かに誰かがあとをつけてくるような気配を感じた。

遠くで犬の遠吠えが聞こえる。明かりが溢れる繁華街に足を向けたころ、その気配は徐々に俺と近くなってきた。しらふとは名ばかりの人が行きかう細い道にからだを滑り込ませて、その視線は俺の背から外れなかった。振り返ったら全てが終わってしまうような気がする。決して後ろを振り向かず、そのまま目的地の戸を開いてまるぶように中に滑り込んだ。

「おい、どうした。真冬だっていうのに汗なんか掻きやがって」

「うん」

「なにが、うん、だよ」

未だ火がつけられないタバコを口に加えたまま、布川は口の端で笑った。タバコはもうふにやふにやで将来有望でないことは明らかだ。「誰かにつけられてる・・・」

俺がそういうなり、店の奥で賭け事をしていた奴らが席を立て、店の数少ない窓ガラスによった。

「おい、そんなに立つんじゃないよ。お前らは奥で続けてればいいんだ」

布川は腕を組んで窓の外をにらんだ。曇りガラスだったら、何が見えるわけでもない。ぼやけたネオンがこちらに不明瞭な明かりを届

けるだけだ。

「ふむ」

何もわかったことはないのに、布川は理解したような声を出し、ソファに崩れる俺に向き合った。

「どこからつけられてた」

「そ、そのコンビ二だよ」

「気のせいじゃないのか。おまえ、こここのところ全く寝てないだらう」

「俺は寝なくても大丈夫なんだ。人間、寝なくても生きていけるだろう？」

「馬鹿をいえ。俺はお前と違って健全なんだ。いいから今日は休め」俺は本当に寝なくても大丈夫だ。寝なくても、生きていける。

だが、布川に無理やり進められたから、形だけでもいい、心を休めるために店の二階を借りることにした。

二階にあがると、布川の妹が雑誌を広げてくつろいでいた。部屋に現れた俺を見とめると、彼女はありきたりな言葉を口にした。

「こんばんは」

返事もそこそこに、二階の曇っていない窓ガラスから、恐る恐る通りを見下ろすことにした。が、怖くて出来ない。

「り、りかちゃん・・・」

「なに？」

「窓の外に誰か立ってる？」

彼女は雑誌を手にしたまま、不平を一言も口にせず、嫌な顔をせず俺の願いを聞いてくれた。

「窓の外に誰かっていつてもなあ。たくさん人が歩いてるよー」

「く、くろいひとかげは？」

「くろい？」

「そう。黒ずくめの怪しい人とか・・・」

彼女はやがて窓から離れ、

「怪しい人は誰も居ないよ。おじさん、疲れてるんだって」

ゆっくり寝たら、と16歳の女に進められて、俺はソファに横になった。

寝心地は悪くない。足が飛び出る、といったことを除けば。

ただ、誰かにあとをつけられているという事実が怖くて、寝るに眠れなかった。

死に身が二つ 2

後をつけられている。

常に、得体の知れぬ誰かに挙動を見張られている気がした。

気がする、という曖昧な表現はやがて確かな確信へとつながるわけだが、今はその段階ではない。

「天、お前、顔色が悪いぞ」

俺は長いこと伏せていた顔を、カウンターから上げた。ぼやける視界の中に、布川の姿がある。口のはじにタバコを加えているスタイルはいつもと変わらない。変わっているのは、いつにもないその気の遣う目だ。

「大丈夫か」

「ああ。俺はいつだって大丈夫だ」

「目がイっちゃまってるぜ」

「今に・・始まったことじゃないだろう?」

愛想笑いのつもりで、口角を上げたがすぐに下がった。あらゆる重さに耐えられず、身体はくたくただった。

「ちゃんと、寝てるのか」

「頼むから、しばらくほうつておいてくれないか。お前の心配性なところは、まるで、俺のかあちゃんみたいだ」

「お前のお袋なんか知るかよ。ただ、りかがお前のことを心配してるんだ。わかるだろう? てめえのことだ、てめえのことは、わかるだろうが」

「知らないよ、俺のことなんか」

俺はカウンターにゆっくりと両手をつき、助力を求めて立ち上がった。

一瞬、ふらつとした。

せつな、両耳の鼓膜がぐつと奥に引つ込み、俺を取り巻く音楽——店に流れる甘ったるい音楽——が、よく聴こえなくなった。まるでからだ全体の血液が頭という司令塔によって抗えず、ひゅつと一瞬で引き上げられたかのように、全力が奪われた。そのまま、俺は、店の汚い床に倒れこんでしまった。徐々にぼやける視界と、自ら消滅しようとする意識のなかで、嗅覚だけはなぜか必死に働こうとした。挽きたてのコーヒーのくせえ香りがする。また、「薬」を飲み忘れちゃったなあ。

目を覚ますと、やはり、店の二階に寝かされていた。

容赦なく秋の西日が、鼻面を照らしていた。

「まぶしい？カーテン、閉めようか」

布川の妹、りかだ。

彼女は相変わらず店の二階に始終こもっているらしい。彼女は、高校に通うのを厭った。勉強が嫌いなのか、とにかく訊ねたことがあった。彼女は首を横に振り、あつらえられた笑顔で「見えないものが見える。人って、やっぱり汚いじゃん？そういうもんだよね」と同意を求められたから、閉口してしまったのを思い出す。

「りかちゃん・・・いま、なんじ？」

「午後五時過ぎだよ。おじさん、あれから死んだみたいにグッスリ眠ってたよ」

「いけねえ」

俺は半身を起こしたところで、また眩暈を感じ、難なくソファに崩れてしまった。

「おじさんの仕事なら、お兄ちゃんが代わりに全部済ませてくれたよ」

「ああ。あいつにはいつも迷惑をかけるなあ・・・」

面目ない。そう思ったときだ。

背筋に、溶けることのない邪悪な氷の気配を感じた。それがじつくりと時間をかけて首筋から降下していく。

誰かにつけられている、気配が変化して、誰かに見張られていることに気がついた。一枚壁を通して、どこからかじつとりと重たい視線を向けられているような気がして、思わず短く叫んでしまった。

「ど、どうしたの？ 気分が悪いの？ お、おにいちゃんを呼ぼうか？」

りかは、慌てて階下を駆け下りようとしたが、俺がそれを止めた。

「だいじょうぶだ！」

あろうことが、大声で叫んでいる。見えない誰かに居場所を明かしているようなものだ。

「りかちゃん、頼む。その窓から下を見てくれ・・・」

「通りを見るんだね。わかった」

この子は、兄貴に似て聞き分けのいい子だ。

しばらく、窓の下を丹念に見てくれた。

「おじさん、その、怪しい人ってどんな格好をしているの？」

「く、黒い服装だ」

「くろ？ そんなの、この道にはいくらだっているよ」

細い路地には、もう西日も射さない。墨に沈められた道と変わっていた。やがて道にはネオンが灯りだす。が、その前に、彼女は見つけた。

「おじさん！」

居たわ、と彼女は暗い部屋の中で両眼を光らせた。と同時に、俺の背筋は、これでもかと凍えた。がたがたと、歯の根が合わないのぐつと抑える。

「そ、そうか。そいつは、いったい何をしてるんだ？」

知りたい。俺の感じる視線は、嘘かどうか知れたかった。建物の中にこもってもなお、感じるこの寒気はいったい何なのか、俺には必ず知る権利がある。

「何をしてるって・・・」

りかは、少し噴出し、また居直った。

「そうね……。黒いスーツを着てるわ……。顔は、よく見えない。うまくビルの陰に隠れてる……。でも」

でも、と次につながる言葉を次いだ彼女の声が心なしか震えた。武者震いって知ってるか？ あれに似た震えた。

「あの人の身体、ずっとこっちに向いているわ。わかる？ 私たちを見張っているのよ」

わたしたち？

いいや、違うな。

俺だけを——まさに俺を——見張っているんだ。

あいつは、きつと俺を喰らうに違いない。

背筋に張り付く氷は、快楽ではない享楽の色をしているはずさ。

「わたし、怖い」

りかは、窓から離れることもできず、その場にしゃがみ込んでしまった。

だから角砂糖の甘さは、ひどいんだ。

死に身が二つ 3

いつもの朝日が某喫茶店の二階に差し込んだ。

店の主人はタバコを切らしたことに、悲しさを覚えつつ、二階の部屋にノックもせずに入った。そこに、あるはずの友人の姿はないが、変わりに長い金髪を梳かす妹の姿があった。

「りか」

「なに？」

「あいつはどこにいった」

「あいつ？おじさんなら、夜中に出て行ったよ」

「おい、なぜ止めなかった。あいつは少々キてるんだぜ」

「キテル？なにが？」

兄は、妹の顔を一瞥してからソファについた。今、初めて妹の顔がこちらに向いたのだ。

「おまえ、たまには外に出ろ」

「いやだ」

「でないと、ここから放り出すぞ。ガキのお守りをいつまで兄貴にさせるつもりだ」

「私は、私で、おとなしくしているつもりだよ。お兄ちゃんは、なにもお守りなんかしていないじゃない」

ふくれっ面の妹は、兄の横顔に自嘲が浮かんだのを、すっかり見逃していた。

「まあ、いい。あいつはどこに行ったか知らないか」

「仕事だって、言ってたよ」

「ふうん」

彼はソファから立ち上がり、残りの仕事を終わらせようと階下に向かった。しかし、妹がそれを止めた。

「おにいちゃん！」

なんだ、とも言わず、ただ振り向くと、いつになく妹の顔に恐ろし

さの色が浮かんでいた。きょうだい、というのは、色濃く血のつながった者の異変には、いち早く気づくものだ。

「どうした」

「おじさんが、変なの。おじさん、黒い影に怯えている・・・」

彼は下りかけた階段を上ることなく、その場で立ち止まったまま、少々考えた。彼があれこれ考えている間に、妹は切に願った。

「お兄ちゃん。どうか、おじさんを助けてあげて」

両手を組み合わせる妹の姿を見て、彼は頭を掻いた。

仕事もそこに、どこかへ逃げよう。

逃げるといっても、同じ場所に長いこと留まることはしないつもりだ。せいぜい1時間が限度つてところだ。さもなければ、「やつ」に殺される。やつは、もうすぐそこまで来ている。やつに、距離なんて関係ないんだ。あいつは距離の疎ましさも越え、気配や音もなく現れ、俺に恐怖心を与える。あいつには、人間がうとましく思う物事の過程など、いっさい存在しないのだろう。表情ひとつ見せないが無表情の裏で楽しんでいるんだ。俺を、最高にいかれさせようとして、いかれていく俺を見て最高に楽しんでいるんだ。ぜったいにそうだ。今に俺はだめにされる。死よりも怖い何かを、あいつが隠し持っている。俺はそれを見せられるのが、こわい。

「おい」

常連客は、メガネの奥にある両眼を細め、俺をヘンな者をみるように見つめた。その目はいつもと変わらず、正常だった。しかし、俺

をいぶかしむ色が強い。

「だいじょうぶか？あんだ、顔色が悪いよ」

「そりゃあ、あなたと比べられたら・・・勝てないよ」

ちがいない、とメガネの常連客は懷を優しくたたいた。そこに隠れているものが確かにそこにあるのを、確かめるような仕草を、彼は決まってる。個人の七癖のひとつだ。

「それで次の土曜なんだが・・・」

「次はない」

「え？」

「俺はしばらく休むことにしたんだ」

「休むって、どのくらいだ？」

「さあ・・・」

「さあ、って・・・そりゃあ困るぜ。俺だって趣味で仕事してるわけじゃないんだぜ。俺にも待つてる客はいるんだから。それじゃあ、あんたがいない間は・・・」

と、メガネの彼は言いさして、ぐっと言葉を飲み込んだ。ついで俺の顔を急いで覗き込む。

「ほんとだいじょうぶかよ。汗が滝みたいに噴出しててるぞ」

「大丈夫だ。それより俺の代わりはちゃんといるから、心配しないでくれ」

「なんだよ。先に言えよ。ややこしくしちゃってよお」

メガネの彼は急に顔を明るくした。その明るさがうらやましい。俺にも、昔はその明るさがあつたつけ。

「それより、俺は急いでいるからこれで失礼するよ」

「あつ」

人ごみも疎らな路地に入るのが危険か、あるいは大勢の中にまじるのが危険か。

この3日間で学んだのは、どちらもやつには関係ないということだった。

ならば、とにかく歩くしかない。あいつに、追いつかれる前に逃げ

てやる。なんせ、俺は寝なくても大丈夫だからな。

どのくらい歩いただろう、という疑問は、この際、無意味だ。言っただろう？ あいつには、距離は関係ない。俺がいくら歩いたって、あいつが俺に近づきさえすれば、その距離は無と化し、残されるのは俺がいかにも逃げ切れるかという課題だけだ。

人通りの絶えた路地を歩いているときだ。背中に、例の氷を感じた。来た

歩みを止めたらおいつかれる。そうなれば俺が殺されてしまう。

俺は必死に走った。全速力で走っているつもりなのに、両側の景色がさほど速く通り過ぎていかない。こう、走っているともがいていく様な気がした。思い通りに四肢が機能しないどころか、息が苦しくなってきた。やつが、呪いをかけているんだ。俺に、解けない呪いをかけているに違いない。

走って、走って、走って。

やっと行き着いた場所が公園だった。途中で俺を追いかけるのを「やめた」らしい。おかしいな。やつは、人間のように疲れるはずがないのだけど。

ほからかに遊ぶ子供たちの姿は見とめられないが、青いビニールシートで囲まれた箱型の家は何個か目に付いた。今日が何曜日の何日なのか、判然としなかったが、確かに太陽は上がっていた。東の高い空に月を残して、太陽が俺の背を照らした。蛇口をひねって水を飲んだ。喉を降下していく水の塊が、一晩中走り続けて酷使された喉にこたえる。

身体が、ほんの少しわからない程度に軽くなったような気がするの
は、うそだろうか。

駅前公園だからか、出勤するスーツ姿の男たちが公園のよこを通り過ぎていく。冷え切った公園の隅の、ビニールシートの家から長いひげを蓄えた爺さんたちが顔をのぞかせた。実際、じいさん、といつても、どれも長いひげをお揃いで生やしているので、老いているのかそつでないのかわからなかった。彼らは俺を見て、驚きもせず、また無表情でこちらを見ていた。じいさん、といえば、「やつ」も老人の顔をしていたな。

しばらくベンチに腰掛ければ、上がっていた息も下がったが、急激に疲れが襲ってきた。眠くは無い。ただ、楽になりたい気がしてならない。

「うっ・・・」

公衆便所に向かった。用を足そうと入れば先客がいた。そいつを見た瞬間、俺は忘れかけていた俺の目的を思い出した。

（逃げなくては）

「う、うああ・・・」

情けないかすれた声を出し、俺はまるぶように公園を駆け出した。そいつは、恐怖に支配され、逃げることしかできない俺を見て、しまった、というような顔をしていた。

おい、なんであんな顔をするんだ？

死に身が二つ 4

とにかく「やつ」の魔手から逃れる、一所懸命に朝の駅前を駆け抜けた。途中、何度か人の波とぶつかり、罵詈雑言を飛ばされたかもしれない。かもしれない、というのは薬が切れてもう耳さえ聴こえなかったからだ。

無音の中で追いかけられる苦しみ。

俺は人の波を死に物狂いでかき分け、荒れる視界をめちゃくちゃに揺さぶってひたすら走った。

悪夢ならここで終わってほしい。ここで、夢だったか、とふかふかの布団の上で大の字になって笑ってみたい。という、そんな考えはいつさい浮かんでこない。

言ったはずだ。そんな余裕は俺にはなかった。

すぐ近くの曲がり角を曲がったときだ。少し離れた場所に、なんと「やつ」が先回りして立っていた。

たつぷり蓄えられたひげは、絶望の白色をしていた。やつは、真っ黒なスーツを着た無表情の老人だ。

「・・・・・・！」

俺は、すぐに気がつくべきだった。逃げている間にも背中には確かに例の氷が張り付いていたという事実。

人間ではないやつを目の前にしたら、もはやこれまで、と誰もが思うことだろう。無論、俺こそ、そう思ったのだが、疲れきったはずの両足は一息つく前にきびすを返していた。ちんたらしている俺の叫び声を残して、体は今まさにやつを避けようと曲がり角を引き返した。

走っている間、何度も後ろを振り向いたがやつはしばらく俺を追いかけずに、道の奥に引っ込んでいる。きっと走り疲れた俺を享樂の

名のもとにつぶすに違いない。潰されてたまるか、と俺は・・空を引つ掻き、

自分が出せる限りの全速力で駅前を駆けた。人の波が衰えない駅前で、俺は何かに躓き、豪快に転んでしまった。前に倒れこんだ際に一人の歩行者を巻き添えにしてしまったらしい。俺の下敷きになった人の性別や年は分からなかった。下にしたその人に謝るべきなのだが、その余裕のない俺だ。

今だからこそ、落ち着いて、あのときの俺を語っていられるんだ。申し訳ないが、そのときの俺に余裕などなかった。

とにかく、もうすぐそこまで追いついてしまったやつから、俺は逃げなければならぬ。俺はその人を踏み台にして身を起こし、ばらばらになった体勢をまるぶようにたてなおし、目の前にあつた野次馬の壁をかき分けた。そして、なんと、やつが人壁の向こうに立っているではないか。

「くるな！」

スーツ姿の白いひげを蓄えた老人は、無表情のまま俺に手を伸ばした。その手が俺の右肩に触れようとしたところで、俺は最後の力を振り絞って、オフィス街のビルが立ち並ぶ方角に走った。人の波はそっちのほうに飲み込まれるべくして流れていく。その波の流れに乗じて、俺はやつから逃げた。後ろを振り返るとやつが姿があつた。やつは、ゆっくりと、まるで時間の束縛がない、優雅な散歩をするような足取りでこちらに向かってきていた。

刹那、俺の両足は今まで走ることしか欲しなかったのに、歩調をゆるめた。

つまり、逃げることに飽いてしまったらしいのだ。

まるで俺の意思は、頭に備わっているのではなく、両足に息衝いているかのようだ。走る事に飽いたが、生きることには飽いたわけじゃない。やつの魔手から逃れることが出来ずにいたその時だ。徐々に、聴力が戻ってきた。何か機械音がする。これは、重機が出す音だぞ。老人は、今や俺の真っ向に立ち、そのしわがれた右手を俺の右肩に

乗せた。

その手は、重くも無く軽くも無かった。

「寄るな・・・！」

目をかつ、と見開いた。

そこで、三日ぶりに本当の自分が帰ってきたような心持になれた。

晴れ晴れしい気持ちになれたのに、

やっと、逃亡の束縛から解放されたと思ったのに、天から降ってきたのは鉄筋だった。

死に身が二つ 終わり

黒いスーツを着た「青年」は、いまや無残にも鉄筋の下敷きになってしまった男を前に、人知れず後ずさりした。目の前にする悲惨な光景、といつても、大きな鉄の塊の下にある男の姿はまったく見えないが、赤々とした血の流れが小さな川を作つて青年の足元に迫っていた。彼は現場に背を向け、離れたところに出来た黒山の人だかりに姿を消した。

鉄筋は建設中のビルの上から落とされるべくして男に落とされたようだった。言わずもがな、三日の間、黒い影におびえ続けた男の息はもはやない。それまで無機質なグレー色のなかで、人間らしからぬ無の状態を決め込んでいた人々が、今では悲惨な事故を前に、まるで人間のような行動をとっている。恐怖に叫ぶ女もいれば、何も悪いことはしていないのに「ゆるしてくれ」と喚いて逃げ去っていく壮年の男もいる。天から吐き出されたような鉄筋を前に、大多数は事故現場を遠巻きに見ている。口々に何を言っているのか判別できない野次馬のなかで、あの青年は黙したまま頭をフル回転させた。

（見つかつてしまった、と思つたのは一度だけじゃなかった・・・）

彼は苦そうな顔をして唇をかんだ。

野乃島 天。

その人物こそが、三日の間、青年が尾行し続けた男の名前だった。野乃島が頻繁に足を運ぶといわれた店の前に、何時間も張り込んだこともあった。青年の先輩である同業者のものは、「あいつは頭が良いんだろつなあ」と、言った。「というത്？」と彼が問えば、「奴は、どうにかして尻尾を巻くんだ。やっと掴んだぞ、とこちらが小躍りしても、掴んだ手のひらを開けば、手がかりは皆無。奴は本性を現さないどころか足跡さえ残さない」「店には踏み込んだので

すか？」

「みせ？ ああ・・・中にはそれらしき証拠は何一つ見つからなかった。あれには舌を巻いたな。今回、改めてお前に奴を見張らせることになったわけだが、奴の頭にはお前も文字通り舌を巻くだろうよ」

舌を巻く。

と言われたが、最後まで彼は舌を巻かなかった。

ただ頭の隅にこびり付く疑問は、野乃島の奇怪な挙動である。あんなに頭が良い、足跡を残さない、本性を見せない、とまで言われた男が、彼には頭のねじが緩んだイカレタ男にしか見えなかった。

（最後までわからなかった・・・）

青年が、見つかってしまった、と思ったのにはわけがあった。

野乃島を尾行している際、彼は何度も野乃島と目が合ったような気がした。しかし、それは気だけであつたのだろうか。

というのも、彼が公園のトイレで愚かなことにも野乃島と遭遇してしまった。顔と、顔を合わせてしまったのだ。

（あの時は・・・そうだ。しまった、と思った）

しまった！

顔を見られてしまったどころか、相手は周章狼狽している。確実に自分の姿を見られてしまった以上、本部に報告しなくてはならなかった。

「代われ」

と、一言いわれ、彼が責任を感じないわけが無かった。

「駅前にいる。そこで車に乗せてやるからお前は俺と交代だ」

と、先輩は言った。どこか最初から分かっていたような諦めた声色に胸が痛んだ。血気盛んな若造は時として自分を過大評価しすぎる

んだよ、と先輩が話していたのを思い出す。

言われたとおり、彼が駅前まで向かったときだ。もはやあちから現れるはずがないと思っていた野乃島が、人の波をかき分けて真っ向から彼に突っ込んできた。彼と野乃島は倒れこんだ。

彼自身は野乃島の姿を公園で見失っていたが、公園の外で張り込んでいた同業者が彼と入れ代わり、その姿を追っていた。

しかし、まさかここでまた会うとは思わなかった。ここで、捕まえるべきなのだと思い、彼は声をかけようとしたし、腕をつかもうとしたのだが、野乃島はわっと叫んで、またもや走り去ってしまった。（あいつ、まったく俺を見ていなかった）

なぜだろう。

一度、遭遇したときは、酷く驚いたくせに二度目は彼のことを一度も見ずに驚いた。

そこが彼の心をひいた。

「おい、駅前にいるといっただろう。いま、どこにいるんだ」

携帯電話の向こうでとやかく指示されたが、彼は返事をする前に切っていた。

（とにかく、あいつを俺の手で捕まえないことには・・・）

という、彼しか知らない正義感が芽生えていたのは事実だ。そして、野乃島を人ごみに紛れて追えば突如落ちてきた。あの鉄筋の固まりが。

野乃島とは、「かなり」離れた場所に立っていたので、彼の命は救われた。

（本部に、どう説明しよう・・・）

彼は踵を返した。人の流れに逆らい、二本足が導くほうに歩みを進め、自分は頭をフル回転させた。細い路地に入り込んだことにも無頓着であった。突如現れ、彼の行く先をはばんだ三人の男の登場に、文字通り背中を粟立てた。

背筋に氷の塊が降下していくのを感じた。

三人のうちの一人の顔を、彼は嫌というほど見知っていた。この、

3日間の間に本部に手渡された顔写真の面子の一人だ。

男の口の端には、着火されるのを待ちわびたタバコ。それをくわえた男は、彼を黙したまま見つめている。

誰も知らないが、その時、どこからともなく、スーツを着た老人が青年の背後に現れた。

老人は、しわがれた右手を青年の右肩にゆつくりと置き、彼の左肩から白いひげを蓄えた無表情な顔を覗かせた。

青年が目の前にする三人の男には、黒いスーツを着た白いひげの老人の姿は見えてなどいなかった。

いま、彼らが死ぬ出番ではないことだけだ。

死に身が二つ 終わり（後書き）

「死神」はきつと、

人の形をしているのだと思います。

若者じゃなくて酸いも甘いも知った老人の形をしている、とか。

太月事務所の三兄弟、ふたたび 1

太月事務所に、一通の手紙が届いた。^{たいげつ}

といつても、白昼に届いた手紙を日も終わるころに手にとった。

「なあ、開けてもいい？」

「ああ。もちろん、開封してくれ」

ビリビリ、と手紙まで破ってしまう勢いで、三男は荒々しく開封した。

「呼んでくれ、六花^{ろっか}」

長男は、ニコニコと笑顔で弟に頼んだが三男の六花は開封した手紙をぽいっと次男に投げた。手紙は次男のあぐらの上に落とされた。

おれの仕事はここまでだ、と言うように、六花は白々しくも雑誌を開いて読み始めた。

次男の烏兔^{うと}はというと、静かにそれを拾って向かい側の長男にすすめた。

「なんだい。お前たちは互いに協力する気もないのか。呆れたなあ」
そう言いながらも、長男の玉兎は始終笑顔でいる。彼が怒った姿を見た者は久しくいなかった。

「どれどれ」

長男の玉兎は、手紙を開いて、目を軽く見開いてみせた。

「おや？ 今から依頼主が来るみたいだぞ」

「はーっ！？ 今から？ もうすぐ次の日を迎える時間だぜ？」

「うん。でも、9月。日、午後11：55ほどにお伺いします、と書いてあるもの」

六花はもう一度せわしく、はーっと叫んだ。少しうるさい少年なのだ。

「うちのモットーは24時間体勢の事務所だから無下にお引取り願えないよ」

「ありえねー」

三男はあきれた顔をして立ち上がった。それから周りに散らばった自分の荷物をせっせとバッグに詰めこみ、入り口の戸まで歩いていった。二人の兄はいつも通り落ち着いた面持ちで、その姿を目で追った。

「どうするんだい。今から帰るのか？」

「見てわからねえのかよ。帰宅だよ。帰宅！ やってられねえっていつてるんだよ」

いつもいつも、二人の兄の要望に応えているはずだ。今日も夜遅くまで残って、二人の仕事の手伝いを、珍しく不平をもらさずに手伝ったというのにまだ仕事は続くという。

どんなに働いても、給料は一切支払われない。冗談ではない。そう思った六花が事務所の戸を開いたときだ。

大きな人影が、物も言わずにどんと立っていた。

それを見上げた六花の口から乾いた叫び声が短く挽き出された。

大男が、事務所の中に一歩足を踏み入れると、すかさず六花がよけた。突然の来訪者の登場にひどく衝撃を受けて、しばらく彼を見つめていた。

しかし、すぐに好奇の目をもって事務所の中に飛び込んできて、次男のすぐ横に身を寄せて座った。次男は表情一つ変えずに弟に離れるという意味をこめて、肘でつついた。

「今晚は、よくいらっしやいました。太月事務所の玉兎ぎょくこです」

大男は20代前半の青年で、ヒップホップの世界から飛び出したギヤングのような格好をしていた。どうぞお掛けになってください、と促されても、その体躯のよい体を直立させたまま一歩も動かずにいた。しかも口を引き締めてだんまりである。

これには三人とも困ってしまった。

「貴方が、大空おおぞら要さんかなめ…ですか？」

大男はここでやっと口を開いてくれた。

三人ともほっとするばかりである。

「はい。俺の名です」

「依頼とのことですが、どうぞお席におつきください」

「はい。失礼します」

見た目によらず、彼、大空要は礼儀正しい挙動の青年だった。大空の格好をみると、今にも懷からピストルを取り出してぶっ放すようなイメージを抱いていた六花だったが、今では興味半分と尊敬半分で彼を見上げていた。

「それで、依頼というのは？」

玉兎が促したところ、大空はその広い胸をぴんとそらし、ただでさえ大きな体がより巨大になり、それはまるで大きな一枚岩のように見えた。

「俺はフリーターです」

話はそこから始まった。

「去年、大学を辞めたんです」

「ほお」

「理由は、物足りなかった、からなんです。俺には自分のライフを楽しくする力がないみたいで、毎日キャンパスに足を踏み入れて講義を聞きたびに、ため息がでていました。自分のライフが説明のつかないほど平凡でつまらなくて、そのつまらなさで自分の至らなさとこの世界の虚空をリリックにして仲間と一緒にかましてましたが、なんだかそれさえも億劫になってしまつて……。それで、山にこもることにしたんです」

「ほお。山にこもるとは、思い切った行動に移りましたね」

応答した玉兎には、結局のところ、彼が山にこもったことしか分かっていないようだった。

「はい。山にこもるといっても、暮らしていけないですよ。だから、俺、山奥にある一軒のしがないホテルで働かせてもらってるんです」

正直にいつて、六花はどこが依頼なのかと問いたくなった。なんとなく、とある青年の人生の断片を聞かされているような気がした。

「ホテルですか？」

「あ。 ああ……。 何と言ったらいでしょうか。 民宿でもない、コテージでも別荘でもない、もしかしたらホテルでないのかもしれない」

「いったいどこで働いているんだ！」

と、六花は叫びたくなった。

「見た目は、洋風の屋敷なんです。 屋敷といっても、そこらにある一軒屋ではなくて、部屋数が20とある屋敷のようなものです。 それでも召使がいるわけでもない屋敷なんです。 住んでいるのはたった一人で、それも腰の曲がったじいさんです」

「ほお。 で、どうして貴方はそこで働いているのですか？」

「俺の祖父の遠い親戚なんです」

話がぜんぜんつかめねーよ！

と、六花は叫びたくてうずうずしだした。

「名前は隅田^{すだ} 園助^{そのすけ}という老人です。 昔は某財閥のエライ人だったらしいのですが、今では山にこもって悠悠自適に一人暮らしです。

残りわずかの余生を、登山客にボランティアで宿代わりとして部屋を貸すことで過ごしています」

「無償で、ということですね」

「ええ。 まったくこちらにとつての利益はないのですが、隅田さんは近くの山に登山しにくる人を手助けすることに生きがいを感じているとのことですよ」

そうなれば、と玉兎が足を組み替えながらいった。

「大空さん、あなたはいつたい何で生活をしているのですか？」

大空は困った顔をして、気分が悪そうにいった。

「ええ……。 俺は、隅田さんを手伝うことによって給料をもらっているんです。 登山客、といっても毎日つねに足を運ぶわけでもありません。 暇な日だってあります。 けど、そういう時は膨大な庭の手入れを手伝ったりします。 それで、俺は金をいただいているわけで、暮らしていています」

「ほお・・・」

また、玉兔が足を組み替えた。その足を斜視して、六花はイライラした。先ほどから兄は足を組替えてばかりいる。

「それで、手紙をよこしてからここに來られた訳というのは？ 何かおありでしょうね」

時計の短針と長針は、なかよく12の数字を通り越していた。いまや午前一時である。大空は少しわざとらしく、事務所の時計をちらりと見た。三人兄弟も同じくそちらを向く。

「夢をみるのは決まって寝てからなので」

六花は片方の眉を引き上げた。

「そりゃあ、なあ。夢は寝てから見るもんだし」

大空が少し眉根を寄せて六花をにらむように見た。

少しびびった六花は、弁解を求めて隣の次男を見たが、こっちは無表情で相手にも見方にもなってくれない。厄介だから黙っておくことにした。

「『夢』をみるのですね」

「はい」

「寝付くのはいつ頃で？ 話だとだいぶ早いようで」

「そうですね。いつも8時に必ず寝ます」

「健康的でよろしいですね。それで？」

「はい。俺、あの屋敷で働かせてもらうようになってから、住み込みでひとつの部屋を使わせてもらってるんです。隅田さんは、言わば俺のじいちゃんみたいな人でして・・・。とてもいい人なんです。で、なぜ俺が手紙を送ったかという、意味はないです」

六花はひざに乗せていた腕をずりつと滑らせた。

「屋敷で働くようになってから、変な夢を見るようになったんです。とても奇妙で、俺の頭じゃまったく意味がわからないので、奇怪なことを取り扱ってるのなら助けてくださると思って」

「ええ。必ずお助けします。それで、夢の内容というのは？」

「夢の俺は、屋敷の天井から部屋を見下ろしているんです」

三人兄弟は、はじめてここで目の色を変えた。

「屋敷の、決まった部屋の天井からベッドを見下ろしてるんです。視界は定まっっていて、俺の視線の融通がきくことは一切ありません。ただ、その部屋の天井からベッドを見下ろしているんです」

「また、興味深い夢だ。その夢は、毎日おなじ内容なのですか？」大空はかぶりを振った。あまりの振り様に、頭が飛んでいつてしまうのではないかと六花はひそかに心配した。

「内容は異なります。その部屋にお客様が泊まったら、そのお客様が眠っている様子を夢で見ます。夢は決まって天井から見下ろすかたちで、もし、その日お客様がいないならば夢をみたとしても誰も眠っていないベッドを見下ろすことになります」

「お言葉ですが、ご自分がご想像で見ている夢だとは思いいではありませんか？」

「いや。これが、また奇妙なんです。最近、俺はひどい熱が出て一日中部屋で休ませてもらっていたことがあったんです。その日は40 近く熱が出てベッドの上から動けずにいて、隅田さんに大変迷惑をかけてしまいました。食事を運んでいただいたりしたのもそうです。なにより登山客が訪れていたらしくて、その対応を隅田さんがすべてこなしていたよう。俺はその話を聞いたのは、次の日のことでしたし、なによりその日は悪天候だったために客がくるとは思っても見ませんでした。それで、熱にうなされながらその晩も夢を見ました。あの奇妙な夢です」

ここで大空が大きくつばを飲み込んだ。

「夢では、あの部屋の天井からベッドを見下ろしています。その夢に、一組のカップルが身を寄せるように横になっているのが見えています。どちらも若くて20代前半に見えました。二人は目を瞑っています。口が動いています。どうやら会話をしているようでしたが、どこか剣呑な雰囲気。ただよっているようで、終いには女の人が身を起こして大声でなにごとかを相手に叫んでいるのです。男の人はというと、困り果ててしまい、彼女に背を向けていました。」

しばし、女の人のヒステリックな様子が夢を通して見て取れました。なんともひどい夢だったなあ、と思いつつ翌朝部屋の外へ出ますと大声で喧嘩をしながら屋敷を出て行くカップルの姿を見たのです。そのときは驚いてしまいました。まさに、夢で見たカップルだったからです」

「だけど、そのカップルの姿を見ていなかったとしても、大空さんの部屋とカップルの部屋が実は隣同士で、喧嘩をする声を耳にしていたために夢に勝手にでてきちゃった、っていう可能性はないのか？　よくあるよな。テレビをつけた部屋で寝ていて、その眠りが浅いために耳から入ったテレビの音が夢とごちゃ混ぜになって形成される夢って。　ない？　おれはあるんだけど」

「ありえません」

「なんで？」

「なぜなら、カップルが泊まった部屋と俺の部屋は隣同士ではないからです。カップルの泊まった部屋は、屋敷の東の部屋で、俺がまったく反対の西の部屋にいるからです。いったい幾つの部屋がその間にはさまれるとお思いですか？　不可能なことです」

「ふうーん」

六花はつまらなそうに口を尖らせ、ソファに身を沈めた。

「これは確実に何かありそうですね。それで、今日はこれからどうされますか？」

「どうしたらいいでしょう。　俺はすぐに手を打ってくださると思っていたので」

「隅田さんには、この事はもう既にお話で？」

「いいえ。　まさか！　これっぽっちも話していませんよ」

「ほお。　それはまた何故ですか？　少なくとも隅田さんの所有する屋敷で起こる奇妙なことですよ。それに、実の祖父のように仲がよいのでしょうか？　お話されたらよいでしょう」

「これ“以上”、隅田さんを困らせたくないんですよ……。　ただでさえ、隅田さんは自分の屋敷のことで困っているのに」

これまた、夢とは一味違った問題がありそうだった。

太月事務所の三兄弟、ふたたび 2

ある日のことだ。

その晩は大変冷え込んで、暖炉に薪をくべることで暖をとっていた大空は、寒さを劈く女の叫び声を聞いた。

急いで部屋の外に出てみると、少し離れた場所で、一人の女が頭を抱えてうずくまっている。登山客としてその晩泊まった一人であった。大空は、女にたずねた。何があつたのだ、と。

すると女は、暗い廊下の先を震える指でさして、訴えた。

「ぬいぐるみ！　ぬいぐるみが…っ」

ぬいぐるみ？

大空は首をかしげた。そして目を凝らして、先の暗闇を注意深く見た。が、何も見えない。電気を消していたためだ。

「いま電気をつけますね」

廊下の電気をつけた。

ぱっ、と明るくなった廊下。その先には、何もなかった。

大空は訝しげに、今やふるえてまともに喋れない女を見た。

「あの、すみませんが…。何を見たんですか？」

部屋から出てきた女の連れも訝しげにしつつ、彼女の肩を抱いてなだめた。

「ぬいぐるみよ！…ぜ、ぜったいに隠れている。隠れているんだわ。クマのぬいぐるみが、さっきそこに歩いていたのよ。こっちに向かって歩いてきたものだから、わたし怖くて叫んだの！」

話にならなかった。ぬいぐるみ？　そんなの、この屋敷にはない。ましてやぬいぐるみが勝手に歩くななんて、ホラー映画でもなけりやありえない。

「ぬいぐるみと言われましても…」

その晩は、パニックに陥った女を落ち着かせるために、廊下の先をくまなくさがして、ぬいぐるみが居ないことを証明した。それしか

大空には出来なかったが、女は納得してくれない。

「ぜったい、壁にかくれたんだわ。早く見つけてよ！」

とヒステリックに叫ぶばかりで困り果ててしまった。

その奇妙な話は、女の幻覚ということで終わるかと思われたが、ほかの登山客、6人、が訪れたときのことだ。

クマのぬいぐるみが階段を駆け上がっていくのを目撃した、というのだ。

しかも、目撃したのが一人だけではない。泊まった客の3人が見たという。どれも興奮しきっていたが、この前の女のように恐ろしそうにしていない。

「可愛かったわ。真つ赤なりボンを頭につけていたのよ」

「ぜんぜん怖いって感じなかった。でも、クマのぬいぐるみが歩くなんてね」

「ここつて、動くぬいぐるみを放し飼いにしてるんですかあ？」

まさか、と大空はかぶりを振った。

ぬいぐるみ、ましてや歩き回るぬいぐるみなどこの屋敷に存在するわけがない。そのことを彼女たちに話すと、三つの顔がいつきに青ざめた。

「悪い冗談はよしてください」

「オモチャのはずよね？ 猫とか犬には見えなかったけど・・・」

「えっ、じゃあ・おばけ??」

そんなことはありません、と大空が困った顔をすると、彼女たちの連れである三人の男たちはこぞつてケラケラと笑った。

「こいつら可笑しいんですよ。俺たちもその場にいたけど、クマのぬいぐるみなんて誰も見ませんでした」

「見たわ！ 馬鹿にしないでよ。ちゃんとこの目で見たんだからねえ？」

女三人と男三人は意見が分かれて、もめ出した。これには大空も閉口してしまった。その話を隅田にいうと、隅田は苦い顔をした。

「大変なことになってしまったなあ」

「ええ。目撃者はこれで4人です」

「いや、と隅田は首を振った。

「これで8人目だよ」

「えっ!？」

隅田の話によれば、ほかに4人の登山客も、歩くクマのぬいぐるみを屋敷内で目撃したというのだ。この屋敷に四六時中いる隅田と大空こそ、その実態をつかめないでいるというのに、8人もの登山客が実際に目にしているというのだ。これこそ、隅田を困らせる種だと大空は言う。

「リピート客が多かったのですが、クマのぬいぐるみを目撃した客はあれ以来足を運んでいません。いったい誰が流したのか、変な噂がたつたようで、得体の知れない男性が訪れたときがありました。彼がカメラを片手にいうにはこうです。『。。。テレビ局のもですが、お宅の屋敷には、幽霊が出るそうですね。取材をさせてください』と。頭にきました。幽霊など一度も見たことはありませんし、そんなガセで隅田さんを困らせて欲しくなかった。あれ以来、心霊現象だのと取材にくる人間があとをたちません。隅田さんは日に日に気を削がれていくのが分かります」

大空は、いたく悔しかったのか、大きな拳で自分の太ももを叩いた。それを目撃した六花が、いいつ、と顔をゆがめる。

「玉兎さん」

「はい？」

「俺の夢と、ぬいぐるみの事件は、何か関係がありますか？」

そうですね、と玉兎は横に座っている第二人をチラリと斜視した。

六花はギクリと身をこわばらせ、烏兎は人知れず小さく肩を落とした。

「現場に行ってみないとわかりません。百聞は一見に如かず、と古くから言葉にございますからね」

「来てくださるんですね？ 助かります。今すぐに来てください

ますか？」

「一日二日でどうにかなる問題でもなさそうです。聞いたところ、害をなすような現象ではありませんからね。明日にでもお伺いします。それで、今晚は、隅田さんはお一人でお屋敷におられるのですね？」

「まさか。俺が今からすつ飛んで、帰りますよ。隅田さんにもしものことがあつたらいけないと思って、俺の友人3人を、隅田さんのガードとして置いてきたくらいですから」

六花は想像した。

ヒップホップ三人組が銃を片手に老人を守っているさまを。

「それでは、明日の午前10時にお宅にお伺いします。住所は・

」

「いいえ。明日は俺が車で迎えにきます。なにぶん、山奥は迷路のようですし、交通手段も怠惰なバスが何本かで、相当不便なところですよ」

玉兎はにこやかに礼をいった。横の弟二人は浮かない顔をしていたが。

「それではお氣をつけてお帰りください」

大空は去っていった。大きな体を揺らし、彼の背が消えたところで、六花が不満そうにいった。

「明日は、他の依頼が入ってなかったか？」

「そうだね。確かに入っていたよ」

「どうするんだよ。簡単に約束しちゃってさ。二つを同時進行するなんて、出来るわけないだろ」

玉兎は書類の山を掻き分けて、一つつまみ出した。

「これだ。どれどれ。ふむ。一人でやれなくもなさそうな依頼だよ」

「おい。甘く見ちゃっていいのか？一人で、って、そりゃあ誰のことを・・・」

玉兎は立ち上がり、二人の弟をニコニコと見下ろした。弟たちは黙

って兄を見上げる。

「六花。明日は学校を休みなさい。そしたら三連休になるからね」
「なにそれ……」

「烏兎。君は弟と一緒に協力して、三日使って大空さんの依頼を解決してきなさい」

烏兎は、だいたいこんなものだろうと自分の兄を見知っている。六花にいたっては、果てしなく呆れていたが。

「僕はひとりでもう一つの依頼をどうにかするから、君たち二人で協力してがんばるんだよ」

翌朝、am6:00.

一本の電話が事務所にかかった。

電話を取ったのは、三兄弟の末っ子・六花だった。

「もしもし？」

面倒くさそうに、ボストンバックに荷物を詰める六花の眠気が、その者の一声で晴らされた。

「六花か」

「た、隆一さん？お久しぶりです。おはようございます！」

「兄貴たちはいるか？」

「はい！」

「代わってもらいたいんだが」

すでに上の兄二人は、受話器を耳につけて目を輝かす末っ子の目の前に立っていた。いったい誰からの電話だろうか、二人には察しがついていた。この弟が、これほどまでに目を輝かせ、人が変わったように敬語を話す相手といったら、彼のいちばん尊敬する「隆一」^{たかいっ}その人しかない。隆一も、玉兎と烏兎と一緒に事務所を営んでいる。

「六花。そろそろ代わってくれるかい？」

あ、そうだった、と六花は受話器を一番上の兄に手渡した。夢見心地の双眸の六花は深くため息をついて一声いった。

ウチのは比べものになんねーぜ、と。

烏兎はその意を解して、不服そうに片方の眉毛をあげた。

「うん。そっちはどうだい？」

『似非被い師に、被ってみると言われて困ってるんだ。オレはお前らとは違うからな。どうだ。こっちを加勢してもらえるか』

「どこだっけ？」

『そこから遠くない。車で1時間だ』

「僕らには依頼がぎゅうぎゅうに入っているんだよね。それは急用なのかい？」

『急じゃなかったら、わざわざ受話器なんか持たないよ。加賀屋のおばさんは、金を多く取るから安易に頼めたものじゃないしな。』

なあ、何とかできないか？」

「そうだねえ・・・」

ちらり、と玉兎は次男を見た。次男は暗黙の了解で、兄と受話器を代わった。

「もしもし、隆一さんか？」

『おお、次男坊。どうだ。オレを助ける気はないか？』

「しようがない。兄貴に代わっておれがそっちに向かうよ」

助かる、と隆一が言いさした途端、受話器の向こうから、獣の咆哮よろしく、どたばたと数人が走り回る音が聞こえてきた。只ならぬ雰囲気が、きんきんと烏兎の耳を突く。

「ひどいようだ」

『ああ。そうさ。酷いものだぜ。昨日から寝てないんだ。二重の問題が発生してしまって、こっちは弁護士ではないのに、金の問題が大きく絡んでくるんだ。これもすべてはあの似非被い師が古くからこの家に関わっているのがいけない。あいつがでたらめな被いをしたせいで、近くの獣の霊が何匹も家主の背にのっかちまってる』
おおっと、と隆一は現場にあわず自分が饒舌になっていることを自

嘲した。

『すまない。　急ぎだと自分でいつていくせにな。それじゃあ、今から一時間後に頼む』

「わかった」

烏兎は静かに受話器を置いた。それから、小さくため息を吐いた。

が、すぐに大きく吸い込んだ。まるで気合を入れなおしたかのよう
うに、六花には見えた。

「六花」

次男は呼んだ。

「約束の10時までには終わらせて、ここに帰ってくるぞ」

「うん」。でも、おれが行っても役に立たないんじゃないかあ・・・」

「かまわない。　隆一の困る顔が見たいだろ？滅多にないと思う」

六花は、意外そうに次男を見た。今日は珍しい日だ。

次男が電話で、あんなにも言葉数を多くしているのは初めて見たし、何より隆一を皮肉るところが、また意外でもあったからだ。

これは楽しい日になりそうだと、と六花は鼻息を荒くした。

太月事務所の三兄弟、ふたたび 3

次男と三男が大急ぎで事務所に戻ったとき、すでに大空の姿があった。

事務所の前で彼はプカプカと不味そうにタバコを吹かしていた。まるで、途方にくれてしまったパグのような顔をしていた。

「大空さん、ごめん！　ほんとーに御免なさい」

いの一番に、事務所の扉に続く階段を駆け上がった六花の息は切れていた。彼の顔に疲れた色が見られたが、後からたどり着いた次男のほうがり一層疲労の色がひどかった。顔はいつものように無表情だが、顔色が青白く、何より目に輝きというものが足りない。どこか、げっそりしているようにも見て取れる。

「ごめん。緊急事態が発生しちゃってさ、その、遅れてしまつて本当にごめんなさい。約束したのに、破ってしまった。とにかくお茶を出すよ。のど渴いたでしょ？おれも実は・・・」

と六花が急いで事務所のかぎを開けようとしたが、彼の手を大空の大きな手がガツと掴んだ。六花はつかまれた瞬間にびくつと飛び跳ねた。

「な、なにっ？」

「それよりも、早く屋敷に来てください！」

大空は顔を赤くして訴えた。煙を上げながらタバコが地面で燃えている。

「緊急事態だつたりする？」

「また夢を見たんです。とにかく俺の車に乗ってください！」
「うん」

事務所の階段は赤褐色に錆びている。ひどく音を立てて大げさに駆け下りようものならば、崩れ落ちそうなほどの頼りなさだ。それを、大空はドンドンと音を立てて大急ぎで下りた。まさに古い階段が左右に揺れている。大空もわざとではない。本当に急いでいるのだ。

「烏兔、行くぜ」

六花が大空に続けと嬉々として階段を引き返せば、その後を次男が
げっそりとした顔で追った。

「夢を見ました」

大空の運転は、彼の容貌と似合わずとても良心的な運転だった。

つまり安全運転だ。助手席の六花がシートベルトをかけ忘れてい
ると、無言で彼の分をかけた。

「夢とは、またあの夢ですか」

後部座席から烏兔が身を乗り出して尋ねた。

「はい。 ですが、今までとはかつてが違っんです」

大空は運転に集中しながら話し出した。

「同じ部屋。そして同じ視界。夢の俺は見下ろしている。そこ
までは、同じなんですが」

その晩に、その部屋に泊まった客はいなかった。だから夢をみた
としても、見下ろす自分の目につるのは、空のベッドであるはずだ。
今までだってそうだったのだ。

しかし、昨晚、大空が見た夢には人間ではないモノがベッドの上
にいた。

「何がいたんですか？」

そこで大空は生唾をぐくりと飲み込んだ。それにつられて六花も飲
み込む。

「ぬいぐるみです。クマの、ぬいぐるみがまさにベッドの上にい
たんです。しかも、動いていたんですよ。跳びはねていたんです」
六花は兄の顔を不安げに見た。兄は、驚くことも無く頷いた。

「そのとき、すぐに目が覚めましたか？」

「ええ、覚めました。ひどく喉が渴いていましたが、そんなこと
に構ってられるはずありません。俺は、真っ先に例の部屋に駆
けて行きましたよ。いま走ればクマのぬいぐるみとやらを捕まえら

れる、と考えたのです。うそにしる本当にしる、動くぬいぐるみの存在をおれが暴かないといけないと思ったからです」

大空は興奮したのか、鼻の穴をふくらませて言った。自然とハンドルを握る手に力が入る。

「蛻の殻とはまさにアレのことですよ。ベッドの上には何もいません。クマのぬいぐるみなんて、いなかったんです」

「では、ただの夢であつた、ということになるのですか？」

「いや、と大空は首を振った。

「確かにベッドが乱れていた。何かがその上にいて、暴れたような形跡がはつきりと示されていたんですよ。間違いなく、化物のしわざです。きつと化物がぬいぐるみの身を借りて、隅田さんの屋敷を乗っ取るうとしているんだ――！」

「乗っ取る？ それはどうでしょうか……。大空さんのいう化け物とは、確かに実態があるものですか？ その目で見なくては存在が認められません。夢も気まぐれなものです。夢があたる日が続くからといって、毎日がそうであるとは断定できません。化け物の存在に、何パーセントの可能性がありますか？」

「それは」

と大空が口ごもると、横から六花が代弁した。

「1パーセントだろうが、そりゃあ十分に可能性のうちに入る。化け物だっているかもしれないだろ。頭ごなしに否定はできねーよ」

「そいつは、屋敷を乗っ取ったりしないだろう。そう、断定しているだけだ」

烏兎は静かに後部座席に腰を落ち着け、しばらくの間、緑ばかりが広がる窓の外を眺めていた。

六花にはさっぱり意味がわからなかった。

点在する家屋。しかし、それも徐々に見当たらなくなるほど山の

奥へと上って行った。林は鬱蒼と茂り、昼の日光が介入する余地もなく、あたり一帯が暗い。舗装されていた道も今では途切れ、人の手が拒んだでこぼこした道が果てもなく続いている。

大空の安全運転が2時間で導き出したそこに、屋敷はあった。

「うわあ・・・なんだコレ・・・」

壮大な土地が切り開かれ、縦横に巨大な屋敷がお目見えした。六花が驚いたのは、その外観が主であったが、ほかに屋敷から人の気配がまったくしないことにひどく驚いた。まるでホラー映画に出てくる化け物の住処に似ていた。

さまざまな家を見てきた烏兎であったが、このように息をしない家を見たのは久しぶりだった。というのは、実は不適切で、この大きな屋敷だって呼吸はしていた。しかし、瀕死の呼吸だ。円満な家族が住まう家というのは、少なからず生き生きとし、どんなに外壁や内壁が古くてもこの屋敷のように淀んだ空気の中に建っていない。生き生きする、というのは、自分の力で周りの淀んだ空気さえもプラスに展開できるというものだ。

「おどろきましたか？　これが須田さんの宝物です。立派なものでしょう」

車をとめた大空の第一声がそれだった。とても誇らしげに屋敷を仰いでいる。彼ら三人がしばらく屋敷の外観を眺めていると、近くの大きな窓が開いた。中から若い男が所在ない細面を出した。

六花と烏兎は、登山客の一人であるか、もしくは屋敷の関係者なのだろうと思っていたが、大空は違った。声を張り上げた。

「あんた、また来ていたのか・・・！　懲りない奴だ！」

「ご無沙汰しております。大空さん、また奇抜な格好をしておられるんですね」

男はすました顔で大空を上から下へ眺め、くすつと笑った。まるで狐の面のように目元がつりあがっている。よほど入念にスーツをコーディネートしたのか、その男の服装は非のうちどころがないほど、完璧だった。

「奇抜だ？　んなことはどうでもいい。さつさと出て行ってくれ」二人の間にただならぬ空気が漂い始めたころ、六花は、開いた窓の隙から老人の姿を見とめた。彼こそがこの巨大な屋敷の主、須田なのだろう。

「大空くん。　帰っていたのかい？」

「須田さん。　ながらく留守にしました。申し訳ないです」

大空は慌てて大きな一礼をして、近くにいた六花の腕をつかんで引き寄せた。

「こちらが例の、事務所のかたがたです。あの一件を解決してください」

須田は、白いひげを蓄えたやさしい目元をした老人だったが、大空が目輝かすばかりで彼の顔は晴れ晴れとしていなかった。どうやら他の問題が生じているらしく、屋敷内にほかの人影があり、須田は今まさにその人物と何らかを話し合っているようだった。

「そこで立ち話も失礼だ。　どうぞ、中に入ってください」

それから大空は急いで六花と烏兎を屋敷内に招き入れた。

「ふああ・・・すげえ・・・」

六花は大きく頭上を仰いだまま、大きなホールのだ真ん中で立ちすくんでいた。屋敷の、一階から二階へと続く吹き抜けに堂々とぶら下がるシャンデリアが、白昼にかかわらずキラキラと煌いて、来訪者を心地よい光で招き入れた。圧倒される六花とは違い、次男はというと、屋敷内をしずかに見回し、何か不可解なことはないかと目を光らせていた。

「さあ、こつちです」

大空が先頭に立ち、二人を先導した部屋はひどく広かった。浩浩とした部屋の真ん中に、須田と先ほどの若い男、それに綺麗に洋装し

た老婦がいた。大空と一晚兄弟が入室すると、さきほどの狐顔の若い男が立ち上がった。それが六花を見て、大仰に目を見開いて驚いた。六花は小ばかにしたような目つきで、ちらりと彼を見ただけであとは目もくれてやらなかった。

一通り烏兔が自分たちの身分を打ち明けると、須田は申し訳なさそうに大空を見た。

「大変、申し訳ないが、今日のところは引き取ってもらえますか」
須田がいった。大空は、えっと大きな肩をあげて驚いた。

「というよりも、あなた方の力は必要ありません。我々でなんとかします」

「何とかならないから、大空さんがうちに依頼したんでしょう。まさか、帰るわけにはいかないですよ」

六花が兄を見上げると、兄はある人物をじっと見つめていた。六花がその視線をたどると、そこにはソファに上品に腰掛ける老婦の姿があつた。白髪が多く混じつた彼女の頭は綺麗に結われ、洋装は抜かりなかった。烏兔の視線に気づいて、彼女はこちらを見向いた。その両眼は憂いに満ちていた。今にも悲しみに押しつぶされて泣き出しそうな表情だ。

「須田さん、私たちのほかに、この屋敷を手に入れたい方々がいらしたのですか？」

「いいえ」

須田は首を横に振った。それから、とにかく帰ってもらえないかと重々願った。

「話が違うぜ！」

「須田さん……。せっかく来ていただいたのに……」

「放っておいても何も支障はないだろう。今は、『柏木さん』と話をつきたいんだ」

仕方なく六花が帰ろうときびすを返そうとすれば、烏兔が突如として口を開いた。

「柏木花実さん、あなたはなぜこの屋敷が欲しいのですか」

柏木花見と呼ばれた老婦は目をぱちくりさせて、次男を見つめた。

「どうして私の名をご存知なの？」

「教えてくれました」

「まあ、いったいどなたが？」

「………。それは、大空さんです」

えっ、と大空がひどく驚いたのは、無理もない。彼が烏兎にこの老婦の名など教えていないし、口にもしていないのだから。

「この屋敷にたいして、大変思い入れがあるようですね」

「どうしてお分かりになるのかしら。そうよ、この屋敷は須田さんの物だけれど、どうしても欲しいのよ。でも、あなた達には関係がないわ」

冷たい人だ、と六花が肩をすくめれば、柏木はクスクスと笑い出した。

「でも、まあ、お話しいたしましょう。ちょうどその訳を須田さんにもお答えしようとしていたところだから」

老婦は懐かしそうに目を細め、ようやく話し出した。

「この屋敷はね、うちの別荘だったのよ」

今からだいぶ前のことになる。

柏木花実が十にも満たないころの話だ。

柏木の両親は、体の弱い花実のために、都会から離れて、田舎に大きな別荘を買った。それが、この屋敷である。今は須田が所有しているが、昔は彼女の両親のものだった。

ここに移ってからというもの、人とのふれ合いは都会にいたころよりもめっきり減ったが、花実の具合は徐々によくなっていった。両親も喜び、三つはなれた姉もともに喜んでくれた。

「あのときが一番幸せだったかしら。当時の思い出はさっぱり覚えていないのだけれど、思い出そうとすれば心が温かくなるのよ」

「ですが、どうして別荘を離れることになったのですか？」

「それは……」

と、柏木はあの悲しみに打ちひしがれた表情のまま続けた。

柏木一家がこの別荘に越してきてから丸一年たったころ、
とある悲劇が一家を襲った。

「大好きだった姉がね、行方不明になったのよ・・・」

花実の実姉が、突如屋敷内で姿を消した。当時、召使は3人いたがどれも顔を真っ青にして彼女の姿を探した。結果、見つからない。母親は泣き崩れ、父親は離れた部屋にこもり黙したままであった。それからほどなくして警察の搜索が始まったが、彼女の姿が見つからないどころか、手がかりさえもつかめない。都会から阻害されたような田舎に駐在する警察も、こんな辺鄙なところまで足を運ばせて熱心に調べる気もなかった。当時、その付近では神隠しなるものが後をたたず、人の子が突如姿を消す事件があいついでいた。だから今回もそれだろうと、警察ならず村の人もよくは動いてくれなかった。

それから三日と経たぬ間に、花見の母親が寝室で首吊り自殺をした。ここで父親は初めて涙を流し、この屋敷にはいられない、と幼い花実の手を引き、屋敷を去ったという。

「あの日以来、屋敷には足を運んでいなかったの。まさか、当時の面影を十分に残したまま、この屋敷が建っているなんて思いもしなかったのよ。だから、今回、本気でこの屋敷にもう一度住みたいと思っているの。大好きだった姉なのに、わたしは彼女のことを何一つとしてはっきりと思い出せないの。この屋敷にもう一度住めば、なにか思い出せるかと思って・・・須田さん、どうかこの屋敷を私に譲ってくれないかしら。お金はいくらでも出します」

須田は顔色一つ変えなかった。というのも大金ときいても、心躍る気がまったくしない。彼はすでに金に飽いたためにこの異境の地に安住を決めたのだ。

「柏木さん。あなたのお話は痛く心に響きましたが、この屋敷を譲

るとなると話は別です。わかってください」

「そうですか」

柏木はあきらめたわけではない。まだ希望に溢れ、自信の満ちた顔で須田を見ている。

と、そこで烏兎が大きなため息を吐いた。しきりに部屋の隅を気にして、顔を悪くしているのが六花にはわかった。

もしや。

「それにしても、この部屋は立派だなあ」

そうでしょう、と大空が場の雰囲気をかえるために、つとめて明るい声を出した。

「寝室だった部屋を、改造したんですよ。大きなベッドをどかしたら広々とした空間が存分に楽しめる部屋なんですよ、実際は」

「へえ、もとは寝室だったの」

と六花は次男をみた。次男はその視線に気づき、不快そうに眉根を寄せた。それでもしきりと寝室の隅を気にすることには変わりはない。つた。

「すみませんが、われわれはそろそろ退室させて頂きます。解決しなくてはならない依頼が他にもたくさん御座いますので」

烏兎がいうと、大空は残念そうに肩を落とした。やっぱり帰ってしまふのかと。

「しかし」

と烏兎は立ち上がる。

「大空さんが不思議な夢を見なくなるようにしてからのことです。クマのぬいぐるみが夜な夜な出歩かないためにも、わたしがとある部屋にて、この奇怪な出来事をおさめてみせます」

六花にも、ましてやその場にいた者達にも、彼がいったい何をしようとしているのかわからなかった。

「大空さん。あなたは背が高い。それに加え、ここにいる誰よりも力もありそうだ。あなたの協力が必要です」

「はあ・・・」

「まずは、大きなハンマーが必要になるでしょう。打ち破ることが大切です」

そうじゃないと、見えてこない、と付け加えた。

太月事務所の三兄弟、ふたたび 4

大人たちは皆、六花と老婦の柏木を残して、ハンマーとやらを探しに屋敷の中に散らばった。

それから30分が経った。

そもそも烏兎うとのいうハンマーがこの屋敷にあるかも疑わしいというのに、彼は「絶対にあります」と言い切ったからすごい。

携帯電話を開くと友人からのメールが三件たまっていた。六花は見もせずに削除した。たちの悪い男子学生もいたものだ。

「あなた、あのかたの弟さんなのね？」

お行儀よくソファに腰掛けていた柏木が、向かいがわに座る六花にむかって満面の笑みを浮かべた。しわが深く刻まれた目元が、彼女が微笑むとよりいっそう深くなる。

「あのかた？ ああ・・・。ハンマーがどうか言った人は、おれの兄貴です。名前は烏兎うとつていいいます」

「まあ、変わった名前なのねえ」

「そう。変わった名前でしょう、ほんとに」

六花は自分の名前を思っ、うなずいた。自分も変わった名をしている、と。

「それは本名なの？」

「本名？ おれのは本名らしいんだけど・・・」

自信なさげに六花がいうと、柏木は目を丸くした。

「らしい？」

「おれにはアレを含めて兄貴が二人いるんです。どっちも名前は変わっていて、烏兎のほかに『玉兎』、本名じゃないんだ。芸名・・・、いや違うな。あれは偽名か？」

柏木は、変わっているのね、と言って頬に軽く手を当てた。

「あなたのお兄さんたちは名前を偽らなきゃいけないほど、悪いことを、してしまったの？」

六花は屋敷の立派な天井を仰ぎ、赤の他人に身内のことをしゃべりすぎた自分を後悔した。それもこれも、暇すぎた口が勝手に運動したがつたのがいけないのだ。

「悪いことはしていないと思います。なぜだか、おれにもわかりません」

本当はなんとなく知っていた。兄二人は、本名が「相手」に知られると、まるごと喰われてしまう職業についている。そのため、生まれたときから本名を伏せて生きてきた。六花にいたっては、まったくそのような気遣いも手間もいらぬ。上の兄二人は、特別過ぎるのだ。平凡に生きている六花とは息をしている世界が違う。

「お兄さんたちの本名はご存知なの？」

やけに知りたがるばあさんだな、と思いつつも、六花は言った。

「知らないです。あの人たちは兄弟のおれにさえぬかりないから、教えてくれません。おれだって、知ったところで手におえる話じゃないようですし・・・」

この先、ずっとこの知りたがりで冒険好きそうな老婦の話し相手をしなくてはならないのか、と六花が目回しそうになったときだ。

「奥様。」

と、若いスーツ姿の男が入り口から顔を出した。手には立派な杖を持っている。

「あら。見つかったの？」

「ええ。見つかりました。奥様には大変わずらわしいことと存じますが、一晩さんが奥様をぜひ連れてきてほしいとのことでした」

まあ、と柏木はよろよろした足つきで若い男のところまで歩いていった。きよとん、とする六花にふんわりと手招きし、部屋を出る。「いったいどこのお部屋にいらっしゃるの？」

「はい。来てくれたらわかる部屋、とのことでしたが・・・」

若い男が導いた部屋の前にたどり着くと、柏木は言葉を無くした。ちらり、と六花が彼女の顔を盗み見すると、柏木の唇が震えていた。その震えが恐れからくるものか、はたまた悲しみ・歓喜からくるの

か、六花にわかるはずもなかった。ただ六花は、さきほどから鳴り止まない携帯電話のバイブレーションを感じていた。

「奥様にはるばる来ていただきましたよ」

大仰に若い男はそういつて、入室した柏木の背中に厳かな一礼をした。

「それで、烏兎さん！俺にいつたいなにができるっていうんです？！」

しつかり固定された三脚にまたがり、大きな頭をしたハンマーを両手に高々と掲げた大空の姿は、今から何か悪いことをしてかしてくれそうな悪漢に見えた。六花は少しニヤリとしてしまう。

その場に集まった者たちは、烏兎を除いてすべてが不思議そうな顔をしている。大空は特に不思議でたまらないらしく、三脚にまたがる自分がこれから何をすればいいのかと不安でたまらないらしかつた。

「まあ・まあ。大空さん、あなた、ハンマーなんか握らされて・。一晩さんとやら、いまから何をわたしたちに見せてくれるというのですか？まさか、大空さんにハンマーでぶたせたりしませんよね？」

若い男は、三脚のそばに立つ烏兎をにらんだ。隅田は途方にくれた顔で天を仰いでいた。

「それでは皆さんが集まりましたので、話をはじめます」

烏兎は完全に彼を無視した。

若い男は屈辱に満ち、下唇を噛んだまま押し黙ってしまった。

「ご覧のとおり、今から大空さんには手にするハンマーで天井を破っていただきます」

「な、なんと・・・！」

「まあ・・・」

隅田も柏木も気が気でない。天井を打ち破る？そんなことして

もらっては困る、と隅田がここになつて初めて顔を紅潮させて怒鳴った。

「なんてことを言い出すんだ、あなたは！　ここは私の家だ。私の家を壊してみろ、け、警察を呼んでやる！！」

ハンマーを握る本人は蒼白な面持ちで、烏兎を見下ろしている。こんなこと、できればしたくない、のが本音だ。加えて恩人の隅田に仇に熨斗をかけて返している状況を作り出してしまったようでも何とも居心地が悪い。三脚の上であるし。

だが、天井をぶち破ることで、今回の奇怪な事件は止むのだということから信じたかった。

「あなたのお兄さんはいつも奇抜なかななの？」

と柏木は傍らの六花にたずねた。

「今日は特別疲れているんだろうと思います。　兄も壁の一枚や二枚、打ち破りたくもなります」

適当なことをいう、と烏兎はちらりと三男をにらんだ。

「大空さん、お願いします」

「ちよつ、ちよつと待て！　家主の了承も得ないであなたは勝手なことをしようとするのか。天井にいったい何があるというんだ。

うん？　金なんて一銭も見つかりはしないぞ…っ！」

怒りに荒れ狂う隅田を残して、柏木が穏やかに微笑んだ。

「いいじゃないですか」

「なんですって…！！？」

「天井の一枚や二枚。　ねえ、六花さん」

うん、と六花はここも適当に頷いておいた。あまり言葉数を多くしないほうが良いのは隅田の怒りに指一本も触れたくないからだ。

「困りますよ、柏木さん。　あなたが決めていいことじゃない」

「天井ならこちらが弁償させていただきます。　ええ、喜んでね。

この方は、天井に何かがあるからそうされているのでしょうか？
理由のない行動は、この世に何一つありませんことよ」

ですが、と隅田が悔しそうに声をかみ締める。しかし、ここで諦め

たのか脱力した足取りで部屋の隅にある椅子に倒れるように腰掛けた。

「大空さん、あなたはいつも夢をみると仰いましたね」

ええ、と大空は大きく頷いた。ハンマーを掲げた手をゆっくりと下ろす。

「ここにいる私達にもう一度お話してくださいますか」

「はい。俺はこの屋敷に働かせてもらうようになってから、変な夢を見るようになったんです。まさに、この部屋を見下ろす夢なんです。この天井から、このベッドを見下ろす、という夢です」

柏木は興味深そうに耳を傾けている。目は、部屋をくまなく眺めている。この一瞬一瞬を逃すものと大切そうに部屋中を見回しているのだ。

「不思議な夢ね・・・」

柏木はクスクスと笑った。だが大空は真剣に話を続けた。しゃべり終わった頃には興奮しきっていた。例のクマの話になると柏木はさらに微笑んだ。彼女の理由不明なその懐かしそうな笑顔を、六花は見逃せなかった。

「それで、この部屋の天井から見下ろす夢を彼が見るから、あなたは天井を破壊しようとお考えなのですか」

若い男が、胡散臭そうに烏兎を見ると、見られるほうは大空にハンマーを構えるように指示し、

「はい。ここを破れば、大空さんの夢はたちまち止みますし、クマの姿を見るお客の数も皆無になります。ただ、天井が落ちるだけです」

といった。

「大空さん、お願いします」

大空はごくりと唾を飲み下し、天井に狙いを定める。しかし、家主に許可をとるのを忘れない。

「隅田さん、天井を打ち破っていいですか？」

声がかんがしか震えている。

「・・・ああ・気が済むまで、勝手にしてくれ」

よし、と六花が場違いにも声を張り上げる。この中で一番エキサイトしているのは彼くらいだ。天井を打ち破ることをパーティーとでも考えているのだろうか。何が飛び出すのかわからないビックリ箱を覗き込むように、六花は天井をじっと見つめる。

大きくハンマーが振りかぶられた。

せつな、六花は耳にした。

烏兔がつぶやいた言葉を。

「むごい」

・・・と。

太月事務所の三兄弟、ふたたび 終わり

そもそも、

「私」たち家族がこの屋敷に引っ越してきた理由はひとつだけだった。

病弱だった私の治療のために。

何のためでもない、ただ病気がちな私の体を心配して、両親が選出した場所だった。

母は毎日わたしに添い寝する。父は幼い私が寂しくないようにと私のそばで仕事をしたし、召使は私に物語を聞かせてくれた。みな、沈みがちだった私の心を明るくするために粉骨細心してくれた。本当にありがたかった。

いつだったか。

同じ屋敷に住んでいながら、疎遠のように感じた姉が愛しく思えていた日は。

「お姉さん！」

私はうれしかった。寝込んでいた私の寝室に訪れ、姉が私を見舞ってくれたのだと思ったとき、心が温かくなった。延ばした手を姉は冷ややかに見下ろし、こんなことを言った。

「花実さん。どうして私からお父様とお母様を奪おうとするの？」
言葉を返そうとした。

返そうとしたが、その瞬間、姉の冷たい目がかつと見開き、その暇さえ与えなかった。

「わたしから全てを取らないで！取らないで！！」

ぐっ、と私の口と鼻が塞がれた。もがいたが、姉は強かった。募るにつのった憎しみの心が、姉の力を数倍強くした。自分の意識が今にも途切れそうになった時、ドアが開き、父が急いで姉を引き離す

姿を見た。朦朧とする意識の中、姉の手から「クマのぬいぐるみ」
が取り落とされたのを見とめた。あれが、わたしの口と鼻を塞いで
いたのだ。

母親が泣きながら私の名を呼ぶが、私はそれから気を失った。

姉は寂しかったのだ。怖かったのだ。

いままで当然のように自分を構ってくれた人たちが次々と奪われて
いくことが、ひどく怖かったのだ。ただベッドに横になるだけの、
無力な妹が自分の手の中にあつた物を次々と奪い取っていくことに
底知れぬ恐怖を覚え、いつそのこと消してしまえばいいと思ったの
だろう。

「な、なんてことだ………！」

隅田は完全に腰を抜かしてしまい、今にも泡を吹きかねないほど動
転していた。若い男は口を抑えて、吐きかねないし、大空は三脚に
跨ったまま瞬きを忘れていた。

烏兎は、柏木を見向いてたずねた。

「あなたの、実姉ですね」

ええ、と柏木は微笑んだままうなずいた。その両眼から涙が止めど
なく

こぼれ、ベッドの上に転がる天井の残骸と、うつ伏せに落ちた白骨
化した死体に触れた。しわが目立つ両手でそつと小さな死体をなで
た。

「お姉さん、ごめんなさい……。わたしが、わたしが、あなたを
こんな目に……」

ぼろぼろと涙を流す柏木が触れる、その白骨化した死体の名は、柏
木美緒。花実のみつつ離れた姉だ。

「姉が行方不明になったのは、私が原因なのよ。父が姉をあやめてしまうのを、私はこの目で見ていたの。父は気づかなかったけど、姉の目は盗み見している私の臆病な目と、ちゃんとあっていた。わたしは止めにも入らなかった・・。ひどい、子だった・・。それを、やっと思いい出したわ。わたしも、わたしのもとから尊い物を奪い返そうとする姉が怖かったのかもしれない・・。」

白骨化した遺体は何も語らない。何十年の間、果てしない孤独とともに隠されていたのだ。

それから烏兎は立ち上がり、花実にいった。

「お姉さんを供養してあげてください。他の誰の手でもなく、あなたの手で」

事務所に戻ったとき、六花の腕時計はPM8:00を指していた。あれから色々大変だったのだ。大空は三脚に乗ったまま、放心状態に陥ってしまったし、若い男は気を失うついでに壁に頭を打ちつけてしまって、その場を落着けるのに苦労した。

「あ。電気がついてる」

珍しいことに事務所に灯りがともっている。薄汚れた窓には二つの影がうつっている。ひとつは長男で、もうひとつは隆一のものだった。

「ただいま」

六花がまず最初に事務所に入った。そのあとをよろよろした足取りで次男が続いた。

「おお。お帰り。二人ともご苦労だったね」

長男の玉兎は澁刺とした笑顔で弟二人を迎えた。事務所の汚らしい

ソファには、太月事務所で働くメンバーの一人、隆一が新聞片手に座っていた。

「六花、明日は学校に行くんだよ」

「わかってるよ・・・」

「それから烏兎、君は次の依頼が入っているからね。僕とすぐに出発だ」

「・・・」

返事もない。疲れきった次男を哀れんで、隆一が苦笑している。

「それでは、隆一。六花がちゃんと学校に行くか見送ってくれ。今から僕と烏兎は次の依頼に向かうから」

次男は目をかっと見開き、やがて重たい体をソファから起こし、機械的に両足を動かして事務所を出て行った。あとを軽やかな足取りの長男が追う。

烏兎は朝っぱらから働きづめだ。これはひどい、と六花も思ったらしく、

「いつか、烏兎は過労でぶっ倒れるかなあ」とつぶやいた。

「なんだ、そりゃあ・・・」

と隆一が笑った。

「兄貴たち、いつもああでしょう？毎日毎日ほたらいて、もって帰ってくるお金といたら加賀屋のおばさんのと比べ物にならないくらいのおちっぱけな金額だ。それでおれを学校にいかせてくれてるんだ。すごいよ・・・兄貴たち」

「そうか。お前も兄貴のありがたみを知ったか」

「うん」

隆一は一昨日の新聞をおさなりにたたんだ。

「お前の兄貴たちもな、今のお前のように、お前の親父さんの背中を見て育ったんだよ。お前の親父さんは、あいつらの数十倍は働いていたぜ」

へえ、と六花は驚いた。

六花の父親。

彼のことは、また別の機会に語るとしよう。

「隆一さん、おれ、久しぶりに学校で勉強がんばってみるよ」

「おお。まるで健全な高校生のようだな」

「まるで、じゃないよ。隆一さん。おれは根っからの健全な高校生なんだから！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4832c/>

ネジリマ帳

2010年12月4日04時47分発行